

全体講評（国語）

本学では、現代文・古文を通じて、傍線を付けて設問の箇所を明示することなく、内容に関する問いを出している。これは、いたずらに問いを難しくするためのものではない。問いを順に解くことによって、現代文は、文章の主題を正しくとらえることができるようにしたものであり、古文については、文章の展開が正しく理解できるようにしたものであって、いずれも、ふだんからこのような問題意識をもって読んでほしいという出題者からのメッセージが込められたものである。そのため、正答の選択肢を連ねると、現代文の場合には、文章全体を要約したものと近くなり、古文の場合には梗概のようになっている。つまり、本学の出題形式は、文章を正しく理解しているかどうかを見るのに不可欠なのである。このような本学の考え方は、受験生や関係各位にも次第に浸透しているようである。

出題者は、現代文と古文を合わせて平均6割台の得点率になることを目安に問題をつくっているが、近年得点率が上昇傾向にあるので、本学の出題形式への対応が進んでいるものと思われる。ただし、今回は古典で6割を切るのがいくつか見られ、古典の基礎力の充実が求められるように思われた。

現代文は例年やや長い文章を出題している。内容はさまざまな分野にわたっているので、日ごろから多くの文章に接するようになるとともに、文章を精読することにより、読解力を養っておくことが必要である。また、現代の私たちに身近な問題や世界的に重要なテーマについて、常に問題意識をもっていることが大切だと思う。

現代文においては、基本的には評論をとりあげ、マークセンス方式の問いでは内容把握の問題を中心に出题した。受験生の読解力をみることを重視したためである。一部の試験では、記述式の内容把握の問題を1題出題した。ここでは、問題文の内容を正しく理解するとともに、設問に対して指定された字数のなかで自分の考えを的確に表現することが必要である。

なお、本学の現代文の問題では、問題文をほぼ原文のままの形で示すようにしている。問題文の表題、小見出しや出典名も明示するようにしている（設問の都合により小見出しを削除する場合もある）。それらは文章の内容を端的に表したものであって、論旨を正確につかむための重要な手がかりとなるものだからである。問題文を読む場合には、これを単なる小見出しや出典名だと見ないで、本論の内容とくらべあわせることによって問題文を正しく理解するようにしてほしい。

本学では、他大学の問題によく見られる、いわゆる空欄補充の問題を出していない。これは、空欄補充の問題では受験生の実力をはかることはできないと考えているためではない。それどころか、最も短い形式で、受験生の実力をはかるのに適した設問であると考えている。では、なぜそれを出題しないのか。それは、問題文や注などから知りうるすべてを参考にしながら、設問を手がかりとして問題文を理解してもらいたいと思うからである。本学で最も重視し、また工夫しているのは、文章をどのようにして正しく読み解くかということなのである。

その他、現代文の問題文中にある漢字を用いて、大学入学共通テストで行われているものと同じ形式の語彙の問題を出題している。本学では、一部の試験に記述式の漢字の書き取り問題があるが、それとは別に、マークセンス方式で語彙力をみるために出題しているものである。そのために、通常の書き取りの問題とはちがって、個々の漢字としてはやさしい漢字も出題されているが、それらを熟語の形で問うことによって、語彙力を試すものとなっている。出題した漢字は、問いの漢字も、選択肢の漢字もほぼ常用漢字の範囲である。それらの問題の中には、よくできている問題も多かったが、正答率が極端に低いものもあり、受験生の語彙力の差が表れている。こうした語彙力は一朝一夕に身につくものではない。日ごろの読書の蓄積によって語彙力を身につけるようにしたいものである。

古文においては、例年どおり、平安時代の物語やそれを受けついだ擬古物語を中心として出題し

た。本学の問題では、リード文や注を可能な限り詳細に付すようにしており、特別な知識がなくても、日常の学習の積み重ねによって身についた読解力で十分解くことができるようにしている。

人間関係や場面などストーリーの把握力を求める問が多かったが、物語作品のおおまかなストーリー程度は、学習しておいてほしい。ストーリーがわかっているかどうかで、解きやすさもかわってくるようである。また、和歌を問う問題が組み合わされている場合があるのも近年の傾向である。和歌の内容のみならず技巧まで出題されることがあり、技巧の理解によって和歌の理解も深まるので、この点においても日頃から学習しておいてほしい。いずれにせよ、基本的な古文単語の確実な理解や基本的な古文の読解知識があれば、正答に至れるはずであり、やはり、基本的な読解力を身につけておいてほしい。

古文を読み解くには、古文の基本語彙、文法的知識、文脈把握の力、歴史的な知識などが必要であることはいうまでもないが、本学のマークセンス式の問題では、むしろそれらを直接問う形をとらずに、それらに基づいて内容が正しく理解されているかどうかを見る設問の形で出題し、受験生の読解力を見るようにしている。基本語彙の表面的な意味だけを暗記しているような場合、受験生の実力の有無がはっきり表れ、概して正答率は低くなっている。古文の重要語句や文法の基礎知識の習得は言うまでもないが、それだけにとどまらず、それらに基づいて文章を精読する習慣をつけるようにしてほしい。一方、多くの古典に接することによって、古文特有の表現に慣れ、作品を理解する力を高めることも必要である。

いつている。この論稿が最初に発表されたのは一九七〇年代であったから、音読から黙読への転換が最近のことに過ぎないという見立ては、当時においてもリアリティのあるものとして受けとめられたと思われる。

しかしながら、音読の時代と黙読の時代が、^{*3} 截然と二分される歴史的な段階であったとみるなら、それはカジョウな二分法というべきであろう。というのは、江戸時代にも黙読をする多くの読者が存在したと思われるからである。たとえば、^{*4} 長友千代治は『近世貸本屋の研究』のなかで、貸本屋の行商に関する次のような川柳を紹介している。

かし本や将基さすうち見られ
（つわの水・安水）^{*5}

貸本屋は、行商で本を貸す商売をしている者のことであり、長友によれば天保三年（一八三二）の江戸には八〇〇軒ほどあったほか、大坂にも、文化一〇年（一八三三）から文政末年（一八二九）頃までに三〇〇軒など、各地に貸本屋があったことが知られている。右の川柳は、貸本屋が常連の家上がり本を見せるところであるが、客に誘われたのか将棋を指すうちに思わずそれに熱中し、商売物の貸本をただで読まれてしまったというのである。お客さん、この本いかがですが、と商売にかかる頃には、いま全部読んだ、というわけである。黙読でなければ成り立たない話であり、その滑稽さが誰にでもわかるということ、黙読が普通におこなわれる読書法であったことを示している。

（中略）

『江戸時代の書物と読書』において長友が紹介する次の句も、黙読を暗示している。

寝そびれた晩に読んでる字拾遺
（柳多留・二七）^{*6}

寝そびれて一人深夜に『字拾遺物語』を読んでいるというのである。すでに皆は眠って静まりかえっているのだから、音読と考えるがたいだろう。ここには、先に近代読者の特質として述べた、一人孤独に書物と向き合う読者の姿が描き出されているといえよう。

^{*7} 横田冬彦は、摂津川辺郡伊丹町の酒造業者八尾八左衛門が、一七三〇年から一七三五年までの間に記した日記をもとに、八左衛門の読書について検討している。横田冬彦『近世民衆社会における知識階級の成立』。それによれば、八左衛門の読書は、「蚊帳内へ灯を入れ、読本机においてなされるものであり、思索をともなう孤独な黙読であった。その意味で、八左衛門の読書も前田愛のいう近代読者のそれにはかならないと、横田はいう。

このように近世においても普通に黙読がおこなわれていたことは、少なくとも近世史研究者の間では共有された感覚となつていっているのではない。

明治期に、人々の音読をする様子がさまざまに書き留められるようになったのは、近世的な読書の残存を示すというよりも、むしろ音読をする読者が明治期に激増したことを示すものだったのではないだろうか。学校教育の普及は、識字者を急速に増大させていたが、中途退学者も少なくなかった状況を考えれば、多様なレベルの識字者が社会に送り出されていったと思われる。このような識字者のなかには、読書のために音読が必要だった者も多数含まれていたと思われる。他方で、活版印刷によって新聞や書物などの刊行物は激増していたから、こうした刊行物を読む機会もまた激増していたはずである。こうして、音読する読者と、読書する機会が同時並行的に増大した結果が、音読問題だったのではないかと考えられるのである。こうして、音読する読

小学校就学率が一〇〇%に接近し、卒業率も上昇していったら、黙読の可能な読者の世代がゼンジ形成されていくこととなったであろう。明治期に一時的に増大した音読する読者の割合は次第に減少し、図書館においても音読禁止の規定を事々しく定める必要もなくなっていくのではないだろうか。

要するに、音読と黙読は、近世期と明治期のどちらの時代にも存在していたのであり、截然と時期区分されて存在したのではない。^{*8} 大黒俊二が人々のリテラシーを、^{*9} スペクトル状に分散したものと捉えていたように、読書という実践もまたスペクトル状に展開していたのだと考えることができるだろう。音読により平仮名文をようやく読解できる者から、漢字仮名交り文を黙読

できる者、漢文訓読体を律動感をもって朗唱できる者など、どの時代にも、さまざまな仕方でものを読む実践者が、多様なかたちで存在していたものと思われる。

口語体が定着し、活版印刷により大量に発行される新聞・雑誌・書籍などが人々に届くようになると、このような読書の多様性は次第に減弱し、音声の律動感に依拠しない黙読が読書の標準的なありようとして人々に受け入れられていくこととなっただろう。前田愛がいう近代読者とは、明治期に多様性を増し、一時的に大量の音読者を生み出していた読書のありようが、次第に黙読へと齊一化しつつあった状況を捉えたものではないかと思われるのである。

孤独な読者

近代読者とは、単に黙読をする者というだけでなく、個人として「読書」という実践をなす者であり、孤独に書物に向き合い、そのなかで内省的に自我を形成する者でもあるといわれる。つまりは「孤独な読者」である。すでにみたように、このような孤独な読書は、^{*10} 近代のセンパイ特許ではなく、近世社会にも存在したものであった。しかしながら、近代読者はじつは別の意味においても「孤独な存在」であった。つまり孤独な近代人であったということである。近代読者の孤独の本質は、単に一人で読書をするといったことにとどまらず、読書をする一人一人の主体が近代に特有な孤独を抱える存在であったということにも思われるのである。

近代人の孤独と、その危うさについて述べたのは、シュウチのとき^{*10} エリッヒ・フロムである。フロムは、中世の人間には自由がなかったが、与えられた身分のもとで安定しており、自分が何者であり何をなすべきかを悩む必要はなかったという。これに対し近代人は身分制から解放されて自由であるが、それは中世まで人間を包み込んでいた一次的な絆を喪失することでもあり、その喪失は孤独のなかで、自分が何者であり何をなすべきかを自己決定しなければならぬ存在、つまりは「個人」になったのである。人間はしばしば、孤独と自由とに耐えられないものである、とフロムはいう。近代学校制度は、このような近代人を創出するうえで決定的な役割を果たした。すでにみたように、日本における近代学校制

度は身分制の廃棄と同時に並行的に展開された。^{*11} 学制布告書や、無数の就学告諭などのいたるところに、上下身分の区別なく学ぶべきことが説かれ、同時に、身分制を廃棄する数々のシサクが断行された。これらにより、自らの存在が生まれついた身分によって自動的に決定されるシステムは原理的に否定され、人々は、自己の存在を自己自身によって決定し得る（しなければならぬ）こととなったのである。

近代読者がおこなう読書の実践は、識字率の上昇や、口語体・活版印刷術などの技術的達成を待って一般化する、読書におけるひとつの技法にほかならなかったが、それをスイコウする主体が、以上に述べたようなプロセスで創出される「個人」であったことは重要である。そのような意味での個人が、一人孤独に書物に向き合う姿こそ、私たちが近代読者というものに見出してきたイメージだったのではないだろうか。

（八）^{*12} 鉦友広『読み書きの日本史』による）

注 *1 前田愛『日本近代文学研究』(一九三二)一九八七 *2 永領重敏『出版文化 大衆文化研究』(一九五五) *3 概然区別がはつきりとしたさま *4 長友千代治『日本近世文学研究』(一九三六) *5 うつわの水 *6 柳多留『江戸時代の川柳狂句集』 *7 横田冬彦『日本近世史研究』(一九五三) *8 大黒俊二『中世リテラシー研究』(一九五三) *9 スペクトル分光器で分解して波長の順に並べた色の帯 *10 エリッヒ・フロム『ドイツ生まれの精神分析家 社会思想家』(一九〇〇)一九八〇 *11 学制布告書一八七二(明治五年)に制定された日本で最初の体系的な教育法令である学制の趣旨・理念を説いた文書 *12 就学告諭『府県知事や地域指導者が発した、学校に入学しそこで学ぶことを勧める告諭』

問1 太線部の「マサツ」①「シサク」を漢字に改めよ。

問2 前田愛のいう音読と黙読についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 孤独で内省的な、黙読による読書をおこなう読者を前田愛は「近代読者」と呼んだ。一方、近代読者にはあらざる読者とは、共同でおこなわれる音読をする読者のことであり、漢籍の素読は、儒学問塾などから家庭で口授されるものへと変化した。草双紙の絵解きは、近世期を過ぎ明治期になっても家庭の炉端に満ちていたと前田はいつている。
- b 孤独で内省的な、黙読による読書をおこなう読者を前田愛は「近代読者」と呼んだ。このような読書法は近代以降に成立したものであって、近代までの読者は、漢籍の素読を祖父・父・兄など、草双紙の絵解きを祖母・母・姉などが、儒学問塾や家庭の炉端で音読によっておこなうのが普通の読書の在り方であったと前田はいつている。
- c 孤独で内省的な、黙読による読書をおこなう読者を前田愛は「近代読者」と呼んだ。一方、近代読者にはあらざる読者とは、共同でおこなわれる音読をする読者のことであり、漢籍の素読と草双紙の絵解きでは、意味よりも読みを重視して、繰り返し音読されるのが家庭の炉端に満ちていた。そのような在り方こそが読書の通常の姿であったと前田はいつている。
- d 孤独で内省的な、黙読による読書をおこなう読者を前田愛は「近代読者」と呼んだ。近代以降に成立した黙読による読書法に対して、漢籍の素読と草双紙の絵解きに典型的であるような、共同でおこなわれる音読をする読書の在り方が、近世期を過ぎ明治期になっても普通であったと前田はいつている。
- e 孤独で内省的な、黙読による読書をおこなう読者を前田愛は「近代読者」と呼んだ。一方、近代読者にはあらざる読者とは、共同でおこなわれる音読をする読者のことであり、漢籍の素読と草双紙の絵解きの読者の在り方にその典型例があるが、いずれも繰り返し音読するのが読書の通常の姿であったと前田はいつている。

問3 前田愛のいう近代読者成立以前における読書が現在のものへと変貌した理由の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 近代読者成立以前の読書は、リテラシーの水準の低い者に十分な識字力を有する者が読み聞かせることを意味したが、学校教育によるリテラシーの水準の向上を基礎として、読書はようやく孤独で黙読なものへと変わり、口語体で書かれる書物が活版印刷術により大量に生産されるようになって、読書が現在のものへと変貌した。
- b 近代読者成立以前の読書は、個室でおこなわれる孤独な実践などではなく、囲炉裏を囲んで共同におこなわれる実践であったが、音読の習慣が黙読へと変わり、また言文一致体が書物の文体に取って代わったため、リテラシーの水準が向上し、口語体で書かれる書物が活版印刷術により大量に生産されるようになって、読書が現在のものへと変貌した。
- c 近代読者成立以前は、リテラシー水準が低かったが、学校教育によりリテラシーの水準が向上し、個人で自立した読書をおこなうことができるようになり、また黙読によっても触知しうる散文リズムの形式である言文一致体が創出され、口語体で書かれる書物が活版印刷術により大量に生産されるようになったため、読書が現在のものへと変貌した。
- d 近代読者成立以前は、人が書物を読んでいる声に耳を傾ける行為も読書の一形態であったが、やがて読書が、個室でおこなわれる孤独な実践などではなく、本質的に共同の実践となり、学校教育によるリテラシーの水準の向上を基礎として、口語体で書かれる書物が活版印刷術により大量に生産されるようになったため、読書が現在のものへと変貌した。
- e 近代読者成立以前は、リテラシー水準が低かったが、学校教育によりリテラシーの水準が向上し、漢籍素読に由来する漢文訓読調や草双紙の七五調などから、朗読、朗唱などといった音声をともなう言文一致体へと文体が取って代わり、口語体で書かれる書物が活版印刷術により大量に生産されるようになったため、読書が現在のものへと変貌した。

問4 永嶺重敏のいう公共的な空間における音読の退場についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 明治期になっても音読をする人はきわめて多かった。なかでも音読する読者もつと多かったのは、汽車や図書館などといった新しく登場した公共的な空間であったが、人前で音読することは他人が迷惑するからやめなければならないと問題視されることにより、人々が長く慣習化してきた音読という身体的行為は次第にみられなくなっていた。
- b 明治期になっても音読をする人はきわめて多かった。しかし、汽車や図書館などの公共的な空間では、音読が否応なくひとつの迷惑行為問題として立ち現れることになり、人々が長く慣習化してきた音読という身体的行為が、西洋の公共空間の論議が激しいマサツを来し、その結果、音読は次第に退場させられていった。
- c 明治期になっても音読をする人はきわめて多かった。車中において新聞などを取り出し音読する者は、毎度必ずいたのに対して、汽車以上に沈黙が支配すべき公共的空間である図書館では、音読を禁止する規定がいたるところで定められ、揭示されていたため、遅くとも昭和初期には音読は退場を余儀なくされた。
- d 音読する読者は、明治期になっても汽車や図書館などといった公共的な空間でしばしばみられた。このような空間における音読が、否応なくひとつの迷惑行為問題として立ち現れ、人々が長く慣習化してきた音読という身体的行為や西洋の公共空間の論議と、黙読による読書の習慣が激しいマサツを来した結果、音読は次第に黙読へと移行していった。
- e 音読する読者は、明治期になっても汽車や図書館などといった公共的な空間でしばしばみられた。しかし、汽車における音読が、否応なくひとつの迷惑行為問題として立ち現れたことが影響を及ぼして、汽車以上に沈黙が支配すべき公共的空間である図書館でも、遅くとも昭和初期には音読はみられなくなった。

問5 江戸時代と明治期の読書の在り方について、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 江戸時代にも黙読をする多くの読者が存在したのであり、音読の時代が、截然と二分されるわけではない。近代読者の特質とされる一人孤独に書物と向き合う読者の姿は、近世においては普通だったが、明治期には学校教育の普及によって、黙読よりも音読する読者が多くなった。その結果が、音読問題だったのではないかと考えている。
- b 江戸時代にも黙読をする多くの読者が存在したのであり、近代読者の特質とされる一人孤独に書物と向き合う読者の姿も普通に見られた。しかし、明治期には音読をする読者が激増し、それと同時に活版印刷によって新聞や書物などの読書のために音読が必要な刊行物も増大した。その結果が、音読問題だったのではないかと考えている。
- c 江戸時代にも黙読をする多くの読者が存在したのであり、思索をともなう孤独な黙読も誰もおこなう普通の読書法であった。しかし、明治期における学校教育の普及は、識字者を急速に増大させるとともに、音読する読者と、読書する機会が同時に増大した。その結果が、音読問題だったのではないかと考えている。
- d 江戸時代にも黙読は普通におこなわれ、一人孤独に書物と向き合う読者も存在していた。しかし、明治期には近世的な読書の残存を示すようなものではなく、むしろ音読をする読者が明治期に激増したのであり、音読する読者と、読書する機会が同時に増大した。その結果が、音読問題だったのではないかと考えている。
- e 江戸時代にも黙読は普通におこなわれ、一人孤独に書物と向き合う読者も存在していた。一方、明治期の学校教育の普及は、識字者を急速に増大させていたが、その識字者のなかには、読書のために音読が必要だった者も多数含まれており、同時に活版印刷による刊行物を読む機会もまた増大した。その結果が、音読問題だったのではないかと考えている。



問6 音読から黙読への転換について、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 音読と黙読は、近世期と明治期のどちらの時代にも存在していたのであり、截然と時代区分されるものではないが、明治期には読書という実践がスペクトル状に展開するようになり、口語体の定着と活版印刷による刊行物が増大するのにもない、多様なかたちで存在していた読書のありようが変化し、次第に黙読へと齊一化していったと考えている。
- b 音読と黙読は、近世期と明治期のどちらの時代にも存在していたのであり、截然と時代区分されるものではないが、明治期に一次的に読書の多様性が増大したことによって、口語体が定着し、活版印刷による刊行物が人々に届くようになると、音声の律動感に依拠しない黙読が読書の標準的なありようとして人々に受け入れられていったと考えている。
- c 音読と黙読は、近世期と明治期のどちらの時代にも存在していたのであり、読書という実践もまたスペクトル状に展開していたが、近代読者が一次的に増大したのにもない、口語体が定着し、活版印刷による刊行物が人々に届くようになると、読書の多様性は次第に減弱し、黙読が読書の標準的なありようとして人々に受け入れられていったと考えている。
- d 音読と黙読は、近世期と明治期のどちらの時代にも存在していたが、小学校の就学率と卒業率が上昇し、黙読の可能な世代が形成されていくにしたがい、音読する読者は次第に減少し、読書の多様性が失われ、口語体で書かれた活版印刷の刊行物を黙読するのが読書の標準的なありようとなり、次第に黙読へと齊一化していったと考えている。
- e 音読と黙読は、近世期と明治期のどちらの時代にも存在していたが、明治期に一次的に多様性を増した近代読者の在り方は、口語体の定着と活版印刷による刊行物が増大することによって、次第に音読から黙読へと齊一化する状況をもたらし、黙読が読書の標準的なありようとして人々に受け入れられていったと考えている。

- 11 -

問7 二重傍線部㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- ㉔ カジヨウ
 - a 必要以上にジヨウチヨウな説明は遺届である。
 - b 株式会社が利益ジヨウヨ金を株主に分配する。
 - c ゲンシヨウに満足しては成長できない。
 - d 役所に住民からのクジヨウが寄せられる。
 - e ジシヨウジバクにおちいり身動きがとれない。
- ㉕ ゼンジ
 - a 仏教はインドから中国を経て日本へとトウセンしてきた。
 - b トラブルの原因を至急調査のうえゼンシヨとしてほしい。
 - c クウセンセツゴのともない出来事が起こる。
 - d 長びいた病気がようやくケンカイにこぎつける。
 - e 寺でサゼンを組むことには心をリラックスさせる効果がある。
- ㉖ センバイ
 - a 成功のゲンセンはチャレンジ精神にある。
 - b 交際相手の愛情のシンセンをおしはかる。
 - c サッカーの試合の放映権をドクセンする。
 - d 新しい商品をテレビ広告でセンダンする。
 - e センオウな領土の支配に苦しめられる。

- 12 -

㉔ シュウゴ

- a 運転技術にシュウジユクしたドライバ―。
- b 書画のユウシュウ作品を展示する。
- c 宿命の対決にシュウネンを燃やす。
- d 大阪駅のシュウヘンには高級ホテルが多い。
- e 知性をケツシュウして最先端の研究を行う。

㉕ スイゴウ

- a 安心して住み続けられる街づくりをスイシンする。
- b リーダーがソッセンスイハンして仲間を引っばっていく。
- c 多くの人の協力により困難な仕事をカンスイする。
- d 連合軍をトウスイする最高司令官には絶大な権限がある。
- e 給料を大幅にアップして社員をコスイする。

- 13 -

問8 筆者のいう「孤独な読者」が抱える近代に特有な孤独とはどのようなことか、五十文字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

- 14 -

二 次の文章は、『浜松中納言物語』の一節である。中納言は唐から帰国後、初めて参内する。御門との時間を過ごしつつも、唐で出逢った女性のことなども思い出していた。以下の文章を読んで、後の問いに答えよ。

内裏よりしきりに召しあれば、参りたまふ御ありさまおろかならず。めでたき御装束のにはひをととのへて、めづらしう立ち出でたまふ、目かかやくばかりなり。世に知らぬ御にほひ、百歩のほかまをばかりにて、日ごろも降り積る雪、今もうちそそきたすに、いとど光を添へたる御ありさまにて、行き来の道の人々も、めづらしう見たてまつる。陣あゆみ入りたまふより、何の深き心もなげなるものども、女官どもの司などさへ涙落として見たてまつりおどろく。まいて御方々の、細殿のうちにこぼれ出でて、苦しきまで見送るを、後目にかけつつ過ぎたまひぬるも、口惜しうねたげなる。

御前に召しありて参りたまへるに、年ごろ隔てて御覧するは、あさましうこの世のものならず、御目もおどろきて、とばかりものも仰せられて、涙落とさせたまへる御けしき、かたじけなきに、われもえん強からず。かの国にありけむこともなど、くはしく問はせたまふに、御前をよみに立ち出づべうもあらず。暮れぬるに、雪もなほ降りまきりつつ、月もいとおもしろう澄みのほりたり。御門遊びなどもすまじうおほえて、ことにもの言なども聞かだむ過ごしつるに、とて、御遊びはじまる。中納言は、この世のことどもめづらしうおほされて、見し世の春に似たりしほどなと、ことにつけつみじうおほさるれば、心澄ましてかき立てたまへる箏の琴の音、おもしろうあはれなることかきりなし。例のことなれば、涙とどむる人なかりけり。めづらしげなきことなれば、えぞ書きつつげざりけるぞ。御衣賜はりたまふ、つねのことなりかし。

〔御門〕別れては雲居の月もくもりつつかばかり澄めるかげも見ざりきと仰せごあるに、いとめてならぬことなれば、かたじけなうおほす。
〔中納言〕ふるさとのかたみぞかしと天の原ふりさけ月を見しそかなしきと奏したまひて、下りたまふまに舞踏したまふ。
夜更けぬれば、中宮の御方へ参りたまへり。かならずさやあらむ、と用意したるさへ心にくき人々あまた、そら薫物、心こと

にはほ満ちつつ、待ち聞こえけるかひありて、言ひ知らずかをり満ちて参りたまへり。いとめづらしきせ、宮もいと忍びて、立ち出でつつ御覧するにや、と心ときめきせらるるにも、河陽原の御簾の前、ふと思ひ出でられて、もの速き心地するにも、さもさすがにこと変はりて帰らむとせしほど、なつかしうものなどのたまひし御けしきはひのめでたさは、身にしてみてあはれにかなしと思ひ出でるるに、ものなど言ふも心はそらにて、御事せられぬべくおほさるる。御簾のうちにも心かかるにや、
〔中納言〕思ひだに寄らまじものかむらさきの雲のかからぬならひなりせばと心のうちに思ふも、めざましうおほけなきことなりかし。いたく用意して、御簾のうちにも、はかなきことども聞こゆる中に、
〔中納言〕西へ行く月のひかりを見てもまづ思ひやりきと知らずやありけむと言ふ人あり。

〔中納言〕たれなればかたぶくさ夜の月見てもありやなしやと思ひ出でけむうちたどり思ひ出でけむほどのけしき、中に身にしむばかり思ふ人多かるにも、かたへはめづらしきにやあらむ、むらさきの雲のよそへに、ものあはれなるけしきを見たまひて、言ひ過ごししつべくおほえければ、あかぬほどにてまかんでたまひぬ。

〔浜松中納言物語二〕によし

注 *1 百歩のほかま―百歩離れたよりも遠いところ。 *2 陣―宮中の警護に当たる兵士の詰所。ここは内裏の門付近を指す。
*3 細殿―女房たちの局のある場所。 *4 見し世の春―中納言が唐で女性と出逢った春のこと。 *5 箏の琴―琴の一種。
*6 下りたまふまに舞踏したまふ―庭に降りて御衣拝領の謝意の祥礼をなす。 *7 河陽原の御簾の前―河陽原は唐の地名、中納言は唐の女性と出逢っている。 *8 少将内侍―中宮に仕える女房のひとり。後に中納言と手紙をやりとりすることになる。

問1 参内したときの中納言の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 参内なさる中納言のご様子は、それほど悪いものではなかった。儀式用の装束に香をたきしめて、めったにすばらしいお姿でお出かけになるのは、目にもおどろくほどであった。
- b 参内なさる中納言のご様子は、それほど悪いものではなかった。立派な装束の美しさをこの上ないものにして、めったにすばらしいお姿でお出かけになるために、十分に注意を払われていた。
- c 参内なさる中納言のご様子は、並みものではなかった。立派な装束の美しさをこの上ないものにして、めったにすばらしいお姿でお出かけになるのは、目にもおどろくほどであった。
- d 参内なさる中納言のご様子は、それほど悪いものではなかった。立派な装束に香をたきしめて、めったにすばらしいお姿でお出かけになるために、十分に注意を払われていた。
- e 参内なさる中納言のご様子は、それほど悪いものではなかった。儀式用の装束に香をたきしめて、めったにすばらしいお姿でお出かけになるために、十分に注意を払われていた。

問2 中納言が参内する途中の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 急に降り積もった雪は今も辺り一面に降りかかっている、その雪の白さにこの上ない光を加えるような中納言のご様子を、往來の人々もなかなか見られるものではないと見申し上げている。内裏の門をお入りになると、情趣を理解する深い心を持っていないように見える者たちや、下級の女官まで涙を流して見申し上げては驚嘆している。
- b ここ数日来降り積もった雪は今も辺り一面に降りかかっている、その雪が一段と光を加えている中納言のご様子を、往來の人々もなかなか見られるものではないと見申し上げている。内裏の門をお入りになると、情趣を理解する深い心を持っていないように見える者たちや、下級の女官まで涙を流して見申し上げては驚嘆している。
- c ここ数日来降り積もった雪は今も辺り一面に降りかかっている、その雪が一段と光を加えている中納言のご様子を、往來の人々もなかなか見られるものではないと見申し上げている。内裏の門をお入りになると、情趣を理解する深い心を持っていないように見える者たちや、下級の女官まで涙を流して見申し上げては驚嘆している。
- d ここ数日来降り積もった雪は今も辺り一面に降りかかっている、その雪の白さにこの上ない光を加えるような中納言のご様子を、往來の人々もなかなか見られるものではないと見申し上げている。内裏の門をお入りになると、情趣を理解する深い心を持っていないように見える者たちや、下級の女官まで涙を流して見申し上げては驚嘆している。
- e 急に降り積もった雪は今も辺り一面に降りかかっている、その雪が一段と光を加えている中納言のご様子を、往來の人々もなかなか見られるものではないと見申し上げている。内裏の門をお入りになると、情趣を理解する深い心を持っていないように見える者たちや、下級の女官まで涙を流して見申し上げては驚嘆している。

問3 再会を果たした御門と中納言の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 御門が中納言に、帰国後の出来事などについて、あれこれと質問なさるので、なかなか御前を立ち去ることもできない。日が暮れてしまい、雪もますます降るうちに、月もすばらしく澄んで上空に出ている。御門の管弦の遊びなども自分でする気にならないと感じられていたが、音楽は聞こえてこれまで過こして来たのだよという仰せをうけて、管弦の催しが始まった。

b 御門が中納言に、唐にいた頃の出来事などについて、つぶさに質問なさるので、すぐに御前を立ち去ることもできない。日が暮れてしまい、雪もますます降るうちに、月もすばらしく澄んで上空に出ている。御門の管弦の遊びなども興ざめのように感じられて、とりたてて音楽なども聞くこともなくこれまで過こして来たのだよという仰せをうけて、管弦の催しが始まった。

c 御門が中納言に、唐にいた頃の出来事などについて、あれこれと質問なさるので、なかなか御前を立ち去ることもできない。日が暮れてしまい、雪もますます降るうちに、月もすばらしく澄んで上空に出ている。御門の管弦の遊びなども興ざめのように感じられていたが、音楽は聞こえてこれまで過こして来たのだよという仰せをうけて、管弦の催しが始まった。

d 御門が中納言に、帰国後の出来事などについて、ここまかに質問なさるので、すぐに御前を立ち去ることもできない。日が暮れてしまい、雪もますます降るうちに、月もすばらしく澄んで上空に出ている。御門の管弦の遊びなども興ざめのように感じられて、とりたてて音楽なども聞くこともなくこれまで過こして来たのだよという仰せをうけて、管弦の催しが始まった。

e 御門が中納言に、唐にいた頃の出来事などについて、ここまかに質問なさるので、すぐに御前を立ち去ることもできない。日が暮れてしまい、雪もますます降るうちに、月もすばらしく澄んで上空に出ている。御門の管弦の遊びなども自分でする気にならないと感じられていたが、音楽は聞こえてこれまで過こして来たのだよという仰せをうけて、管弦の催しが始まった。

問4 管弦の催しが始まったときの中納言の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言は、日本での管弦の催しが久しぶりで新鮮に思われ、唐で女性と出逢った春と似ているなどと、なにごとにつけても深くおもしろいので、中納言が心を落ち着けて弾かれる琴の音色は、この上なくしみじみとしている。中納言の弾く音色がすばらしいのはいつものことで、流れる涙をだれもとめられなかった。

b 中納言は、無事に帰国できたことが喜ばしく思われ、唐で女性と出逢った春と似ているなどと、なにごとにつけても深くおもしろいので、御門が心を落ち着けて弾かれる琴の音色も、この上なくしみじみと感じられる。御門の弾く音色がいつもよりはるかにすばらしく、流れる涙をだれもとめられなかった。

c 中納言は、無事に帰国できたことが喜ばしく思われ、唐で女性と出逢った春と似ているなどと、なにごとにつけても深くおもしろいので、中納言が心を落ち着けて弾かれる琴の音色は、この上なくしみじみとしている。中納言の弾く音色がいつもよりはるかにすばらしく、流れる涙をだれもとめられなかった。

d 中納言は、日本での管弦の催しが久しぶりで新鮮に思われ、唐で女性と出逢った春と似ているなどと、なにごとにつけても深くおもしろいので、中納言が心を落ち着けて弾かれる琴の音色は、この上なくしみじみとしている。中納言の弾く音色がいつもよりはるかにすばらしく、流れる涙をだれもとめられなかった。

e 中納言は、日本での管弦の催しが久しぶりで新鮮に思われ、唐で女性と出逢った春と似ているなどと、なにごとにつけても深くおもしろいので、御門が心を落ち着けて弾かれる琴の音色も、この上なくしみじみと感じられる。御門の弾く音色がすばらしいのはいつものことで、流れる涙をだれもとめられなかった。

問5 御門と中納言の歌のやりとりの説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 御門が「あなたと別れてから、遠くの雲間の月は雲に隠れてばかりで、これほど美しく澄み渡った月を見ることもありませんでした」と、久しぶりの美しい月を見る喜びを詠ったのに対し、中納言は「なつかしい日本を思い出すがであるよと、大空を振り返って月を見たことは本当に悲しいことでした」と、唐で悲しい思いをしていたことを詠った。

b 御門が「あなたと再び別れてしまったら、宮中で見る月は涙に濡れてばかりで、これほど美しく澄み渡った月を見ることもないでしょう」と、一度と別離があつてはならないと詠ったのに対し、中納言は「故郷に戻りましたら、御門を思い出しながら、大空を振り返って月を見ることは本当に悲しいことですよ」と、避けられない別れの悲しみを詠った。

c 御門が「あなたと再び別れてしまったら、遠くの雲間の月は雲に隠れてばかりで、これほど美しく澄み渡った月を見ることもないでしょう」と、これから先ともいなくなることを詠ったのに対し、中納言は「故郷に戻りましたら、御門を思い出しながら、大空を振り返って月を見ることは本当に悲しいことですよ」と、避けられない別れの悲しみを詠った。

d 御門が「あなたと別れてから、宮中で見る月は涙に濡れてばかりで、ほんの少しだけでも澄んだ月を見ることもありませんでした」と、再会の喜びを詠ったのに対し、中納言は「なつかしい日本を思い出すがであるよと、大空を振り返って月を見たことは本当に悲しいことでした」と、唐で悲しい思いをしていたことを詠った。

e 御門が「あなたと別れてから、宮中で見る月は涙に濡れてばかりで、これほど美しく澄み渡った月を見ることもありませんでした」と、会えなかった間の辛さを詠ったのに対し、中納言は「なつかしい日本を思い出すがであるよと、大空を振り返って月を見たことは本当に悲しいことでした」と、唐で悲しい思いをしていたことを詠った。

問6 夜更けの中納言の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言は中宮のいらつしやるころへ参上なさった。必ず中納言はいらつしやるだろうと、心くばりしていた上品な女房たちは、どこからともなく漂ってくるように薫らせたお香が、良い雰囲気や部屋に満ちているなかで、お待ち申し上げていたが、その甲斐があつて、中納言は何ともいえないすばらしい薫りを漂わせて参上なさった。

b 中納言は中宮のいらつしやるころへ参上なさった。必ず中納言はいらつしやるだろうと、聞いていた上品な女房たちは、どこからともなく漂ってくるように薫らせたお香が、良い雰囲気や部屋に満ちているなかで、お待ち申し上げていたが、その甲斐があつて、中納言は何ともいえないすばらしい薫りを漂わせて参上なさった。

c 中納言は中宮のいらつしやるころへ参上なさった。必ず中納言はいらつしやるだろうと、聞いていた思慮が浅い女房たちは、どこからともなく漂ってくるように薫らせたお香が、思っていた薫りとは違うものの部屋に満ちているなかで、お待ち申し上げていたが、その甲斐があつて、中納言は何ともいえないすばらしい薫りを漂わせて参上なさった。

d 中納言は中宮のいらつしやるころへ参上なさった。必ず中納言はいらつしやるだろうと、心くばりしていた上品な女房たちは、どこからともなく漂ってくるように薫らせたお香が、思っていた薫りとは違うものの部屋に満ちているなかで、お待ち申し上げていたが、その甲斐があつて、中納言は何ともいえないすばらしい薫りを漂わせて参上なさった。

e 中納言は中宮のいらつしやるころへ参上なさった。必ず中納言はいらつしやるだろうと、心くばりしていた思慮が浅い女房たちは、どこからともなく漂ってくるように薫らせたお香が、良い雰囲気や部屋に満ちているなかで、お待ち申し上げていたが、その甲斐があつて、中納言は何ともいえないすばらしい薫りを漂わせて参上なさった。



中宮のところで中納言はどのようなことを思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言は、心より愛している中宮も忍んでお出ましになってお逢いできるかもしれないと、心ときめくもの、河陽県で出逢った女性の御簾の前にいたことがふと思いついて、どこかよそよそしい気持ちはするけれども、しかし、事情が変わって帰国しようとするとき、かの女性が親しみ深くこぼれお掛けくださった様子のすばらしさは、しみじみとして胸が詰まるほどだと思いついていた。

b 中納言は、心より愛している中宮も忍んでお出ましになってお逢いできるかもしれないと、心ときめくもの、河陽県で出逢った女性の御簾の前にいたことがふと思いついて、遠い昔のような感じはするけれども、しかし、事情が変わって帰国しようとするとき、かの女性が親しみ深く愛情あふれた贈りものを交わしたときのすばらしさは、しみじみとして胸が詰まるほどだと思いついていた。

c 中納言は、自分が来ることにはめったにないので、中宮も忍んでお出ましになってご覧になるかもしれないと、心ときめくもの、河陽県で出逢った女性の御簾の前にいたことがふと思いついて、どこかよそよそしい気持ちはするけれども、しかし、事情が変わって帰国しようとするとき、かの女性が親しみ深くこぼれお掛けくださった様子のすばらしさは、しみじみとして胸が詰まるほどだと思いついていた。

d 中納言は、自分が来ることにはめったにないので、中宮も忍んでお出ましになってご覧になるかもしれないと、心ときめくもの、河陽県で出逢った女性の御簾の前にいたことがふと思いついて、遠い昔のような感じはするけれども、しかし、事情が変わって帰国しようとするとき、かの女性が親しみ深く愛情あふれた贈りものを交わしたときのすばらしさは、しみじみとして胸が詰まるほどだと思いついていた。

e 中納言は、中宮がいらつしやることはめったにないので、忍んで出かけて行けば自分をご覧いただけるかもしれないと、心ときめくもの、河陽県で出逢った女性の御簾の前にいたことがふと思いついて、どこかよそよそしい気持ちはするけれども、しかし、事情が変わって帰国しようとするとき、かの女性が親しみ深く愛情あふれた贈りものを交わしたときのすばらしさは、しみじみとして胸が詰まるほどだと思いついていた。

少将内侍と中納言の歌のやりとりの説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 少将内侍が「西に渡る月のように渡唐したあなたが、憂いを晴らすことができているかどうか分らずに心配しておりましたと、相手を気遣う歌を贈ったのに対し、中納言は「あなたが西に傾く月を見て、唐にいる私の心が平穏かどうか思ってくださいましたのでしょいか。それは他ならぬあなただつたのですね」と、相手への愛情を表現している。

b 少将内侍が「西に渡る月のように渡唐したあなたが、憂いを晴らすことができているかどうか分らずに心配しておりましたと、相手を気遣う歌を贈ったのに対し、中納言は「あなたのことを、西に傾く月を見て、心が平穏かどうか思っていますのでしょいか。それは本当に私のことなんでしょうか」と、相手に疑問を投げかけている。

c 少将内侍が「西に渡る月のように渡唐したあなたが、唐で思いを交わす人がいたと、私が知らなかつたのでしょいか、わかつていたのですよ」と、相手をなじる歌を贈ったのに対し、中納言は「あなたのことを、西に傾く月を見て、恋人がいるかどうか思っていますのでしょいか。それは本当に私のことなんでしょうか」と、相手に疑問を投げかけている。

d 少将内侍が「西に渡る月のように渡唐したあなたが、遠くから思いを馳せていたとは存じなかつたのでしょいか」と、相手に思いを寄せていたという歌を贈ったのに対し、中納言は「あなたのことを、西に傾く月を見て、無事であるかどうか思っていますのでしょいか。それは本当に私のことなんでしょうか」と、相手に疑問を投げかけている。

e 少将内侍が「西に渡る月のように渡唐したあなたが、遠くから思いを馳せていたとは存じなかつたのでしょいか」と、相手に思いを寄せていたという歌を贈ったのに対し、中納言は「あなたが西に傾く月を見て、唐にいる私が無事であるかどうか思っていますのでしょいか。それは他ならぬあなただつたのですね」と、相手への愛情を表現している。

傍線部④について、主語をあらかかにして、現代語訳せよ。

(以上)

2025年度入学試験問題

国語

注意事項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙はすべて黒鉛筆(HB)(シャープペンシルは、HB 0.5 mm以上の芯であれば使用可)で記入することになっています。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- III 解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し、切取線から切り離してください。
- IV 試験時間は75分です。
- V 問題は25ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1. 解答欄にマークするときは、HBの黒鉛筆で次の正しい例のように、濃く正確にぬりつぶしてください。
2. マークのしかた
 - (ア) 正しい例
 - a 解答が1つの場合、例えばイと解答するときは

(1)	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
-----	-----------------------	----------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

 のように、マークしてください。
 - b 解答が2つの場合、例えばイとウと解答するときは

(1)	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
-----	----------------------------------	----------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

 または

(1)	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
-----	----------------------------------	-----------------------	----------------------------------	-----------------------	-----------------------

 のように各1つずつマークしてください。
 - (イ) 悪い例
 - | | | | | | |
|-----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| (1) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
|-----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|

 ○印でかこむ。
 - | | | | | | |
|-----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
(2)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

 全部をぬりつぶしていない。
 - | | | | | | |
|-----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
(3)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

 L印をつける。
 - | | | | | | |
|-----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
(4)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

 |印をつける。
 - | | | | | | |
|-----|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
(5)	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>

 1欄に2つ以上マークする。
 このような記入をしてはいけません。
3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。

(1)	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>
-----	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------

 のように×印をしても消したことはありません。
4. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、また汚したりしないでください。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

責任帰属そのものを拒否してしまつてよいのか

公衆衛生における責任の役割

公衆衛生における社会全体での予防の重要性を説いたジェフリー・ローズは、私たち一人ひとりが社会全体に対する「責任」を自覚することが必要であると主張する。ローズはその著書のポットウにドストエフスキの文章を掲げる。「私たちは、私たち全員へ責任を負っている」。これは集団的な予防活動や健康増進活動を推進していく上で非常に効果的なスローガンであると思われるが、ここでキータムとなっているのは個々人の「責任」であり、そこでは健康について当人の責任を問うことがむしろ肯定的に捉えられている。現代日本においても、いままさに危機の最中にある新型コロナウイルス感染症の予防において「責任ある行動」が求められていることは周知の通りであるし、必ずしも否定されるべきものではないだろう。個人の健康を強調することが、それ自体として否定的なものであるとは言いがたい。

そもそも公衆衛生上の目標を実現するためには、人々の行動変容が不可欠である。個々人が食事や休息、あるいは労働や余暇においてどのように行動しているかが健康を大きく左右する以上、マクロレベルの介入のみで健康を守ることは難しい。それゆえ、人々に行動変容を呼びかけることは公衆衛生の重要な要素である。人々の責任に訴えるという方法が公衆衛生においてしばしば見られることには、納得できる理由がある。

自己責任論への真剣な応答

公衆衛生の目的に資する、この責任ガイダンスの肯定的な使用を維持しようと考えれば、私たちは自己責任論いわば悪しき責任論の批判を、個々人に特定の行為を推奨するための責任論(良き責任論)の擁護と、両立させなければならない。それは可能か。また可能であるとするればいかなる論拠によつてか。これがここで考えたい問題である。

上述の問題に取り組むことは、実践的には次のような含意をもつ。自己責任論批判への再反論として容易に予測されるのは、各人の責任を不問としてしまえば不健康につながる「無責任な行動」が広がってしまうのではないか、というものである。ここでの議論は、もし成功すれば、このような再反論に対して「ガンケンである」というのも、自己責任論を批判しつつ同時に集団的努力を擁護することが可能であるならば、自己責任論の拒否が無責任な行動を推奨することになるという批判はあたらないからである。

社会的決定要因から自己責任論を考える

自己責任論の批判と責任ある行為の推奨の両立をめぐる問題は、近年注目を集める健康の社会的決定要因に関する議論において顕在化する。職業、学歴、家族関係、居住地域、利用可能な社会保障制度など、さまざまな社会的・経済的背景が人々の健康状態を左右している。

これらの知見に基づいて、しばしば自己責任論に対し、不健康は個人にコントロール可能な要因のみで起因するものではない、という形での批判がなされてきた。すでに見たように、自己責任論は責任帰属の条件として個人によるコントロール可能性を置いている。だとすれば、不健康が個人に選択不可能な生まれつきの社会的・生物学的状況に大きく影響されていたり、さらには健康リスクの高い行為を選ぶことさえ部分的に社会経済的な背景に由来したりしている場合、不健康について個人に部分的にはともかく全面的に責任を帰することは明らかに不適切であることになる。たとえば青年期に形成された喫煙習慣は環境に起因する部分が大きいと考えられるため、その結果としての不健康を個人の責任とするのは難しいだろう。

健康の自己責任論と健康の社会的決定要因の関係は、不健康につながる行為が一度限りのものではなく、生活の中で何度も繰り返されるものであることをふまれば、よりいっそう強調されることになる。一定の危険のあることが明らかにならざるを得ない。

行った結果として怪我をするとか、十分なサンキンを^⑧がされていない食品をそのことを承知の上で食べた結果として食中毒を起こすとかいった場合には、個人の選択と帰結との関係性はある程度明瞭である。ところが現代社会で大きな問題となっている慢性疾患の場合、生活のさまざまな行為が少しずつその「ガイゼン」性を高めていく。そういった習慣的な行為は、個々人のジューク^⑨に基づく意思決定よりも社会的背景に規定されているとみなす方が、いっそう理に適っているように思われる。

文化人類学者の碓陽子は、そのような「累積的リスク」の積み重ねそのものについての意思決定は存在しないにもかかわらず、さもそのような決定が存在しているとみなすことで、個々人が本来ありえない責任主体として作り出されていると指摘している。私たちは日常的に「ライフスタイルの選択」という言い方をしているが、実際に行っているのは食事や運動についての無数の選択であり、ライフスタイルそのものを選択しているわけではない。にもかかわらずライフスタイルと疾病の相関関係から個人の選択があったのだと捏造され、本来選んでいないものを選んでしまふことになる、というわけである。

しかし、健康の社会的決定要因の指摘に基づく自己責任論批判は、果たして有効なものだろうか。以下、二つの観点から、この批判には困難があることを論じた。

自己責任論はコントロール可能性に依拠しているのか

まず第一に指摘できるのは、健康の社会的決定要因を論拠とした自己責任論の批判は、自己責任論の前提を取り違えている可能性がある、ということである。

健康の社会的決定要因を論拠とした自己責任論の批判は、上に見たように、不健康は個人の行動の直接的帰結ではないと指摘することで、自己責任論が前提している、「ある個人が自身の行為とその帰結に対して適切なコントロールを有しているならば」という条件が成立していないことを指摘するものである。上に見ると、この主張の否定。人々の健康状態には、本人の選択の結果とは言えない社会的な要因が深く影響しているとするならば、この条件は成立しない。それゆえ不健康について当人に少なくともすべての責任を帰することは適切ではないことになる。これは一見して妥当性のある反論である。

しかしながら、そもそも自己責任論がコントロール可能性についての条件を前提していると考えられることは適切なのだろうか。もちろん自己責任論の主張そのものを見れば、そこにはコントロール可能性についての議論が明確に書かれている。それはあなたがしたことなのだから、自分で責任を取れ、という主張が自己責任論を形成しているわけである。とはいえ、現実の私たちの責任帰属の実践を考えると、必ずしもコントロール可能性によって責任帰属がなされるわけではないことがわかる。いくつかの例を挙げよう。

第一に、ある行為に関する責任が行為者本人以外の人物に帰せられるケースが存在する。端的な例として、ある組織の責任者^⑩はその組織に属するすべての人物の行為に対して責任を負うものであり、組織内の人物の行為の責任は行為者本人ではなくあるいは本人のみならずその責任者にも帰せられる。責任者が部下の引き起こした事態に対するクレームについて、それは私がしたことではないと言って責任を拒否することは、道徳的に許容されないだろう。

第二に、行為の責任はあくまで行為者本人に対して帰せられるとしても、その責任帰属がコントロール可能性を条件としていないケースも存在する。交通事故のうち、子どもが対処がまったく不可能ほど急を飛び出してきて、運転者本人に事故を避けることができなかつた場合であっても、本人には法的な責任のみならず一定の道徳的な責任が帰せられる。その人が、その事故は私には避けられなかつたのだと言って責任を拒否することは、たとえ事実においてはその通りだとしても、道徳的に許容されないだろう。

以上のように、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではない。であれば、責任帰属の一つの実践である自己責任論もまた、コントロール可能性を前提しているとは限らない。前提しているかもしれないし、していないかもしれない。そして、もし仮に前提していないのだとすれば、コントロール可能性を有していなかつたという指摘に基づく反論は、有効ではないことになる。

言い換えれば、自己責任論は、当の帰結が究極的にあなた自身の行為に起因しているのかに関わりなく、あなたは当該の帰結

について自身で責任を負うべきだ(社会的な手助けを要するべきではない)という主張をしているのかもしれない、ということである。そのような主張は一見したところ無理筋であるが、しかし何が本人の責任に帰せられるかの線引きが非常に恣意的であること、そして時として社会的な望ましさ^⑪に由来するものであることを指摘する研究もあることをふまれば、そのような主張がありうることを考えることは決しておかしくないことではない。

社会的決定要因をめぐる議論は自由を尊重できているか

自己責任論を健康の社会的決定要因に基づいて批判することが自己責任論を乗り越える上で適切なものとはならない可能性を指摘する。二つ目の議論に移ろう。健康の社会的決定要因に基づく批判は、不健康は個人の行動の直接的帰結ではないということを示唆する。しかしこのような見方は、先に触れた問題(心すなわち公衆衛生政策を推進していくという問題)からすれば、むしろ悪手であると考えられる。というのも、本人が健康につながる行動を取ることができるとか否か、本人にコントロールできるものではないとしてしまえば、より健康を増進する行動を取ることがまた不合理であることになってしまふからである。

過去の不健康行動について、そのような行動を取ることが環境によって要請されていた(そうしなかった)ことではなかったのだから、ペナルティに値しないと論じながら、同時に将来の行動については個人の自由の余地を認めるのは整合的な主張ではない。実際のところ、健康の社会的決定要因の理解が公衆衛生に組み入れられたことで、病氣や障害のある人々に対する道徳的な非難を回避するための理論的基盤が提供された一方、健康は個人のコントロール下にあるものとは感じられなくなり、個人への政策的な働きかけが困難になったという指摘がある。

これは単なる整合性の問題を越えて、倫理的問題でもある。個人の自律的な行動変容の可能性を最初から含み入れない態度は、個人の尊重に失敗する可能性があるからである。政治哲学者のエリ・フエアリングは、患者の行動変容の可能性を否定することが、当の人々を自律的存在に満たないものだとみなすことになってしまふという問題を指摘し、次のように論じている。

「患者の自律的選択の尊重が現代のヘルスケアに深くシントウ^⑫していることをふまれば、十分な判断力を有し十分な情報を与えられた個人は自分自身の利益の最善の解釈者であり、他者が彼らのためにならぬと判断するような選択であつても自由になすことができるべきである、という主張に価値を置くべきとする強力な理由が存在する」。医療倫理学者のダニエル・ウィクラム^⑬もまた、責任を理由にしたヘルスケア提供の縮小を批判しつつも、個人の主体性の観点から、健康に対する個人の責任は全面的に無視されるべきではないと主張する。彼が強調するのは、「何より、健康に対する個人の責任の感覚を促進することは、『積極的自由^⑭であるいはエンパワメント』のプログラムの一部分でありうるという点である。

もちろん、健康の社会的決定要因の存在を根拠に責任帰属に反対する議論も、責任帰属の余地がまったくなくとも論じないものがほとんどである。言い換えれば、すべてが社会的に決定されており、個々人の選択の余地がないと論じられることはまじない。しかしそうだとすると、本人にコントロール不可能な要因を強調すればするほど、本人に健康行動を要求できる範囲も縮小されてしまふ、というトレードオフの関係があることは否定できない。ゆえに上述の問題は、たとえ社会的決定要因による全面的な決定を支持しなくても、それらの要因のコントロールの難しさを根拠に責任帰属に反対する限りは、回避できない。

先に見たように、自己責任論は個人の尊重に失敗している。自己責任を強調することは、健康を損なつた人を道徳的に劣つた人物とみなすことにつながるからである。しかし他方で、健康のコントロール不可能性を強調することもまた、別の意味で個人の尊重に失敗している。個人の行為が背景要因によって決定されているとみなすことは、健康を損なつた人を道徳的な意味での主体性を有する存在とはみなさないことにつながるからである。自由に選択する主体であると自認し、また他者からもそのようにみなされることは、自由で平等な存在として社会に参加していくための不可欠な条件である、ということを実際に考えるならば、私たちは個人が責任を有する主体であるという見方を捨て去つてしまふべきではない。しかしそれが自己責任論に結びついてしまつてはならない。それゆえに、自己責任論の批判と個人の主体的努力の擁護、この二つの両立の可能性が問われなければならない。

（王手慎太郎『公衆衛生の倫理学』「国家は健康にこそ介入すべきか」による ※一部省略した箇所がある）

- 注
- *1 ジェフリー・ローズイギリスの疫学者。(一九二一—一九九三)
 - *2 ドストエフスキ―ロシアの小説家。(一八二一—一八八二)
 - *3 いままさに危機の最中にある新型コロナウィルス感染症『この文章は二〇二二年一月に刊行された。ここではその当時の状況をいう。』
 - *4 梶陽子日本の文化人類学者。(一九七七—)
 - *5 エリ・フエリシグノルウェーの政治哲学者。
 - *6 ダニエル・ウイクラ―アメリカの倫理学・集団衛生学者。(一九四六—)
 - *7 エンバワメント―個人や集団が自らの生活への統御権を獲得し、組織的・構造的・外的な影響を克服できるようにすること。
 - *8 トレドオフ―両立できない、二律背反の関係であること。

問1 太線部⑦「ガイゼン」、⑧「ジユクリヨ」を漢字に改めよ。

問2 ジェフリー・ローズの「責任」についての主張に関して、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ジェフリー・ローズは、公衆衛生における社会全体での予防の重要性を説くうえで、「私たちは、私たち全員へ責任を負っていると述べているが、ここでキータムとなっているのは個々人の「責任」であり、集団的な予防活動や健康増進活動は、必ずしも否定されるべきものではないと筆者は述べている。
- b ジェフリー・ローズは、公衆衛生における社会全体での予防の重要性を説くうえで、私たち一人ひとりが社会全体に対する責任を自覚することが必要であると主張しており、健康について当人の責任を問うことがむしろ肯定的に捉えられていると筆者は述べている。
- c ジェフリー・ローズは、私たち一人ひとりが社会全体に対する「責任」を自覚することが必要で、個人の健康を強調することは、必ずしも否定されるべきものではないと主張しており、現代日本においても、新型コロナウィルス感染症の予防に責任ある行動が求められていることが肯定的に捉えられていると筆者は述べている。
- d ジェフリー・ローズは、「私たちは、私たち全員へ責任を負っている」をスローガンとして、集団的な予防活動や健康増進活動を推進しており、現代日本においても、公衆衛生に「責任ある行動」が求められていることは、否定されるべきものではないと筆者は述べている。
- e ジェフリー・ローズは、公衆衛生において、私たち一人ひとりが社会全体に対する「責任」を自覚することが必要であると主張しているが、現代日本においても、新型コロナウィルス感染症の予防において当人の責任を問うというマクロレベルの介入が重要な要素であって、人々の行動容が不可欠であると筆者は述べている。

— 8 —

問3 筆者は、自己責任論についてどのような批判があると述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 筆者は、自己責任論に対して、不健康につながる行為が一度限りのものではなく、生活の中で何度も繰り返されるものであることをふまれば、そういった習慣的な行為は、個々人のジユクリヨに基づく意思決定というのではなく、個人の選択とその帰結はまったく関係がないという批判があると述べている。
- b 筆者は、自己責任論に対して、私たちは日常的に食事や運動といったライフスタイルそのものの選択をしているものの、「累積的リスク」の積み重ねそのものについての意思決定は存在しないため、個々人が本来ありえない責任主体として作り出されているという批判があると述べている。
- c 筆者は、自己責任論に対して、不健康は当人に選択不可能な生まれつきの社会的・生物学的状況に大きく影響されており、青年期に形成された喫煙習慣も環境に起因する部分が大きいと考えられるため、その結果としての不健康を部分的にも当人の責任とするのは難しいという批判があると述べている。
- d 筆者は、自己責任論に対して、青年期に形成された喫煙習慣には意思決定は存在せず、生まれつきの社会的・生物学的状況に大きく影響されているにもかかわらず、ライフスタイルと疾病の相関関係が捏造されていて、個々人が本来ありえない責任主体として作り出されているという批判があると述べている。
- e 筆者は、自己責任論に対して、不健康が生まれつきの社会的・生物学的状況に大きく影響されたり、健康リスクの高い行為を避けることさえ部分的に社会的・経済的背景に由来したりしていることがあるので、結果としての不健康を当人の責任とするのは難しいという批判があると述べている。

— 7 —

問4 筆者は、自己責任論の主張におけるコントロール可能性をめぐる議論について、どのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 筆者は、自己責任論は、「ある個人が自身の行為とその帰結に対して適切なコントロールを有しているならば」という条件を前提しているものであり、それはあなたが、したがって、だから、自分で責任を取れ、という主張には、コントロール可能性についての議論が明確に表れていると述べている。
- b 筆者は、自己責任論は、「ある個人が自身の行為とその帰結に対して適切なコントロールを有しているならば」という条件を前提しており、あなたは当該の帰結について自身で責任を負うべきだ社会的な手助けを求めるべきではない」という主張をしているのかもしれないが、そのような主張は無理筋だと述べている。
- c 筆者は、自己責任論は、健康の社会的決定要因を論拠としているため、コントロール可能性を前提しているとは限らない(前提しているかもしれないし、していないかもしれない)のであって、自己責任論の批判は、自己責任論の前提を取り違えている可能性がある」と述べている。
- d 筆者は、自己責任論は、当の帰結が究極的にあなた自身の行為に起因しているのに関わりなく、あなたは当該の帰結について自身で責任を負うべきだ社会的な手助けを求めるべきではない」という主張をしているのかもしれないが、コントロール可能性を前提しているとは限らない(前提しているかもしれないし、していないかもしれない)と述べている。
- e 筆者は、自己責任論は、コントロール可能性を前提していないため、当の帰結が究極的にあなた自身の行為に起因しているのに関わりなく、あなたは当該の帰結について自身で責任を負うべきだ社会的な手助けを求めるべきではない」と述べている。

— 10 —

問5 筆者は、責任帰属一般について、どのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 筆者は、ある組織に属する人物の引き起こした事態については、その組織の責任者が部下よりも責任が重く、責任を拒否することは道徳的に許容されず、また、交通事故のうち、子どもが対処がまったく不可能なほどきわめて急に飛び出してきて、その事故は私には避けられなかったのだと言って責任を拒否することは、道徳的に許容されないように、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではないと述べている。

b 筆者は、組織内の人物の行為の責任は行為者本人ではなくあるいは本人のみならずその責任者にも帰せられることがあることにより、自己責任論が前提しているある個人が自身の行為とその帰結に対して適切なコントロールを有しているならばという条件が成立していないケースも存在するため、自己責任論の主張とは対照的に、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではないと述べている。

c 筆者は、組織内の人物の行為の責任は行為者本人ではなくあるいは本人のみならずその責任者にも帰せられるものであり、また、行為の責任はあくまで行為者本人に対して帰せられるとしても、その責任帰属がコントロール可能性を条件としないケースも存在するため、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではないと述べている。

d 筆者は、現実の私たちの責任帰属の実践を考えると、ある組織に属する人物の引き起こした事態については、組織内の人物の行為の責任を行為者本人ではなくあるいは本人のみならずその責任者にも帰すことは道徳的に許容されず、自己責任論の前提を取り違えている可能性があり、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではないと述べている。

e 筆者は、交通事故のうち、子どもが対処がまったく不可能なほどきわめて急に飛び出してきて、運転者本人に事故を避けることができなかつた場合、子どもには一定の道徳的な責任しか帰せられず、その事故は運転者本人には避けられなかつたのだと言って責任を拒否することができないため、われわれの責任帰属一般は必ずしもコントロール可能性を前提とするものではないと述べている。

問6 筆者は、不健康は個人の行動の直接の帰結ではないという見方についてどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 不健康は個人の行動の直接の帰結ではないという見方は、本人が健康につながる行動を取ることができるかどうかは本人にコントロールできるものではないとしているため、より健康を増進する行動を取るよう要請することもまた不合理であることになってしまい、健康の社会的決定要因に基づく批判にはならないと述べている。

b 不健康は個人の行動の直接の帰結ではないという見方は、健康の社会的決定要因の理解が公衆衛生に組み入れられたことで、病気や障害のある人々に対する道徳的な非難を回避するための理論的基盤が提供されることにつながったが、自己責任論を乗り越える上で適切なものではなく、自己責任論よりもむしろ悪手であると述べている。

c 不健康は個人の行動の直接の帰結ではないという見方は、過去の不健康行動について、そのような行動を取ることには環境によって要請されていた（そうしないことはできなかった）のだからペナルティに値しないと論じているが、将来の行動については個人の自由の余地を認めるべきではないと述べている。

d 不健康は個人の行動の直接の帰結ではないという見方は、公衆衛生政策においてより健康を増進する行動をとるよう個人に要請することと矛盾することになってしまっただけでなく、個人の自律的な行動変容の可能性を最初から含み入れない態度は、個人の尊重に失敗する可能性があるとして述べている。

e 不健康は個人の行動の直接の帰結ではないという見方は、患者の行動変容の可能性を否定して、当の人々を自律的存在に満たないものだとみなすことになってしまっという問題があり、自己責任論と同じく、健康の社会的決定要因に基づいて批判することもまた不合理であると述べている。

- 12 -

問7 二重傍線部㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

㉔ ボウイウ

a 昨日からカンボウになったようで身体がだるい。
b 私は、会社のボウネンカイに出席した。
c 物価高のため、いつもピンボウで生活にゆとりがない。
d 子育てに追われ、彼女は、タボウな日々を送っている。
e 休日なのでついアサネボウをしてしまった。

㉕ ガイネン

a 彼は、侮辱されてフンガイした。
b 卒業論文のガイヨウをまとめた。
c 読書感想文で賞を受けたことはショウガイ大切な思い出となった。
d ケイガイカした規則を廃止する。
e 国会にはダンガイ裁判所が設置されている。

㉖ ガンケン

a 戦時中に彼はダンガンで負傷した。
b 彼はガングメーカーに就職した。
c あの会社員はコウガンムチな態度で罔々しい。
d 国家公務員採用試験のシガン者数を調査する。
e この建物は古くてもガンジョウド。

㉗ サツキン

a その絵画は私の心のキンセンに触れる素晴らしい作品だった。
b マツタケやシメジはキンレイである。
c 彼は、仕事熱心でキンム態度も良好だった。
d 互いにキョウキンを開いて語り合った。
e バレーボールの試合で、AチームはキンサでBチームに負けた。

㉘ シントウ

a 今度の改革案はアットウの多数で可決された。
b 私は前任者のやり方をトウシュウするつもりだ。
c 祖父は腎臓を患っているので、人工トウセキ治療が必要だ。
d 冷やしたお茶を入れたスイトウを持って通学する。
e 体力回復のため、温泉宿でトウジする。

問8 筆者は、公衆衛生政策を推進していくためには、どのようなことが必要だと考えているか。五十文字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

- 14 -



国語

- 13 -

二 次の文章は、『源氏物語』若紫巻の一節である。源氏十八歳の春、病氣平癒の折禮を受けるために出向いた北山で、恋い慕つてやまぬ女性にそっくりの少女を見かける。この姫を引き取りたいと、後見の尼君(本文では「尼上」)や僧都に申し出るが、取り合ってもらえない。源氏は、帰京後あらためて尼君と僧都に思いを伝えるために手紙を書き送った。これを読んで、後の問いに答えよ。

またの日、御文奉れたまへり。僧都にもほめかしたまふべし。尼上には、もて離れたりし御気色のつつましさに、思ひたまふるさまをもえあらはしはてはべらずなりにしをなむ。かばかり聞こゆるにても、おしなべたらぬ心ざしのほどを御覧じ知らば、いかにうれしう。

中にくさくひき結びて、
「面影は身を離れず山桜心のかぎりとめて来しかじ」
夜の間の風もうしろめたくなむとあり。御手などはさるものにて、ただはかなうおしつつまたまへるさまも、さだ過ぎたる御目どもには、目もあやに好まじう見ゆ。あななたはらいたや、いかが聞こえんと思しわづらふ。

ゆくての御事は、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむ方なくなむ。まだ、難波津をだにはかばかしうつづけはべらざれば、かひなくなむ。さても、

嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ
いとじうろめたう。

とあり。僧都の御返りも同じさまなれば、口惜しくて、二三日ありて、惟光をぞ奉れたまふ。「少納言の乳母といふ人あべし。たづねて、くはしう語らへ」などのたまひ知らす。さもかからぬ隠なき御心かな、さばかりいはけなげなりしけはひをを、まはならねども見しほどを思ひやるをかし。

わざとかう御文あるを、僧都もかしこまり聞こえたまふ。少納言に消息してあひたり。くはしく、思したまふさま、おほか
たの御ありさまなど語る。言葉多かる人にて、つきづきしう言ひつづくれと、いとわりなき御ほどをいかに思すにかと、ゆゆしうなむ誰も誰も思しける。御文にも、いとねむころに書いたまひて、例の、中に「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

*6 あさか山あさくも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ
御返し、
*7 波みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき

惟光も同じことを聞こゆ。「このわづらひたまふことよろしくは、このころ過くして、京の殿に渡りたまひてなむ、聞こえさすべき」とあるを心もとなう思す。

(『源氏物語』若紫巻による)

注 *1 夜の間の風―朝まだき起きてを見る梅の花夜の間の風うしろめたくなむによる。姫がどこかた引き取られてしまふのではないかと不安を表現している。
*2 難波津―古今集(坂名序)では、「難波津に咲くこの花ふゆへり今は春べと咲くやこの花」とあざか山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかはの二首の歌について言及し、「この二歌は歌の父母のやうにてそま習ふ人の初めにもしける」と記をなしている。
*3 惟光―源氏に近く仕える従者。
*4 少納言の乳母といふ人―姫の乳母。
*5 放ち書き―複数の本文を続けず、一字一字離して書くこと。「こゝろはそのへら幼い書き方というべし」。
*6 あさか山―*2にあげた「あさか山」の歌による。
*7 波みそめて―あさか山」の歌の類歌くやしを波みそめてける連ければ補のみぬるる山の井の水による。 *8 京の殿―都にある尼君の自邸。

問1 源氏が尼君に送った手紙の内容として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。
a あなたのよそよそしいご様子に気が引けて、わたしの思っております心のたけを、すべて申し上げることもできませんでした。せめて、このようにお手紙を差し上げることで、わたしの姫への思いがなみなみならぬものであることをお伝えできれば、姫にもどんなにかうれしく思っていただけでしょう。

b あなたのよそよそしいご様子が不本意に思われて、あなたの真意がまったくわからないままとなってしまいました。せめて、このようにお手紙を差し上げることで、あなたの真意をうかがうことができれば、あなたの思いもあらためて思い知られて、どんなにかうれしいことになりましょう。

c あなたのよそよそしいご様子に気が引けて、わたしの思っております心のたけを、すべて申し上げることもできませんでした。せめて、このようにお手紙を差し上げることで、わたしの姫への思いがなみなみならぬものであることをおわかりいただければ、どんなにかうれしいことになりましょう。

d あなたがわたしから離れてしまわれたご様子が不本意に思われて、あなたの真意がまったくわからないままとなってしまいました。せめて、このようにお手紙を差し上げることで、あなたの真意をうかがうことができれば、あなたの姫への思いもあらためて思い知られて、どんなにかうれしいことになりましょう。

e あなたがわたしから離れてしまわれたご様子が不本意に思われて、わたしの思っております心のたけを、すべて申し上げることもできませんでした。せめて、このようにお手紙を差し上げることで、あなたの真意をうかがうことができたら、どんなにかうれしいことになりましょう。

問2

「面影」の歌について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この歌は姫に宛てたもので、「わたしの面影は今もあなたの身を離れずいますか。山桜のように美しいあなたのいる北山にわたしの心のすべてを置いて来たのですが」と、姫への恋心を表現している。

b この歌は姫に宛てたもので、「山桜のように美しいあなたの面影はわたしの身から離れることはありません。あなたのいる北山にわたしの心のすべてを置いて来たのですが」と、姫への恋心を表現している。

c この歌は姫に宛てたもので、「山桜のように美しいあなたの面影はわたしの身から離れることはありません。あなたも北山を出るといふ決心をしてこちらに来てほしいのですが」と、姫への恋心を表現している。

d この歌は尼君に宛てたもので、「山桜のように美しい姫の面影はわたしの身から離れることはありません。あなたにも北山にいる姫にわたしの心のすべてを伝えてきたのですが」と、尼君に仲立ちを依頼している。

e この歌は尼君に宛てたもので、「わたしの面影は今も姫の身を離れずいます。あなたとともに北山にいる山桜のように美しい姫にわたしの心のすべてを伝えてきたのですが」と、尼君に仲立ちを依頼している。

問3 源氏からの手紙を受け取った尼君の反応はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a (「筆跡のみ」)とさほもとより、無造作にお包みになった様子も、年齢を重ねた尼君の目には、たいそうすばらしく見えたので、「なんとときまりの悪いことでしょう。どのようにお返事申し上げますか」と、思案に暮れなごった。
- b (「筆跡のみ」)とさほもとより、美しくお包みになった様子は、昔風の尼君の目には、たいそうすばらしく見えたので、「なんと不思議なことでしょう。どのようにお返事申し上げますか」と、極ましくお思いになった。
- c (「筆跡のみ」)とさほもとより、無造作にお包みになった様子は、昔風の尼君の目には、たいそうすばらしく見えたものの、「なんと腹立たしいことでしょう。どのようにお返事申し上げますか」と、困惑なごった。
- d (「筆跡のみ」)とさほもとより、美しくお包みになった様子も、年齢を重ねた尼君の目には、たいそうすばらしく見えたものの、「なんと失礼なことでしょう。いったいどう思っているのか」と、病に伏せてしまわれた。
- e (「筆跡のみ」)とさほもとより、美しくお包みになった様子も、年齢を重ねた尼君の目には、たいそうすばらしく見えたものの、「なんと奇妙なことでしょう。いったいどう思っているのか」と、やるかたなくお思いになった。

- 19 -

問4 尼君が源氏に送った手紙の内容として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 先日の行き掛かりの出来事は、放つておいてはいけません。姫はまた、手習いの歌ささもうまく書けないようですので、お手紙もむだなこととさせていただきます。
- b 先日の行き掛かりの出来事は、放つておいてはいけません。姫はまた、手習いの歌ささもうまく書けないようですので、お手紙もむだなこととさせていただきます。
- c 先日の行き掛かりの出来事は、いいかげんなことだとわたしには思われておりませんでしたので、繰り返しお手紙をいたしても、姫にお伝え申し上げることはできません。姫はまた、手習いの歌ささもうまく書けないようですので、お手紙もむだなこととさせていただきます。
- d 先日の行き掛かりの出来事は、いいかげんなことだとわたしには思われておりませんでしたので、繰り返しお手紙をいたしても、姫にお伝え申し上げることはできません。姫はまた、手習いの歌ささもうまく書けないようですので、お手紙もむだなこととさせていただきます。
- e 先日の行き掛かりの出来事は、いいかげんなことだとわたしには思われておりませんでしたので、わざわざお手紙をいたしても、お返事の申し上げようもありません。姫はまた、手習いの歌ささもうまく書けないようですので、お手紙もむだなこととさせていただきます。

- 20 -

問5 尼君が源氏に贈った和歌の内容として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 嵐の吹いている山の上の桜がすぐに散ってしまうように、年老いたわたしが姫を見守ってられるのは短い間なので、わたしが姫を心にかけても、かいたないのでございます。
- b 嵐の吹いている山の上の桜もしばらくの間は散らないといいますが、それでもやがて散ってしまうようなはかない姫に、お心をお留めになったのは、たよりないこととございます。
- c 嵐の吹いている山の上の桜はすぐに散ってしまうものですが、まだ散らないそのわずかの間だけ、姫にお心をお留めになった程度の、そんなたよりないこととございます。
- d 嵐の吹いている山の上の桜はすぐに散ってしまうといいますが、まだ散らないそのわずかの間だけ、姫にお心をお留めになるのは、かいたないのでございます。
- e 嵐の吹いている山の上の桜もしばらくの間は散らないといいますが、わたもしばらくこの北山で姫を見守っておりますので、どれほどお心をお留めになっても、かいたないのでございます。

- 21 -

問6 尼君の返事を受け取った後の源氏の様子はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 僧都からの返事も尼君からのものと同じような内容であったので、源氏はそれが残念でならず、二、三日して、惟光を使いとしてさしむけなごった。源氏は「少納言の乳母というものがいるはずだ。その人を訪ねて、こまかく相談して来なさい」と、指図なごった。
- b 僧都からの返事も尼君からのものと同じような内容であったので、源氏は軽率な行動を悔やみ、二、三日して、惟光を使いとしてさしむけなごった。源氏は「少納言の乳母というものがいるはずだ。その人を訪ねて、こまかく相談して来なさい」と、指図なごった。
- c 僧都からの返事も姫からのものと同じような内容であったので、源氏は軽率な行動を悔やみ、二、三日して、惟光を使いとしてさしむけなごった。源氏は「少納言の乳母というものがいるはずだ。その人を訪ねて、こまかく相談して来なさい」と、指図なごった。
- d 僧都からの返事も姫からのものと同じような内容であったので、源氏はそれが残念でならず、二、三日して、惟光にとうすればいいか相談なごった。惟光は「少納言の乳母というものがいるはずです。その人を訪ねて、こまかく相談して来なさい」と、申し上げた。
- e 僧都からの返事も尼君からのものと同じような内容であったので、源氏は軽率な行動を悔やみ、二、三日して、惟光にとうすればいいか相談なごった。惟光は「少納言の乳母というものがいるはずです。その人を訪ねて、こまかく相談して来なさい」と、申し上げた。

- 22 -

問7 少納言の乳母と惟光のやり取りや、それを聞いていたまわりの人々の心情はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 僧都のもとで惟光は少納言の乳母に、源氏が姫を思っておっしゃっている様子や、日ごろの源氏のご様子などを詳細に語った。惟光は普段から口数の多い人だったので、もっともらしくいつづけるけれど、誰もみな、まったくどうにもならない姫の年齢をどのようにお考えかと、それこそしく思うのであった。

b 僧都のもとで惟光は少納言の乳母に、源氏からの贈り物をあずかった様子や、源氏が思っいらつしやるだいたいのお考えを詳細に語った。惟光は普段から口数の多い人だったので、もっともらしくいつづけるけれど、誰もみな、まったくどうにもならない姫の年齢をどのようにお考えかと、それこそしく思うのであった。

c 僧都のもとで惟光は少納言の乳母に、源氏が姫を思っいらつしやる様子や、日ごろの源氏のご様子などを詳細に語った。惟光は普段から口数の多い人だったので、もっともらしくいつづけるけれど、誰もみな、まったく向こう見ずなお申し出を「自身はどのようにお考えかと、思まわしく思うのであった。」

d 僧都のもとで惟光は少納言の乳母に、源氏からの贈り物をあずかった様子や、源氏が思っいらつしやるだいたいのお考えを詳細に語った。少納言の乳母は口数の多い人だったので、尼君のお考えや姫の様子を気が進まないながらもいつづけるけれど、誰もみな、まったく向こう見ずなお申し出を「自身はどのようにお考えかと、思まわしく思うのであった。」

e 僧都のもとで惟光は少納言の乳母に、源氏が姫を思っいらつしやる様子や、日ごろの源氏のご様子などを詳細に語った。少納言の乳母は口数の多い人だったので、尼君のお考えや姫の様子を気が進まないながらもいつづけるけれど、誰もみな、まったくどうにもならない姫の年齢をどのようにお考えかと、それこそしく思うのであった。

問8 「あさか山」の歌と「汲みそめて」の歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 源氏は、「幼い書き方でもいいから姫からの返事が欲しい」ということで、「あさか山」という名のように浅くいいかげんにあなたのことを思っいらつしやるわけではないのに、どうして山の井には影が映るにもかかわらず、わたしと疎遠になっ

b 源氏は、「幼い書き方をする姫を一目見たい」ということで、「あさか山」という名のように浅くいいかげんにあなたのことを思っいらつしやるわけではないのに、どうして山の井には影が映るにもかかわらず、わたしに姿を見せてくださらないのですかと、歌を贈り、尼君は「汲んでみて初めて後悔する」と聞いた山の井のように、あなたの浅い心のままで、どうしてあなたの姿をお見せできませんか、あなたを源氏に逢わせるわけにはいきません」と、姫に歌を贈った。

c 源氏は、「幼い書き方をする姫を一目見たい」ということで、「あさか山」という名のように浅くいいかげんにあなたのことを思っいらつしやるわけではないのに、どうして山の井には影が映るにもかかわらず、わたしに姿を見せてくださらないのですかと、歌を贈り、尼君は「汲んで初めて後悔するように、山の井のような姫の浅い学識のままで、どうしてあなたの姿をお見せできませんか、あなたに逢わせるわけにはいきません」と、源氏に歌を贈った。

d 源氏は、「幼い書き方でもいいから姫からの返事が欲しい」ということで、「あさか山」という名のように浅くいいかげんにあなたのことを思っいらつしやるわけではないのに、どうして山の井には影が映るにもかかわらず、わたしと疎遠になっ

e 源氏は、「幼い書き方をする姫を一目見たい」ということで、「あさか山」という名のように浅くいいかげんにあなたのことを思っいらつしやるわけではないのに、どうして山の井には影が映るにもかかわらず、わたしに姿を見せてくださらないのですかと、歌を贈り、尼君は「汲んでみて初めて後悔する」と聞いた山の井のように、あなたの浅い心のままで、どうしてあなたの姿をお見せできませんか、あなたに逢わせるわけにはいきません」と、源氏に歌を贈った。

問9 傍線部③について、主語を明らかにして現代語訳せよ。

(以上)

2025年度入学試験問題

国語

注意事項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙はすべて黒鉛筆(HB)(シャープペンシルは、HB 0.5mm以上の芯であれば使用可)で記入することになっています。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- III 解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し、切取線から切り離してください。
- IV 試験時間は75分です。
- V 問題は24ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1. 解答欄にマークするときは、HBの黒鉛筆で次の正しい例のように、濃く正確にぬりつぶしてください。
2. マークのしかた
 - (ア) 正しい例
 - a 解答が1つの場合、例えばイと解答するときは
 (1) (2) (3) (4) (5) のように、マークしてください。
 - b 解答が2つの場合、例えばイとウと解答するときは
 (1) (2) (3) (4) (5) または (1) (2) (3) (4) (5) のように各1つずつマークしてください。
 - (イ) 悪い例
 - (1) (2) (3) (4) (5) ○印でかこむ。
 - (2) (3) (4) (5) 全部をぬりつぶしていない。
 - (3) (2) (4) (5) レ印をつける。
 - (4) (1) (3) (5) |印をつける。
 - (5) (2) (4) (5) 1欄に2つ以上マークする。
3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
 (1) (2) (3) (4) (5) のように×印をしても消したことはありません。
4. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、また汚したりしないでください。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

自然的善悪

ここからはあらためて倫理、なかでも世間日用の倫理について考えなおし、その思考を学問と呼べるものにするために理解しておくべき基本的な事情について考察をしていこう。世間日用の倫理における善悪の内容について一つひとつ吟味するのはなく、「善い」「悪い」といわれる判断や行動が生じてくるのはどのようにしてかを考えてみることにしよう。

ひとは、だれかの判断や行動について「善い」といい、「悪い」という。何が善で、何が悪であるかが分かっているからこそそのようにいうわけだが、それはさしあたり「善い」とか「黄色い」といった感覚と同様にして、特に理由なく直感されるものではないか。

それは幼児の心にも、知的障害者の心にも、認知症患者の心にも、精神病者の心にも直感されるに違いない。多くのひとととつての善悪とはそれがあらずに、「善い」と「悪い」の差異は感じるであろう。心神耗弱や心神ソウシツといわれる場合はどうかというところ、これは法律の適用に関して使用される概念ではないが、たとえ殺人するときその行動の意味が理解できていなくても、だからといって殺人が悪であると、そうでなくともほかの何かが悪であると感じないとはいえないであろう。

こうした意味での善悪の感覚は、生きているということと深く繋がるものであり、人間と共生するベットのイヌやネコをはじめめとして、動物にもあるだろうし、もつと単純な生物、草木や単細胞生物にまでも認められるかもしれない。そこまで話を広げることはないが、われわれの善悪の直感とは、その内容は人間に固有なものであっても、自然のなかから生じてくるものと想定していいかもしれない。

しかし他方では、独善的なひととたち、サド侯爵のようなインモラルなひと(不道徳を快とするひと)やハイド氏のようなアモラルなひとと道徳を感じないひと、善悪が分からないひととたちがいる。この場合、しかし、分からないとされるのは直感的な善悪ではなく、「真の善」である。直感している善悪がそれによって真ではないとされるものである。

真の善とは、天使と悪魔？ 平和と戦争？ 富と貧乏？ 法律と無秩序？……、そうした二項対立において見出されるそれぞれの項によって、直感的に善と思つたものが悪とされたり、悪と思つたものが善とされたりする。「善悪が分からないひとがいる」とか、「善悪はひとによって異なる」といわれるのは、このような真の善悪に関してである。

善悪の意味

従来の倫理学は、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきた。^{*3} G・E・ムアが、善悪は「黄色」と同様に直観されると述べたときも(倫理学原理)、かれはそれを普遍的なものとしての観念であるとみなしていた。

しかし、もし善が直観されるとしたら、すべてのひとにとって善は同一のはずである。ところが実際は善い、悪いは善い「というように、一人ひとりが感じる善悪は、直感的であるだけに相対的であり、状況に左右され、とめどなくひっくり返されていく。ムアはそうしたものとしての善悪を「自然主義的誤謬」「自然的経験に還元する誤謬」として退けたのだが、——誤謬とされるのが筋違いであって——、「自然の経験」としての善悪こそが倫理学にとって重要なものではないだろうか。

善悪がひっくり返されるからといって、「善悪は存在しない」とまでいっているわけではない。「善とは何か」「悪とは何かを問うひとは、真の善を求め、その反対物としての悪を捉えて、直感的な善悪の相対性を乗り越えようとするわけだが、乗り越えられる以前の、直感されるかぎりの「善」とはどんな意味か、「悪」とはどんな意味か」ということをまず問うべきではないだろうか。善悪がおのずと知られるものだとして想定して、そのような概念としての善悪について考察してみよう。真の善ではなく、善悪の「真実」を求めよう。それは、善いと直感されるものが常に善いものであるとは前提しないで、なぜ、どのような場合にそれが「悪い」とされるのか、逆に、悪いと直感されるものが、なぜ、どのような場合に「善い」とされるのか、「善い」「悪い」とはどのような意味かと問うことである。

体調に影響される判断

具体例を考えてみよう。たとえばだれかと一緒に飲食するとする。そこで分ち合った満足感を通じて何らかの絆が生じ、そのひとを支援したりヨウコしたりしようという気にさせられることがある。それで盛んに飲み会をしようとするひともあるのだが、そこに参加しながらも「それはそれ」として判断を変えず、自分自身の考えを貫くひともある。そうしたひとは、しばしば変人と呼ばれたり、コミュニケーション障害とみなされて、心理学や病理学の主題とされたりする。

ところが逆に、これまでの倫理学は、一緒に飲食しただけで変わってしまったような判断や行動はまじめに取り上げるべきものではないとしてきたのである。理性的判断と自由意志とが倫理的なものを評価する条件であって、体調に左右されない判断や行動についてしか「善い」とか「悪い」とか評価できないとされた。疲れ、飢え、病い、酔い、眠気、あるいは躁状態も、これをコウシヨして判断せよ、行動せよとされるのである。

飲食をともにすることで、「親しさ」といった人間関係が生じるし、「空気」と呼ばれるような倫理的な圧力も生じる。これらが判断や行動を変えさせるとはいえ、——あとから分析してそう説明されるのであって——、そうしたものが生じるのは、複数のひとの身体が集まり、そこに酔いや満腹感が加わって、それぞれのひとの気分が善くなったり、悪くなったりするといった体調の変化が、特別な判断や行動を与えようとするからなのではないだろうか。

空腹や満腹、睡眠不足や性シヨウドウや排泄欲求その他、身体の状態に忠じてひとはみずからの行動を決定したり、他人の判断を評価したりする。それで、飲食をテイクヨウするときのように、相手の体調がよくなることを利用して合意を引きだしたり、逆に、病気のひとを休ませるときのように、その意志を無視して行動させたりする。

それは「悪い」ことなのか？ 相手が正しく判断できる体調になるまで行動を控えるべきなのか、悪行と思っても相手の意志を尊重するべきなのか。もし体調を利用したり配慮したりして相手から特定の判断や行動を引き出すことが悪いことだとすると、そこには善悪に関する論点先取、結論が前提に書かれていることが含まれてはいないだろうか。すなわち、「体調のせいでは判断や行動を変えるのは善くない」という論点先取である。

それにしても、判断や行動が善いか悪いかいわれるのは、理性的で自由な状態にある健康なひとだけなのか。その逆の、「身体の状態に応じて、判断や行動を変えるのは善い、ことだ」という倫理説はあり得ないか。健康な状態における健全な判断と行動ではなく、身体の状態こそが善と悪の判断の条件を構成しているということはないだろうか。

身体倫理学

もとより倫理学は「精神の倫理学」であった。精神こそがみずからの善悪を判断し、行動し、他のひとの判断と行動を評価する。ソクラテスが哲学を「魂(精神)への配慮」と規定して以来、西欧の倫理学は精神を主体とする倫理学であった。

だが、その反対に、身体が主体となるような倫理学があってもいいのではないか。「健全な精神は健康な身体に宿る」といわれてきた。「身体への配慮」も必要であることは知られている。身体が健康であって、はじめてひとと身体のことを忘れて自分のしたいこと、なすべきことに集中できる。そのなかで「魂への配慮」をすることもできるだろう。

それにしても、身体の配慮を十分に健康になつたわれわれが議論する善悪は、何と限定されたものであろうか。むしろ、善悪が問題になるような状況には、いつでもそれに関わるひとたちの身体の状態が絡んでいて当然なのではないか。いじめや貧困や孤立など、不本意な社会状況に追い込まれてしまったひとが体調を崩しつつ思考する善悪もあれば、事故や病気や障害で体調が悪いがゆえに思考させられてしまう善悪もある。何よりも、真剣な思考はひとを疲れさせ、体調を狂わせる。善悪を十分に思考せずに行動するひとのなかには、体調を崩すのが嫌だという理由によってそうするひともあるかもしれないほどである。逆に、体調がよくなるためには、どんな思考も、するといふひとも多いように見受けられる。

他方では、だからこそ、精神が言葉のうえでする判断や約束よりも、身を入れて肚の底からする決断と覚悟こそが重要だともいえる。正解か不正解かで評価しようとする教師の面前での言葉より、健康か病気がか診断しようとする医師の面前での言葉より、有罪か無罪かをシムパンしようとする裁判官の面前での言葉より、寝るまえに自分に向かつて「明日は早起きしよう」という言葉の方がもっと重要なのではないか——他人にこう解されるかを気にせず口にするのだからである。

言葉か身体かの違いは相対的だとみなすひともあるだろう。だが、わたしは異なるものだと思う。決断なき言葉のうえの判断は抽象的であり、覚悟なき言葉のうえの約束は無責任である。疲労困憊するほどに嘘をつくこともあるが、それは自分が真実を迫られているときである。健康なひとが腕組みをして考える判断や約束よりは、言葉にするまえの、身体の間から生まれてくる判断や約束こそ、そしてまた、言葉のうえでの意志よりも、自分の身体との対話から生まれてくる真実の決断や覚悟こそ、倫理学が主題にするべきものではないだろうか。

直感とは身体の状態によって変化する。超越的なものとしての善悪が直観されるのは精神によるが、世間日用の善悪が直感されるのは身体による。倫理を、意識の思考した結果としてではなく、意識の発生と同時に発生したものとして考えてみよう。意識も思考も、身体に理由があつて出現するのであるのだから、意識の起くまに善悪を思考しているかぎり、学問と呼べるものにはならない。身体がなぜ善悪を感じ、どのようにしてそれについての意識や、その判断や行動を可能にしているのかを問うべきではないかと思ふのである。

人間精神の発生する現場を身体経験の裡に探究する哲学こそが倫理学と呼ばれるべきである。旧来の哲学的倫理学では、ひとには精神があつてそれが善悪を判断すると想定されてきたが、むしろ善があつて、その実現を目指して精神が出現して、と理解することはできないか。不拔の精神があると仮定するにしても、自然抜きには、その意識が他のすべての個人の意識とおなじ経験であつて、おなじ倫理に従うなどとはいえないであろう。

いいかえると、自由な主体として「個人が従うべき倫理」に対し、まずは「個人となるべき倫理」がなければならぬ。倫理的問題が生じるその都度に、——すでに確立されている精神が規範を思い出してそれを実行するというのではなく——、問題の発見や解決を目指す精神が発生するという、われわれは常にそうした初発的倫理をやり直しているのではないだろうか。

(船木亨「倫理学原論」による ※ 一部本文を改めた箇所がある)

注 *1 サド侯爵「フランスの小説家、通称マルキ・ド・サド。愛質的な性行による事件を引き起こしてたびたび投獄された。のち精神病院に監禁されて死んだ。(二七四〇—一八一四) *2 ハイド氏「イギリスの作家、R・L・ステューブソン(二八五〇—一八九四)の中編小説『スキル博士とハイド氏』に登場する極悪残忍な人物。 *3 G・E・ムーア「イギリスの哲学者。(一八七三—一九五八)

問1 太線部の「サイボウ」、④「ヨウゴ」を漢字に改めよ。

問2 世間日用の倫理における善悪について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 世間日用の倫理における善悪は、その内容について一つひとつ吟味するのではなく、「善い」「悪い」といわれる判断や行動が生じてくるのはどのようにしてかを考えてみると、何が善で、何が悪であるかに特に理由はなく、生きているという深く繋がるものであり、自然のなかから生じてくるものではないか、と述べている。
- b 世間日用の倫理における善悪は「善い」とか「黄色い」といった感覚と同様に直感されるものであって、「善い」と「悪い」の差異はどのような心にも感じられる、生きているということ深く繋がるものであり、自然のなかから生じてくるものではないか、と述べている。
- c 世間日用の倫理における善悪は「善い」とか「黄色い」といった感覚と同様に直感されるものであって、人間だけでなく動物にもあるだろうし、もっと単純な生物にまでも認められるかもしれないが、われわれの善悪の直感の内容は、人間に固有なものとして、自然のなかから生じてくるものではないか、と述べている。
- d 世間日用の倫理における善悪は、自然のなかから生じてくるものと想定するべきであるが、直感的な善悪は分かっても、「真の善」とは何かが分からないというひともいるので、真の善悪に関しては、倫理学が明らかにしていかなければならない、と述べている。
- e 世間日用の倫理における善悪は、自然のなかから生じてくるものと想定するべきであるが、直感的に善と思つたものが悪とされたり、悪と思つたものが善とされたりすることがあるので、真の善悪に関しては、倫理学が明らかにしていかなければならない、と述べている。

問3 倫理学における善悪について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 従来の倫理学が、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきたのに対し、筆者は、真の善を求め、その反対物としての悪を捉えて、直感的な善悪の相対性を乗り越えることで、善悪はおのずと知られる、と述べている。
- b 従来の倫理学が、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきたのに対し、筆者は、真の善を求め、その反対物としての悪を捉えて、直感的な善悪の相対性を乗り越えるべきで、善悪は普遍的なものとしての観念であることとみせる、と述べている。
- c 従来の倫理学が、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきたのに対し、筆者は、一人ひとりが感じる善悪は、状況に左右され、とめどなくひっくり返されていくため、善いと直感されるものが常に善いものである、と述べている。
- d 従来の倫理学が、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきたのに対し、筆者は、一人ひとりが感じる善悪は、超越的な真の善を乗り越えることによって、直感されるべき善とはどんな意味か、「悪とはどんな意味か」ということをまず問うべきである、と述べている。
- e 従来の倫理学が、善悪というものを、個別的な事例の判断から普遍的な根拠としての超越的な真の善にまで延長しようとしてきたのに対し、筆者は、一人ひとりが感じる善悪は、直感的であるだけに相対的であるが、「自然の経験」としての善悪こそが倫理学にとって重要である、と述べている。

問4 体調と判断の問題について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 筆者は、体調を利用したり配慮したりして相手から特定の判断や行動を引き出すことは悪いことであるため、体調に左右されない判断や行動についてしか「善い」とか「悪い」とか評価できないが、そこには善悪に関する論点先取が含まれている、と述べている。
- b 筆者は、空腹や満腹、睡眠不足や性シヨウドウや排泄欲求その他、身体の状態に応じてひとはみずからの行動を決定したり、他人の判断を評価したりするが、倫理学においては体調を利用したり配慮したりすることで変わってしまうような判断や行動ははじめに取り上げるべきものではない、と述べている。
- c 筆者は、これまでの倫理学は、理性的判断と自由意志とが倫理的なものを評価する条件であるとしてきたため、体調に左右されない判断や行動についてしか「善い」とか「悪い」とか評価できないとされ、一緒に飲食しただけで変わってしまうような判断や行動を最初に取り上げることがなかった、と述べている。
- d 筆者は、「体調のせいでは判断や行動を変えられない」という論点先取は、理性的判断と自由意志とが倫理的なものを評価する条件であるという考えとは反するもので、これまでの倫理学は、体調の変化が、特別な判断や行動を与えようとするということについて、はじめに取り上げることがなかった、と述べている。
- e 筆者は、複数のひとの身体が集まり、そこに酔いや満腹感が加わって、それぞれのひとの気分が善くなったり、悪くなったりするといった体調の変化が、特別な判断や行動を与えようとする倫理的圧力となるため、相手が正しく判断できる体調になるまで行動を控えるべきものではないか、と述べている。

問5 倫理学と身体の間わりについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 筆者は、ソクラテスが哲学を「魂精神への配慮」と規定して以来、西欧の倫理学は精神を主体Ⅱ主題とする倫理学であったが、善悪が問題になるような状況には、いつでもそれに関わるひとたちの身体の状態が絡んでいて当然なので、身体が主体Ⅱ主題であるような倫理学があってもいい、と述べている。
- b 筆者は、ソクラテスが哲学を「魂精神への配慮」と規定して以来、西欧の倫理学は精神を主体Ⅱ主題とする倫理学であったが、「身体への配慮」をするなかで、はじめてひとは身体のことを忘れて「魂への配慮」をすることができ、それによってなすべきことに集中できるようになる、と述べている。
- c 筆者は、西欧の倫理学は、精神こそがみずからの善悪を判断し、行動し、他のひとの判断と行動を評価するものであるとしたが、「健全な精神は健康な身体に宿る」といわれるとおり、「魂への配慮」は「身体への配慮」はともに重要なものとして考えなければならぬ、と述べている。
- d 筆者は、西欧の倫理学は、精神こそがみずからの善悪を判断し、行動し、他のひとの判断と行動を評価するものであるとしたが、「健全な精神は健康な身体に宿る」といわれるように、「身体への配慮」も必要であり、そのなかで「魂への配慮」をすることもできるので、身体が健康でなければならぬ、と述べている。
- e 筆者は、真剣な思考はひとを疲れさせ、体調を狂わせるが、身体が健康であって、はじめてひとは身体のことを忘れて自分のしたいこと、なすべきことに集中できるため、体調がよくするためにどんな思考をするという、身体が主体Ⅱ主題であるような倫理学があってもいい、と述べている。

問6 身体と言葉の関係について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 筆者は、精神が言葉のうえで判断や約束よりも、身を入れて肚の底からする決断と覚悟こそが重要であり、言葉が身体かの違いを異質なものとみなして再検討することは、倫理学が主題にするべきものである。
- b 筆者は、精神が言葉のうえで判断や約束よりも、身体の内から生まれてくる判断や覚悟こそが重要であり、他者の言葉よりも、自分に向かって語る言葉の方が、倫理学が主題にするべきものである、と述べている。
- c 筆者は、身体が疲労困憊するほどに嘘をつくこともあるが、その言葉は身を入れて肚の底からする決断であり、他人にどう解されるかを気にせず口にするものであるため、倫理学が主題にするべきものである、と述べている。
- d 筆者は、言葉が身体かの違いは異質なものであり、言葉にするまえの、身体の内から生まれてくる判断や約束、および自分の身体との対話から生まれてくる真実の決断や覚悟こそ、倫理学が主題にするべきものである、と述べている。
- e 筆者は、言葉が身体かの違いは異質なものであるため、言葉のうえでの意志よりも、疲労困憊するほどに嘘をつくことこそ真実があり、倫理学が主題にするべきものである、と述べている。

- 11 -

② テイキョウ

- a 地方コウキョウ団体の役員をつとめる。
- b 自然の恩恵をキョウジュする。
- c 円漢に問題を解決するにはダキョウも必要だ。
- d 被疑者のキョウジュを調査にとる。
- e 遠く離れた友人にキンキョウを知らせる。

③ シンパン

- a 外交で国家のイシンにかかわる重責をになう。
- b 事件のシンソウを解明する。
- c 国会で予算案のシンギが行われる。
- d 人権のシンガイを許してはならない。
- e 健康保険の給付をシンセイする。

問8 「個人となるべき倫理」とはどのようなことだと筆者は述べているか、五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

- 13 -

問7 二重傍線部④⑤⑥⑦⑧⑨⑩のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

④ ソウシツ

- a ソウナン現場にヘリコプターで向かう。
- b 試合に連敗して意気ソウソウする。
- c 室内をきれいにセイソウする。
- d 政情不安で世の中がソウゼンとしている。
- e 言動がコロコロ変わるセツソウのない人。

⑤ コウジヨ

- a 事実をありのままにシヨジユツする。
- b 難民にエンジヨの手をさしのげる。
- c 横網の面目ヤクジヨたる安定した取組。
- d 安全確認のためにシヨコウ運転する。
- e 田畑の害虫をクジヨする。

⑥ ショウドウ

- a 地球温暖化により各地で異常な自然ゲンシヨウが起きている。
- b 労働条件についてコウシヨウする。
- c 定期的な健康診断をシヨウレイする。
- d 相手と直接セツシヨウして問題を解決する。
- e 国会に参考人をシヨウチする。

- 12 -

- 14 -

二 次の文章は、『源氏物語』浮舟巻の一節である。蕉本文では「殿」君は、宇治の邸に浮舟(本文では「女」)を隠し住まわせていた。句宮(本文では「宮」)は、そのことを知って浮舟に心引かれ、密かに宇治を訪れて浮舟と関係を持つようになつて来た。ある日、蕉の使者(本文では「隨身」)が浮舟に文を届けるところ、句宮の使者とちがひあつた。蕉の使者は不審に思つて、事実関係を探り、蕉へ状況を報告しに来た。これを読んで、後の問に答えよ。

〔蕉の使者〕今朝、かの宇治に、出雲の権の守時方の朝臣のもとにはべる男の、紫の薄襦にて、桜につけたる文を、西の妻戸に寄りて、女房に取らせはべりつる。見たまへつて、しかしか問ひはべりつれば、言通へつとつ、そらごとのやうに申しはべりつるを、いかに申すぞ、とて、重べして見せはべりつれば、兵部卿の宮に参りはべりて、式部の少輔道定の朝臣になむ、その返りことは取らせはべりける」と申す。君、あやしとおほして、「その返りことは、いかやうにかいだしつる。」それは見たまへず。異方よりいだしはべりにける。下人の申しはべりつるは、赤き色紙の、いとよまらなる。となむ申しはべりつる。「聞かぬおほしあはするに、違ふことなし。さまで見せつらむを、かどしとおほせど、人々近ければ、くはしくもたまはず。」

道すがら、なほいと恐ろしく、隈なくおほする宮なりや、いかなりけむついでに、さる人ありと聞きたまひけむ、いかで言ひ寄らたまひけむ、田舎びたるあたりにて、かうやうの筋のまざれば、えしもあらじ、と思ひけるこそ幼けれ、さても、知らぬあたりにこそ、さる好きことをもたまはめ、昔より隔てなくて、あやしきまじるべして、率てありきたりまつりし身にも、うしろめたくおほし寄るべしや、と思ふに、いと心づきなし。対の御方の御ことを、いみじく思ひつとつ、年ごろ過すは、わが心の重さ、こよなかりけり、さるは、それは今はじめてさあしかるべきほどにもあらず、もよりのたよりにもよれるを、ただ心のうちの隈あらむが、わがためも苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るもをこなるわざなりけれ。このごろかくなやましくしたまひて、例よりも人しげきまざれに、いかではるばると書きやりたまふらむ、おほしやそめにけむ、いとほなる懸想の道なりや、あやしくて、おほし所尋ねられたまふ日もあり、と聞かえきかし、さやうのことにおほし乱れて、そこはかとなくなやみたまふなるべし、昔をおほし出づるにも、えおほせざりしほどの嘆き、いとほしげなりきかし、とつくづくと思ふに、女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片端心得そめたまひては、よろづおほしあはするに、いと憂し。ありがたきものは、人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたるかたは添ひたる人ぞかし、この宮の御具にては、いとよきあはひなり、と思ひもゆづりつとく、退くこちしたまへど、やむことなく思ひおほしめはじめし人ならばこそあらめ、なほさるものにて置きたらむ、今はとて見ざらむ、はた、恋しかるべし、と人わらく、いろいろ心のうちにおほす。

われすさまじく思ひなりて捨て置きたらば、かならずかの宮、呼び取りたまひてむ、人のため、のちのいとほしさを、ことなたりたまふまじ、さやうにおほす人こそ、一品の宮の御方に人三人参らせたたまひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむいとほしく、など、なほ捨てがたく、けしき見まほしく、御文つかはす。例の隨身召して、御手づから人間に召し寄せたり。(中略)蕉二人に見えでをまかれ、をこなりとのたまふ。かしこまりて、少輔が常にこの殿の御こと案内し、かしこのこと問ひしと思ひあはずれど、もの馴れて申し出ず。君も、下衆にくはしくは知らせじ、とおほせば、問はせたまはず。かしこには、御使の例よりしげきにつけても、もの思ふことさまさまなり。ただかそなたまへる。
〔波越ゆるころとも知らず末の松侍つらむとのみ思ひけるかな
人に笑はせたまふな〕
とあるを、いとあやしと思ふに、胸ふたがりぬ。御返りこそを、心得顔に聞こえむもいとつつまし、ひがごとにてあらむもあやしければ、御文はもとのやうにして、「所通へのやうに見えはべればなむ。あやしくなやましく何ごともと書き添へてたてまつれつ。

注 *1 出雲の権の守時方の朝臣

*2 紫の薄襦 紫色に染めた薄い紙。薄襦は、私的な手紙、特に恋文に多く用いられる。

*3 妻戸 寝殿造りて、殿舎の四隅に設けた雨開きの板戸。

*4 兵部卿の宮 句宮の邸のこと。

*5 式部の少輔道定 定朝臣の御方の御方。本文では「少輔」とも。

*6 赤き色紙 赤く染めた紙。この場面の直前で、句宮が式部の少輔道定の朝臣から赤い書風の恋文らしきものを受け取つて読んでいたのを、蕉は密かに見ていた。

*7 道すがら ことと蕉は明石の中宮の見舞いに出かけていた、その帰りの道中という。

*8 対の御方 浮舟の異母姉。かつては蕉も心寄せていたが、蕉の仲立ちによつて句宮と結婚し

た。*9 一品の官 明石の中宮の女一宮の宮、句宮の姉にあたる。*10 波越ゆる 君をおきてあだし心をわが持たは末の松山波も越えなむによる表現。

問1 蕉の使者はどのようなことを報告して言つたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「今朝、あの宇治で、時方に仕えている男が、桜の枝に添えた手紙を、女房に渡したのを、私が見つけまして、その男を問いただしましたところ、言うことがあれこれ違つていて、嘘をついているようでした。その男がなぜそんなことを申すのかと不審に思つて、どこへ行くのか童に確認させたところ、その男は句宮の邸に参りまして、道定にその返事を手渡ししました」と言つた。

b 「今朝、あの宇治で、時方に仕えている男が、桜の枝に添えた手紙を、女房に渡して、浮舟にご覧に入れたので、その男を問いただしましたところ、言うことがあれこれ違つていて、嘘をついているようでした。その男がなぜそんなことを申すのかと不審に思つて、どこへ行くのか童に確認させたところ、その男は句宮の邸に参りまして、道定にその返事を手渡ししました」と言つた。

c 「今朝、あの宇治で、時方に仕えている男が、桜の枝に添えた手紙を、女房に渡したのを、私が見つけまして、その男を問いただしましたところ、言葉に詰まりながらも、嘘をついているようでもありませんでした。その男がなぜそんなふうになつたのかと不審に思つて、どこへ行くのか童に確認させたところ、その男は句宮の邸に参りまして、道定にその返事を手渡ししました」と言つた。

d 「今朝、あの宇治で、時方に仕えている男が、桜の枝に添えた手紙を、女房に渡して、浮舟にご覧に入れたので、その男を問いただしましたところ、言葉に詰まりながらも、嘘をついているようでもありませんでした。その男がなぜそんなふうになつたのかと不審に思つて、どこへ行くのか童に確認させたところ、その男は句宮の邸に参りまして、道定にその返事を手渡ししました」と言つた。

e 「今朝、あの宇治で、時方に仕えている男が、桜の枝に添えた手紙を、女房から受け取つたのを、私が見つけまして、その男を問いただしましたところ、言うことがあれこれ違つていて、嘘をついているようでした。その男がなぜそんなことを申すのかと不審に思つて、どこへ行くのか童に確認させたところ、その男は句宮の邸に参りまして、道定にその返事を手渡ししました」と言つた。

問2 蕉は使者から報告を受けてどのように思つたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 蕉は、「宇治の邸からのその返事はどのような色合いだったのかと尋ねると、使者は、「それは見えませんでした。下人が申すには、赤く染めた紙に、とてもきれいな字で書かれていた」と言つた。あれこれ考え合わせると、それは先ほど句宮が見ていた手紙に間違いのないと思つた。

b 蕉は、「宇治の邸からはその返事をどのようにして出したのかと尋ねると、使者は、「それは見えませんでした。下人が申すには、赤く染めた紙に、とてもきれいな字で書かれていた」と言つた。二人は示し合せて文を交わすという、密かな関係があるにちがいないと思つた。

c 蕉は、「宇治の邸からはその返事をどのようにして出したのかと尋ねると、使者は、「それは見えませんでした。下人が申すには、赤く染めた紙に、とてもきれいな字で書かれていた」と言つた。二人は示し合せて文を交わすという、密かな関係があるにちがいないと思つた。

d 蕉は、「宇治の邸からはその返事をどのようにして出したのかと尋ねると、使者は、「それは見えませんでした。下人が申すには、赤く染めた紙に、たいそう美しい紙だった」と言つた。あれこれ考え合わせると、それは先ほど句宮が見ていた手紙に間違いのないと思つた。

e 蕉は、「宇治の邸からのその返事はどのような色合いだったのかと尋ねると、使者は、「それは見えませんでした。下人が申すには、赤く染めた紙に、たいそう美しい紙だった」と言つた。二人は示し合せて文を交わすという、密かな関係があるにちがいないと思つた。

問3 その手紙がどのようなものであるかに気付いた薫は、どのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a たいそう恐ろしく、抜け目なくいらっしやる宮であることよ、匂宮はどのような手段で、そのような人が宇治にいてお聞きになったのだろうか、匂宮は、なぜ言い寄りなされたのだろうか、宇治は田舎びた所だからこうした筋の間違いを起こしてはならないと思えない浮舟は、なんと考えが足りないことかと思つた。

b たいそう恐ろしく、したたかであらうしやる宮であることよ、匂宮はどのような手段で、そのような人が宇治にいてお聞きになったのだろうか、匂宮は、どのようにして言い寄りなされたのだろうか、宇治は田舎びた所だからこうした筋の間違いはまさかあるまいと思つていたことは、私の考えが足りないことであつたと思つた。

c たいそう恐ろしく、したたかであらうしやる宮であることよ、匂宮はどのような機会に、そのような人が宇治にいてお聞きになったのだろうか、匂宮は、なぜ言い寄りなされたのだろうか、宇治は田舎びた所だからこうした筋の間違いを起こしてはならないと思えない浮舟は、なんと考えが足りないことかと思つた。

d たいそう恐ろしく、抜け目なくいらっしやる宮であることよ、匂宮はどのような機会に、そのような人が宇治にいてお聞きになったのだろうか、匂宮は、どのようにして言い寄りなされたのだろうか、宇治は田舎びた所だからこうした筋の間違いを起こしてはならないと思えない浮舟は、なんと考えが足りないことかと思つた。

e たいそう恐ろしく、抜け目なくいらっしやる宮であることよ、匂宮はどのような機会に、そのような人が宇治にいてお聞きになったのだろうか、匂宮は、どのようにして言い寄りなされたのだろうか、宇治は田舎びた所だからこうした筋の間違いはまさかあるまいと思つていたことは、私の考えが足りないことであつたと思つた。

問4 対の御方のことに考えが及んだ薫はどのように思つたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 対の御方のことを、ひどい人だと思ひながら何年も我慢してきたのは、私の心の中の匂宮への後ろめたさははだしかったからなのだ、匂宮との親しい関係は今始まつたような軽々しいものでもなくて、因縁あつてのことなのを、心の中に隠しことがあつては自分も苦しいに違いないと思つて遠慮してきたのも、悪かしいことであつたと思つた。

b 対の御方のことを、とても恋しく思ひながら何年も我慢してきたのは、私の心の慎み深さが格別であつたからなのだ、対の御方への気持ちは今始まつたような体裁の悪いことでもなくて、因縁あつてのことなのを、心の中に隠しことがあつては自分も苦しいに違いないと思つて遠慮してきたのも、悪かしいことであつたと思つた。

c 対の御方のことを、ひどい人だと思ひながら何年も我慢してきたのは、私の心の慎み深さが格別であつたからなのだ、匂宮との親しい関係は今始まつたような軽々しいものでもなくて、因縁あつてのことなのを、心の中に隠しことがあつては自分も苦しいに違いないと思つて遠慮してきたのも、悪かしいことであつたと思つた。

d 対の御方のことを、とても恋しく思ひながら何年も我慢してきたのは、私の心の中の匂宮への後ろめたさははだしかったからなのだ、対の御方への気持ちは今始まつたような体裁の悪いことでもなくて、因縁あつてのことなのを、心の中に隠しことがあつては自分も苦しいに違いないと思つて遠慮してきたのも、悪かしいことであつたと思つた。

e 対の御方のことを、とても恋しく思ひながら何年も我慢してきたのは、私の心の慎み深さが格別であつたからなのだ、匂宮との親しい関係は今始まつたような軽々しいものでもなくて、因縁あつてのことなのを、心の中に隠しことがあつては自分も苦しいに違いないと思つて遠慮してきたのも、悪しいことではなかつたと思つた。

問5 薫は浮舟についてどのように思つたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 利発でしつかりしていると思えるけれど、色好みな人にはなびいてしまふ人であつたのだなあ、匂宮のお相手としては、全くお似合いだと思つと、浮舟を譲つてしまつてもよく、自身は身を引きたい気持ちが出たけれど、いつまでも当初のまま匂宮への思いを持ち続けるような人ならばともかく、浮舟はそうではないのだから、やはりそういう今までのおりの関係のまま置いておこうと思つた。

b 利発でしつかりしていると思えるけれど、色好みな人にはなびいてしまふ人であつたのだなあ、匂宮のお相手としては、全くお似合いだと思つと、浮舟を譲つてしまつてもよく、自身は身を引きたい気持ちが出たけれど、格別な気持ちで関わりはじめた人ならばともかく、浮舟はそうではないのだから、やはりそういう今までのおりの関係のまま置いておこうと思つた。

c 可憐でおっとりしていると思えるけれど、色好みな人にはなびいてしまふ人であつたのだなあ、匂宮のお相手としては、全くお似合いだと思つと、浮舟を譲つてしまつてもよく、自身は身を引きたい気持ちが出たけれど、いつまでも当初のまま匂宮への思いを持ち続けるような人ならばともかく、浮舟はそうではないのだから、やはりそういう今までのおりの関係のまま置いておこうと思つた。

d 可憐でおっとりしていると思えるけれど、色好みな人にはなびいてしまふ人であつたのだなあ、匂宮のお相手としては、全くお似合いだと思つと、浮舟を譲つてしまつてもよく、自身は身を引きたい気持ちが出たけれど、格別な気持ちで関わりはじめた人ならばともかく、浮舟はそうではないのだから、やはりそういう今までのおりの関係のまま置いておこうと思つた。

e 可憐でおっとりしていると思えるけれど、色好みな人にはなびいてしまふ人であつたのだなあ、匂宮のお相手としては、全くお似合いだと思つと、浮舟を譲つてしまつてもよく、自身は身を引きたい気持ちが出たけれど、格別な気持ちで関わりはじめた人ならばともかく、浮舟はそうではないのだから、やはりそういう今までのおりの関係のまま置いておこうと思つた。

問6 薫は浮舟の今後についてどのようなことを考えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 自分が愛想を尽かして捨てたなら、必ず匂宮が宇治から連れ出しなされるだろう。それが浮舟にとって後々どんなに気の毒なことになるか、匂宮は特にこれとお考えになることはあるまい。匂宮はどのように一時愛した女性を、後には一品の宮に女房として数人お仕えさせなされることだ、そのように浮舟が出仕したと見聞きするのはいさかいそうだが、やはり放つておけず、様子を知らなくた。

b 自分が愛想を尽かして捨てたなら、必ず匂宮が宇治から連れ出しなされるだろう。それが浮舟にとって後々どんなに気の毒なことになるか、匂宮は特にこれとお考えになることだ、そのように浮舟が出仕したと見聞きするのはいさかいそうだが、やはり放つておけず、様子を知らなくた。

c 自分が愛想を尽かして捨てたなら、必ず匂宮が宇治から連れ出しなされるだろう。それが浮舟にとって後々どんなに気の毒なことになるか、匂宮は特にこれとお考えになることだ、そのように浮舟が出仕したと見聞きするのはいさかいそうだが、やはり放つておけず、様子を知らなくた。

d 自分が愛想を尽かして捨てたなら、必ず匂宮が宇治から連れ出しなされるだろう。それが私にとって後々どんなに気がかりになるか、匂宮は特にこれとお考えになることだ、そのように浮舟が出仕したと見聞きするのはいさかいそうだが、やはり放つておけず、様子を知らなくた。

e 自分が愛想を尽かして捨てたなら、必ず匂宮が宇治から連れ出しなされるだろう。それが私にとって後々どんなに気がかりになるか、匂宮は特にこれとお考えになることだ、そのように浮舟が出仕したと見聞きするのはいさかいそうだが、やはり放つておけず、様子を知らなくた。

問7 「波越ゆる」の和歌について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 浮舟が薫に贈った和歌で、末の松山に波が越えるように、私が涙で濡れているとあなたはわからないで、私がいつまでも待ち続けているとあなたは思っていたのですね、ということ伝えてる。
- b 浮舟が薫に贈った和歌で、末の松山に波が越えるように、私は心変わりなどしていません、末長くあなたを待っています、ということ伝えてる。
- c 薫が浮舟に贈った和歌で、末の松山に波が越えるように、あなたが心変わりしているとも、私は気付かずいました、私を待ってくれているとばかり思っていたことです、ということ伝えてる。
- d 薫が浮舟に贈った和歌で、末の松山に波が越えるように、私があなたを裏切ることはないと、あなたはわからないのですか、私を待っていることこそがあなたの将来の幸せだと思えますよ、ということ伝えてる。
- e 薫が浮舟に贈った和歌で、末の松山に波が越えるように、あなたが涙で濡れていると、私はわからないでいました、いつまでも待たせてばかりいると思っていたのですが、ということ伝えてる。

— 23 —

問8 和歌への対応はどのようであったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 薫は和歌を受け取って、おかしいなと思って胸がどきりとした。分かったよなそぶりで返事をするのも憚られるし、傷つけてしまったのかもしれないので、受け取った文を元通りにして、「届け先がまちがっているようです。不都合なことに忙しく、何ごとも申し上げられなくて」と書き添えて浮舟にお返しした。
- b 薫は和歌を受け取って、おかしいなと思って胸がどきりとした。分かりづらいくらいから聞き返すのも憚られるし、まあがいであったなら具合が悪いので、受け取った文を元通りにして、「住む所を移された方が良さそうです。不思議なほど悩みを抱えているのですね、何ごとにつけても」と書き添えて浮舟にお返しした。
- c 浮舟は和歌を受け取って、おかしいなと思って胸がどきりとした。分かったよなそぶりで返事をするのも憚られるし、まあがいであったなら具合が悪いので、受け取った文を元通りにして、「届け先がまちがっているようです。なぜか気分がすくね、何ごとも申し上げられなくて」と書き添えて薫にお返しした。
- d 浮舟は和歌を受け取って、おかしいなと思って胸がどきりとした。分かったよなそぶりで返事をするのも憚られるし、傷つけてしまったも不都合なので、受け取った文を元通りにして、「届け先がまちがっているようです。不都合なことに気分がすくね、何ごとも申し上げられなくて」と書き添えて薫にお返しした。
- e 浮舟は和歌を受け取って、おかしいなと思って胸がどきりとした。分かりづらいくらいから聞き返すのも憚られるし、まあがいであったなら具合が悪いので、受け取った文を元通りにして、「住む所を移る方が良いように思います。不思議なほど悩みが多くて、何ごとにつけても」と書き添えて薫にお返しした。

— 24 —

問9 傍線部④について、「おぼす」の主語を明らかにして現代語訳せよ。

(以上)

2025年度入学試験問題

国語

注意事項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙はすべて黒鉛筆(HB)〈シャープペンシルは、HB 0.5 mm 以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- III 解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し、切取線から切り離してください。
- IV 試験時間は75分です。
- V 問題は28ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1. 解答欄にマークするときは、HBの黒鉛筆で次の正しい例のように、速く正確にぬりつぶしてください。
2. マークのしかた
 - (ア) 正しい例
 - a 解答が1つの場合 例えばイと解答するときは
 (1) のように、マークしてください。
 - b 解答が2つの場合 例えばイとウと解答するときは
 (1) または のように各1つずつマークしてください。
 - (イ) 悪い例

(1) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	○印でかむ。	このような記入をしてはいけません。
(2) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	全部をぬりつぶしていない。	
(3) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	レ印をつける。	
(4) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	印をつける。	
(5) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	1欄に2つ以上マークする。	
3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
 (1) のように×印をしても消したことはありません。
4. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、また汚したりしないでください。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人生の意味の哲学

ギリシア神話に登場するシーシュポスは、神々から下された刑罰として、重い岩を山頂まで押し上げるも、岩が山頂に達するやいなや麓まで転がり落ち、それをまた押し上げるをいうことを永遠に繰り返している。シーシュポスの生は、一見すると不条理であるかもしれない。しかし、にもかかわらず、彼は「幸福」なのだと言ふ。^{*1}

人生の意味の哲学は、この「シーシュポスの神話」をめぐる一九七〇年頃のリチャード・テイラーやトマス・ネーゲルの論文に始まり、スーザン・ウルフやサディアス・メッツの著作によって、二〇一〇年代に主に英米圏で確立した比較的新しい分野である。日本でこの流れを汲むものとして、山口尚の単著のほか、森岡正博と蔵田伸雄の編著『人生の意味の哲学入門』(二〇一三年、以下、「入門」がある。本稿では、これらの成果を踏まえながら、そのある一点に絞って、この「哲学」のあり方を批判的に検討していく。

「入門」では、宇宙的視点から見た私たちの人生の意味(のなさ)や、反出生主義存在するよりもいない方がよく、従って私たちは子供を持つべきではないとする考えとの関係、また人生の意味と幸福や自己実現との関係などの様々な角度から、「人生の意味」をめぐる問いに光が当てられる。しかし「入門」を一読して気になるのは、そこで語られる「人生の意味」が、誰の人生、誰にとっての意味なのかということだ。

「入門」の「あとがき」で、森岡は稀にウルフ以降の「人生の意味の哲学」が「エリート主義の傾向」を持つことを指摘している。

もつとも有意義な人生の具体例を、マザー・テレサ、ネルソン・マンデラ、アインシュタインなどの偉人に求め、彼らの人生を頂点とする有意義な人生の階層構造を当然のこととする議論が見られる。その階層構造の底辺に置かれるのは、麻薬を手に入れるために売春をする麻薬中毒の人生や、朝から晩までポテトチップスをかじってテレビドラマを見ているような人生である。エリート大学教授から見た上から目線の人生像だとも言えるだろう。

実際、ウルフはガンジーやマザー・テレサ、アインシュタイン、セザンヌらを「有意義な人生の範例」として挙げ、反対に「神話上の人物であるが先ほどのシーシュポスを「無意味な存在の典型例」として挙げていた。またメッツも「グロウインとアインシュタイン、マンデラとマザー・テレサ、ドストエフスキーとピカソといった人々の生を、それぞれ真・善・美という価値——メッツはそれを「人間存在の根本条件と呼ぶ——に貢献した有意義な人生の代表例」として扱っている。

ここには、人生の意味というものが何らかの客観的な観点から比較できるという考えが前提されている。人生の意味には何かしら客観的な基準があるとするとすれば「客観的」と呼ばれ、真・善・美への貢献をその基準とするメッツの「根本性理論」は、その(後)もつとも有力と考える一つのバージョンである。また人生の意味は「主観的な魅力と合致するとき」に生じるとするウルフの「ハイフリッド説」においても、何らかの「客観的な魅力」が存在すること自体は認められている。そして、それらにおいて有意義な人生の代表例として選ばれるのが、右に挙げたような「偉人」たちの生なのだ。こうした「典型例」が恣意的であることは「入門」の中でも何度か批判されているが、人生の意味には何らかの客観的条件があるという考え自体は、人生の意味の哲学において広く認められていると言つてよい。

ところで森岡は、人生の意味はその生を生きた本人の主観的満足や幸福によって決まるとする「主観説」に対する客観説からの「反論」として、次のような問いかけを提示している。

もしあなたがそのような主観説の主張をするのなら、たとえばヒトラーの人生をどう考えるのか。(…)もしヒトラーが、自分の人生の意味は自分が決めるのだから他人は黙ってほしい、と言ったとしたら、あなたはそれを許せるのか。もしヒトラーが(…)私の人生には大きな意味があると主張したら、あなたは、ヒトラー本人がそう言うのだからヒトラーの人生には大きな意味があったと肯定するのか。もしそうだとすれば、それはおかしいのではないか。

これはいさか危険な問いである。実際にメッツは「ヒトラーの人生は有意義か？」と問われ、(いくぶんシチュウに次のように答えている。ヒトラーは自らの知性を人間やその根本条件のためにポジティブに使用しなかった。それゆえ彼は知性を正しく用いなかった)であり、「殺し、破壊した」という意味でネガティブであったのだと。メッツの理論に基づけば、ヒトラーの人生は有意義とは言えないどころか、マイナスの意味を帯びているとすら言えるだろう。

しかしなぜ客観説論者は、ヒトラーの人生が有意義なものであったとヒトラー自身かと思うことを「許せない」のだろうか。彼らほどの資格において、それを「否定」できるとみなすのだろうか。ここにあるのは、単なる「エリート大学教授」の「上から目線」だけではないように思われる。私には、人生の意味に関するこのような「哲学」は、ヒトラーの思想とそう遠くはないものすら思えるのだ。

(中略)

人生の意味へのコミュニケーション的アプローチ

それでは、人生の意味はどのように考えられるべきなのだろうか。

*18 久木田水生は、人生の意味の哲学において広くとられている「真理条件アプローチ」に対して、彼が「語用論的アプローチ」と呼ぶものを提案している。「人生の意味は何か？」という問いは、例えば「一九〇〇年は閏年か？」といった問いとは質的に異なるものである。にもかかわらず、人生の意味の哲学では往々にして、ある年が閏年であるための必要十分条件を考えるのと同じように、ある人生に意味があるための必要十分条件を考えようとしていると彼は指摘する。では、それに代わるべき語用論的アプローチとは何か。それは私たちはどのような時にその言明を発するののか、そしてその言明を発することで私たちは何を聞き手に伝え、何を達成しているのかを考えるアプローチであるとされる。

久木田によると、人生の意味についての言明が三人称的に発せられることはほとんどない。つまり「マンデラの生は意味がある、なぜならば……」といった発語は「かなり不自然な、あるいはシュール・リアリティックなものである。人生の意味についての言明は通常二人称的か、一人称的にされる。例えば人が、ある人に向かって「あなたの生は無意味だ」と言う場面を想像してみよう(この言明も私には「不自然なものに思われるのだが)。この場合、それは何らかの一般的基準に照らしてその人の生に意味がないことを言っているのではなく、「相手」が自分の義務を怠っていること、周囲の要求に答えていないことに対する話者の感情的な反応の現れなのだ(久木田は分析する。あるいは人はふと、「自分の生には意味があるのだろうか」と自問するかもしれない)。この場合、それは(ここで、ある一般的基準に照らして言うのではなく)「シンコクな苦しみの表出」であるか、他者に向けられた場合は救いを求める「タンガン」なのかもしれない(久木田はいう。このように語用論的アプローチでは、人が人生の意味についての発語を行う状況に着目して、その発語の意味を理解しようとする。

久木田の批判は、私が人生の意味の哲学に対して覚えた違和感をかかなりの程度代替してくれる。しかし、疑問がないわけではない。彼の語用論的アプローチが明らかにするのは、「人生の意味」というよりは、むしろ「人生の意味の意味」といったものではないだろうか。真理条件アプローチは、まだしも人生の意味とはこれこれだといった風に、「人生の意味とは何か？」という問いそのものに答えようとしていた。一方で語用論的アプローチは、「人生の意味への問い」とは何か？といった問いを問うているのではないか。私たちが人生の意味を問うとき、問題となるのは人生の意味そのものであり、人生の意味について言明することの意味ではないだろう。そこで、私は人生の意味そのものについて考えるために、「コミュニケーション的アプローチ」でも呼べるものを提案したい。私たちが発する人生の意味への問いは、本質的にコミュニケーションとして、あるいはコミュニケーションと類比的なものとして、捉えらるべきではないか。そしてそれを問うことで私たちが求めているのは、その意味を満たしうるような条件ではなく、意味の生成それ自体なのではないだろうか。

このことを考えるにあたり、現代のコミュニケーション哲学を参照しよう。^{*19}三木那由他は、コミュニケーションにおける「意味」とは何かを理論化した^{*20}ブル・グライスの意図基礎意味論は話し手の意図に基づくとする考えを批判する形で、「意味」は「意図」とはある程度独立のものとして捉えらるべきだと論じた。三木によれば、コミュニケーションにおける発語言葉が振る舞

い)の意味は、話し手の意図のみによって決まるのでも、聞き手が自由を決められるものでもない。それは話し手と聞き手とのあいだに形成される「集合的信念」と、それを支える「共同的コミットメント」によって決まるものである。つまり、話し手が何かを意図し、聞き手がそれを理解するということは、「話し手がpと信じている」ということが話し手と聞き手の集合的信念となる」ことを意味する。この考えを、三木は「共同性基盤意味論と呼んでいる。

人生の意味についても、これと同じように考えてみることはできないだろうか。例えば自分の人生の意味を自分で理解しようとすることは、自分の発語の意味を自分で理解しようと同じく、ある種の矛盾を内包しているとは言えないか。共同性基盤意味論によると、発語の「意味」は話し手と聞き手とのあいだ、あるいは話し手の意図と聞き手の理解のあいだに成立する。たとえ聞き手が話し手の「意図」を誤解したとしても、その誤解したところに、誤解されたまま生じてしまうのが「意味」なのだと言え。だとすると、人生の意味への問いとは、一人称の「私」によって問われ、その「私」に向けて二人称的にしか答えられない問いのようなものではないか。そして人生の意味(つまりその問いへの答えとは「私」「私」に共同的にコミットする人々とのあいだで集合的に作られるものなのだ)。このように考えた場合、人生の意味を三人称的に理解しようとする客観説も、それを一人称的に理解できるとする主観説も、ともに成り立たなくなるのではないか。私たちは自らの人生の意味を、自分一人だけで決めることもできないならば、「私たち」という共同性の外にいる第三者によって決められることもできないのだ。

ところで三木は、こうした意味の共同性構築としてのコミュニケーションが成り立たない、ような事例についても考察している。コミュニケーションにおける意味の形成は共同的である以上、それは話し手の意図のみによって決まるわけではないが、話し手の意図を無視して決められてもならない。にもかかわらず、「話し手がその振る舞や発言で何かを意味しようとしても、聞き手の力によって別の何かを意味した」ことになれば、その別の何かに従って約束が結ばれてしまう(ことがしばしば起こりうる(これは単なる誤解とも異なり、その誤解が強制力を伴うような場合である。三木はこうした状況を「意味のセンユウ」と呼び、それを「コミュニケーション的暴力」の一つの典型として論じた。

人生の意味を三人称的に語る時、語る人と語られる人の人生のあいだにはコミュニケーションは生じていない。マザー・テレサやアインシュタインといった人々の生の意味(というよりは意味さ)は、確かにわかりやすいというよりも、そのわかりやすい一面だけを私たちは見ているのだ。しかし、彼らの生がいかに意味であらうと、そしてたとえ私たちの生が何らかの点で彼らの生に似通っているとしても、そのことが私たちが自身の生に意味を与えてくれるとは限らない。にもかかわらず、人生の意味の哲学が、私たちの人生の意味への問いを彼らの有意義さの基準によって理解しようとするとき、そこには何か「意味のセンユウと同じような暴力」が生じているのではないだろうか。

「自分には理解できない何かを相手は意味しているかもしれない」という可能性を認めることでしか、コミュニケーションは、少なくとも対等なそれは、始まらないのだろうか(三木は考察を結んでいる。この言葉は、哲学者メモリーヌ・ヴェイユの次の一節を想起させる。

正義。他人とは、(…)自分が(読み)とっているものとは別なものなのだということ。つねに認める心がまわっていること。でなければ、むしろ、その人は自分が(読み)とっているものとは、確かに別なもの、おそらくは全然別なものであることを、その人において(読み)とること。

人のおおのは、別なふう(に)読みとってほしいと、沈黙のうちに叫んでいる。

それゆえ、意味のわからない(自分たちにとって不合理的)人生を、意味のない人生とみなすことは、人が他者の生に対してなされる不正義なのだ。さらに他者の生を、その人の生と向き合うことなしに考え出された基準によって「理解」しようとすることも、その人の生に対して「コミュニケーション的暴力」を働くことだと言える。

えずそうすることしか、鬱^⑨になったり、サクランしたりせずに、日々を生き延びることができないのかもしれない。そしてそうして生き延びることが、その人に二人称的に接する人々の願^⑩い(期待ではなく)でもあるかもしれない。

ヒトラーにも、彼の人生を理解してくれるような他者がきつといたに違いない。あるいはさした人がいなかったと彼自身が思っていたからこそ、彼は死に物狂いで「意味」を求めたのかもしれない。そのとき彼がさがったのが、まさに人生の意味の哲学が客観的に称するような価値——彼は青年期にワグナーに熱狂し、芸術家や建築家になろうとしていた——であったことは、何を意味しているだろうか。ヒトラーの存在から目を逸らし、彼の人生を無意味とみなすこと、それは歴史そのものから目を背けることである。そのように彼の存在の「叫び」に耳を塞ぐことで私たちが示すのは、私たち自身の無関心と無理解に他ならないのだ。

(鶴田 想人「人生の意味」は誰のものか…人生の意味へのコミュニケーション的アプローチ「現代思想」2024年3月号所収)

注 *1 カミュ『フランスの小説家、哲学者』(一九三二―一九六〇) *2 リチャード・ナイラー『アメリカの哲学者』(一九一九―二〇〇三) *3 トマス・ネーゲル『アメリカの哲学者』(一九三七―) *4 ストサン・ウルブ『アメリカの哲学者』(一九五二―)

*5 サディアス・メッツ『南アフリカ在住の哲学者』(一九七二―) *6 山口尚の著作『幸福と人生の意味の哲学』なせ私には生きていかなばならないのか(二〇一九刊) 山口尚は日本の哲学者。(一九七八―) *7 森岡正博『日本の哲学者』(一九五八―)

*8 蔵田伸雄『日本の倫理学者』(一九六三―) *9 マザー・テレサ『インドで活動したカトリック修道女、社会奉仕活動家』(一九九〇―一九九七) *10 ネルソン・マンデラ『南アフリカの政治家』(一九八二―二〇一三) *11 アイシシユタイン『ドイツの物理学者』(一八七九―一九五五) *12 ガンジー『インドの民権運動指導者、思想家』(一八六九―一九四八) *13 セザンヌ『フランスの画家』(一八三九―一九〇六) *14 ゲーウィン『イギリスの博物学者、生物学者』(一八〇九―一八八三) *15 ドストエフスキ『ロシアの小説家』(一八二一―一八八二) *16 ビカソ『スペインの画家』(一八八一―一九七三) *17 ヒトラー『ドイツの政治家、ナチスの指導者。ドイツ民族が至上であり、社会的に劣性な存在は排除すべきだとする考えにもつき、知的障害者・精神障害者やユ

ダヤ人の大量殺戮^⑪を行った。(一八八九―一九四五) *18 久木田水生『日本の言語哲学者』(一九七三―) *19 三木那由他『日本の言語哲学者』(一九八五―) *20 ポール・グライス『イギリスの哲学者、言語学者』(一九二一―一九八八) *21 シモーヌ・ヴェイユ『フランスの哲学者』(一九〇九―一九四三) *22 ワグナー『ドイツの作曲家』(一八三二―一八八三)

問1 筆者は、人生の意味の哲学についてどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 人生の意味の哲学は、神々から下された刑罰として、重い岩を山頂まで押し上げることを永遠に繰り返す「シシユボスの神話」をめぐり、英米圏で古くから議論されてきた分野であると考えている。
- b 人生の意味の哲学は、宇宙的視点から見た私たちの人生の意味のなさや、反出生主義との関係、また人生の意味と「幸福や」「自己実現」との関係などを、批判的に検討する分野であると考えている。
- c 人生の意味の哲学は、ギリシヤ神話のシシユボスの生を「不条理」なものと思わずカミュの思想を踏襲し、偉人たちが「有意義な人生の範例」として挙げる「エリート主義の傾向」を持つと考えている。
- d 人生の意味の哲学は、有意義な人生の階層構造を当然のこととする「エリート主義の傾向」を持つと指摘されているが、この「哲学」のあり方について、誰の人生、誰にとつての意味なのかを問う必要があると考えている。
- e 人生の意味の哲学は、ギリシヤ神話のシシユボスの生を「無意味な存在の典型例」と見ますが、真・善・美という価値に貢献した人生だけが有意義であるのかを問う必要があると考えている。

問2 人生の意味を論じる「主観説」「客観説」「ハイブリッド説」について説明したものととして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 人生の意味はその生を生きたる本人の主観的満足や幸福によって決まるとする「主観説」に対し、真・善・美への貢献を人生の意味の基準とするメッツの「根本性理論」は客観説の一種であり、ウルフの「ハイブリッド説」においても真・善・美への貢献を人生の意味の基準とすることが認められている。

b 人生の意味はその生を生きたる本人の主観的満足や幸福によって決まるとする「主観説」に対し、真・善・美への貢献を人生の意味の基準とするメッツの「根本性理論」は客観説の一種であり、ウルフの「ハイブリッド説」はメッツの根本性理論の影響を強く受けている。

c 人生の意味はその生を生きたる本人の主観的満足や幸福によって決まるとする「主観説」に対し、真・善・美への貢献を人生の意味の基準とするメッツの「根本性理論」は客観説の一種であり、ウルフの「ハイブリッド説」においては真・善・美に貢献した「偉人」たちの生を有意義な人生の代表例とすることは批判されている。

d 人生の意味はその生を生きたる本人の主観的満足や幸福によって決まるとする「主観説」に対し、人生の意味には何かしら客観的な基準があるとする考えは「客観説」と呼ばれ、ウルフの「ハイブリッド説」においては「主観的魅力」に加えて、何かの「客観的な魅力」が存在する場合に人生の意味が決まるとされている。

e 人生の意味はその生を生きたる本人の主観的満足や幸福によって決まるとする「主観説」に対し、人生の意味には何かしら客観的な基準があるとする考えは「客観説」と呼ばれ、ウルフの「ハイブリッド説」においても「客観的魅力」を持つ「偉人」たちの生が有意義な人生の代表例とされている。

問3 筆者は、「ヒトラーの人生」についての客観説論者の主張をどのように捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a ヒトラーが自らの知性を人間やその「根本条件」のためにポジティブに使用せず、「殺し、破壊した」という意味でネガティブであったとする客観説論者の主張を、知性の使い方を誤っているという点で、ヒトラーの思想とそう遠くはないものと捉えている。

b ヒトラーが自らの知性を人間やその「根本条件」のためにポジティブに使用せず、「殺し、破壊した」という意味でネガティブであったとする客観説論者の主張を、対立する説(主観説)を一切認めようとしていない点で、ヒトラーの思想とそう遠くはないものと捉えている。

c ヒトラーが自らの知性を人間やその「根本条件」のためにポジティブに使用せず、「殺し、破壊した」という意味でネガティブであったとする客観説論者の主張を、人生の意味を客観的に序列化しようとするという点で、ヒトラーの思想とそう遠くはないものと捉えている。

d ヒトラーが自らの知性を人間やその「根本条件」のためにポジティブに使用せず、「殺し、破壊した」という意味でネガティブであったとする客観説論者の主張を、理論を政治に利用しようとしているという点で、ヒトラーの思想とそう遠くはないものと捉えている。

e ヒトラーが自らの知性を人間やその「根本条件」のためにポジティブに使用せず、「殺し、破壊した」という意味でネガティブであったとする客観説論者の主張を、「エリート大学教授」の上から目線による見方であるという点で、ヒトラーの思想とそう遠くはないものと捉えている。

問4 人生の意味の哲学における「真理条件アプローチ」と「語用論的アプローチ」を説明したものととして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ある人生に意味があるための必要十分条件を考えようとする「真理条件アプローチ」に対し、「語用論的アプローチ」は、「人生の意味は何か?」という問いを私たちがどのような時に発し、それを発することによって何を聞き手に伝え、何を達成しているのかを考えるアプローチであるとされる。
- b ある人生に意味があるための必要十分条件を考えようとする「真理条件アプローチ」に対し、「語用論的アプローチ」は、人生の意味についての言明をどのような時に三人称的に発することによって何を聞き手に伝え、何を達成しているのかを説明するアプローチであるとされる。
- c ある人生に意味があるための必要十分条件を考えようとする「真理条件アプローチ」に対し、「語用論的アプローチ」は、人生の意味についての言明が二人称的になされることによって、私たちは何を聞き手に伝え、何を達成しているのかを考えるアプローチであるとされる。
- d ある人生に意味があるための必要十分条件を考えようとする「真理条件アプローチ」に対し、「語用論的アプローチ」は、人がある人に向かって「あなたの生は無意味だ」と言ったり、「自分の生には意味があるのだろうか」と自問したりするのはなぜなのかを考えるアプローチであるとされる。
- e ある人生に意味があるための必要十分条件を考えようとする「真理条件アプローチ」に対し、「語用論的アプローチ」は、人が人生の意味についての発話を行う状況に着目して、その発話が「シンクノ苦しみ」の表出であるか、「救いを求めるタンガン」であるかを考えるアプローチであるとされる。

- 11 -

問5 筆者は、人生の意味の哲学における「語用論的アプローチ」に対しどのような見解を示しているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 「語用論的アプローチ」は、人生の意味を明らかにしようとするものであり、筆者が人生の意味の哲学に対して覚えた違和感を解消するには、疑問がないわけではないという見解を示している。
- b 「語用論的アプローチ」は、「人生の意味とは何か?」という問いそのものに答えようとしており、筆者が人生の意味の哲学に対して覚えた違和感を解消するものであるという見解を示している。
- c 「語用論的アプローチ」は、「人生の意味とは何か?」という問いそのものに答えようとしており、筆者が人生の意味の哲学に対して覚えた違和感を解消するものとは言えないという見解を示している。
- d 「語用論的アプローチ」は、「人生の意味への問いとは何か?」といった問いを問うており、人生の意味そのものを問うていないことに疑問があるという見解を示している。
- e 「語用論的アプローチ」は、人生の意味について言明することの意味を問うており、人生の意味そのものについて答えようとする「真理条件アプローチ」の方が、人生の意味の哲学の本流であるという見解を示している。

- 12 -

問6 コミュニケーション哲学における共同性基盤意味論と、人生の意味を考えるために筆者が提案する「コミュニケーション的アプローチ」を説明したものととして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 共同性基盤意味論では、発話の意味は話し手と聞き手の意図によって決まるものとされるが、人生の意味を考える場合も同様のアプローチによれば、「私」と「私」に共同的にコミットする人々とのあいだで意図的に作られるものだと考えることができる。
- b 共同性基盤意味論では、発話の意味は話し手と聞き手が相互に関わり合って形成される「集合的信念」によって決まるものとされるが、人生の意味を考える場合も同様のアプローチによれば、「私」と「私」に共同的にコミットする人々とのあいだで集合的に作られるものだと考えることができる。
- c 共同性基盤意味論では、発話の意味は話し手と話し手に共同的にコミットする聞き手がそれぞれに持つ信念によって決まるものとされるが、人生の意味を考える場合も同様のアプローチによれば、「私」と「私」に共同的にコミットする人々がそれぞれに持つ信念によって作られるものだと考えることができる。
- d 共同性基盤意味論では、発話の意味は話し手が何かを意図し、聞き手がそれを理解することによって決まるものとされるが、人生の意味を考える場合も同様のアプローチによれば、私たちは自らの人生の意味を「私たち」という共同性の内にある聞き手によって決めることができると言える。
- e 共同性基盤意味論では、発話の意味は話し手の意図を第三者が誤解したとしても、その誤解したところに、誤解されたまま生じるものとされるが、人生の意味を考える場合も同様のアプローチによれば、私たちは自らの人生の意味を「私たち」という共同性の外にいる第三者の誤解によって決められる場合があると言える。

- 13 -

問7 筆者は、人が他者の生に対してなしている「コミュニケーション的暴力」についてどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 人生の意味を三人称的に語るとき、語る人と語られる人の人生のあいだにはコミュニケーションが生じていないにもかかわらず、その人の生と向き合うことなしにその生を有意味であるとするのは、その人の生に対する「コミュニケーション的暴力」であると述べている。
- b 偉人たちの生がいかに有意味であろうと、そのことが私たち自身の生に「意味」を与えてくれるとは限らないにもかかわらず、彼らの生と向き合うことなしにその生を有意味であるとするのは、彼らの生に対する「コミュニケーション的暴力」であると述べている。
- c 自分には理解できない何かを相手は意味しているかもしれないという可能性を認めることでしか、コミュニケーションは始まらないにもかかわらず、その人の生と向き合うことなしに考え出された基準によってその生を理解しようとするのは、その人の生に対する「コミュニケーション的暴力」であると述べている。
- d 他人とは、自分が「読みとっている」とは別なものなのだと「つねに認める心がまえでいる」ことが正義であるにもかかわらず、他者の生を別なふう「読みとってしまふ」のは、その人の生に対する「コミュニケーション的暴力」であると述べている。
- e 意味のわからない(自分たちにとって不合理な)人生を、意味のない人生とみなすことは、人が他者の生に対してなしている不正義であるにもかかわらず、それを正義と信じて行っているのは、その人の生に対する「コミュニケーション的暴力」であると述べている。

- 14 -

⑧ シンチャウ

- a 準備不足から今度の試験はシンサンを定める結果となった。
- b 彼は先輩にフキンシンな発言をしました。
- c 美術館の応募作品をシンサする。
- d 気象庁は今朝のジシンの情報を発表した。
- e 彼の祖父は定期的に自宅を訪問シリヨウを受けている。

⑨ シンコク

- a 苦手なことをゴクフクする具体的方法が知っていた。
- b 彼は世界中で知られたチヨウコク家だ。
- c 彼女は写真で見た人物とゴクジしていた。
- d 彼は勇気を出して彼女にゴクハクし、交際し始めた。
- e この庭はシンザンユウコクの趣がある。

⑩ タンガン

- a 負傷者がタンカに乗せられて救急車に運ばれた。
- b あの会社は経営に失敗しハタンしてしまつた。
- c 先生に、万一失敗してもラタンするなど励まされた。
- d 医療技術の最新の成果にキョウタンした。
- e あの芸能人は背が高くタンセイな顔立ちをしている。

⑪ センユウ

- a 毎月給与から税金がケンセンチヨウシユウサウされている。
- b 彼はアレコード会社センソクの歌手だ。
- c プライベートな事をセンサクされるのは不快だ。
- d A軍はB国の市街地を不法にセンキョした。
- e 防衛省は新型のセンスイカンを購入した。

⑫ サクラン

- a 政府は子育てに関するセイサクを発表した。
- b 人名サクインがついた本は大変便利だ。
- c 彼は長年シコウサクゴを繰り返し、新商品を開発した。
- d かつて資本家が労働者をサクシユした時代があった。
- e 先生に卒業論文をテンサクしてもらつた。

二 次の文章は、『うつは物語』の一節である。あて言は、源実忠(本文中では「源宰相」)、源仲頼(本文中では「源少将」)、源涼(本文中では「源氏の中將」)、藤原仲忠(本文中では「藤中將」)など多くの男性に加え、実の兄の仲澄(本文中では「侍従」)からも思いを寄せられていた。そのあて言は東宮妃となることに決まつた。東宮入りの日、仲澄が正気を失つて寝込んでしまつたので、あて言と仲澄の母である大宮(本文中では「宮」)があて言に仲澄の希望を伝え、あて言は仲澄を見舞ふこととなつた。これを読んで、後の問いに答えよ。

侍従の君、見たてまつりたまひて、とみにものも聞こえたまはず。からうして、「今日や参りたまふ。御送りをたにえ仕つまつらざるなりぬること。生きてまた対面賜はらむこと、難くもあるかな」と、涙を流して聞こゆ。あて言、「心にもあらずのみなむ。いでや、なかはかくのみはものしたまはむ。侍従、「なほ、え侍るまじきに」そ侍るめれ。よろづのこと、心細く悲しき」と聞こゆ。あて言、「さな思し入りそ」とて立ちたまふ。

臥しまろびからくれなるに泣き流す涙の川にたぎる胸の火と書き、小さく押しもみて、御懐に投げ入る。あて言、散らさじと思して、取りて立ちたまひぬるを見るまに、絶え入りて息もせず。

宮、おとど、あるが中にもかなしき子のかかるよりも、よろづの故障こわらをしるして思ひ立ちたまへる御参り延びむこと、この度せずなりなば、つひにせずなりなむこと、と思すに、ただ惑ひに惑ひたまふ。「あなかま。しばしものないひそ」と、君たち、男女、集ひたまひて惑ひ騒ぎたまふをも知らず、外には御車どもを装束まとうき設けたり。みな人ものも覚え、賢しき人もなし。源宰相も、参りたまひぬと聞きて、絶え入りたまひぬれば、大殿には騒ぎ満ちてのしる。上達部かんとく、親王たち、もの思はし、嘆く中に、ただ源氏の中將、藤中將、いみじうかなしと思ひながら、世の中ははかなきものなり、かく参りたまひぬとも、限りと思はじ、と心強う思ひて、御送りもせむと思ひましたり。源少将も、伏し沈みて久しくなりぬるを、かねてより思ひやう、いかにこの参りたまはむ御送りを仕まつらむ、いさかなることも、殿のしたまふ度かたに参らぬはなきを、やむことなき

ことにしもまうでざらむや。教ならぬ身に、思ふまじきことを思ひ初めたるが、過こそあれ、なほ思ひて参りたり。かく、みな集ひて、御車寄せて、「時なりぬ」と聞こしめすまに、宮、おとど、百濟監の色しうつ伏し臥して、願を立たたまへどかひなし。あて言、宮、おとどのかく思し騒ぎ、よろづの人の参らせじとのみ思ふが聞かむこと、など思して、いみじくかなしきことをのみ聞こえつれど、耳にも聞き入れたまはぬ心地ながら、かく聞こえたまふ。

「別るとも絶ゆべきものか深川行く末もあるもの知らむ

な思し入りそや。いとみじく見たまへつと、心憂しと思ふものから、いとほしくなほと書き、「これ、かの君に奉れとのたまふ。兵衛の君、「おとど、宮、君たち、ひまなくおはします、かの君は、いふかひなくなりましたまひぬるものをと聞こゆ。あて言、「なほ持て奉れとのたまふ。兵衛、「まさ折持て参りて、御前に」。

宮、おとどに聞こえたまふ。「この頃、かくわづらふを、もの問はせれば、女の霊となひひつる。たはな何わがをかはせむ」^{*6}。忠こそ阿闍梨の御もとに、御文遣はす。驚きて参りたまへり。うちに召し入るとて、宮、女君たち、立ち思たまへる、もの覚えぬ君の御手に、この御文を押し入れて、指の先して腕うでに書きつく。「これ、御方の御文なり。侍従、死に果つるに、湯つゆばかり落とし入る。おとど、「忠こそその御験あり」と、喜ばたまふこと限りなし。かくまたたくを見たまひて、明日はまかつとも、今宵参らせむと思して、おとど、君たちが立ちたまひぬるほどに、この御文見て、ものわづかにいふ。喜ばたまふこと限りなし。

(「うつは物語」あて言巻による)

注 *1 おとど→源正頼。あて言の父。 *2 大殿→実忠源宰相の父である源季明の邸宅。 *3 殿→ここでは源正頼(あて言の父)のこと。 *4 百濟監→百濟から伝わった濃い青色。顔色が良くなった形容。 *5 兵衛の君→あて言付きの女房で、あて言の乳母。 *6 忠こそ阿闍梨→阿闍梨は、高位の僧の称号。忠こそと正頼は少年時代に親交があった。 *7 湯つゆ→煮じ薬。

問1 仲澄は、あて宮の見舞いを受けて、どのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 仲澄は、あて宮をご覧になって、すぐにはものを申し上げられない。やっこのことで、「どうとう今日来てくださいましたね。お見送りさえすることができないようになってしまいました。生きているうちにまたお会いすることも難しいことでしょう」で、涙を流して申し上げた。
- b 仲澄は、あて宮をご覧になって、すぐにはものを申し上げられない。やっこのことで、「いよいよ今日東宮入りでいらっしやいますか。お見送りをしないなどということはありえません。生きているうちにまたお会いすることも難しいことでしょうから」で、涙を流して申し上げた。
- c 仲澄は、あて宮をご覧になって、多くはものを申し上げられない。やっこのことで、「いよいよ今日東宮入りでいらっしやいますか。お見送りをしないなどということはありえません。生きているうちにまたお会いすることも難しいことでしょうから」で、涙を流して申し上げた。
- d 仲澄は、あて宮をご覧になって、多くはものを申し上げられない。やっこのことで、「どうとう今日来てくださいましたね。お見送りさえすることができないようになってしまいました。生きているうちにまたお会いすることも難しいことでしょう」で、涙を流して申し上げた。
- e 仲澄は、あて宮をご覧になって、すぐにはものを申し上げられない。やっこのことで、「いよいよ今日東宮入りでいらっしやいますか。お見送りさえすることができないようになってしまいました。生きているうちにまたお会いすることも難しいことでしょう」で、涙を流して申し上げた。

- 19 -

問2 涙を流す仲澄と、あて宮のやりとりはどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あて宮が「東宮妃になることは私が願ったことではないのです。まあ、どうしてそのように気弱なことばかりおっしゃるのしょう」と言ったところ、仲澄は「やはり、生きていられそうにありません。何もかも心細く悲しいことばかりです」と申し上げた。
- b あて宮が「東宮妃になることは私が願ったことではないのです。まあ、どうしてそのように気弱なことばかりおっしゃるのしょう」と言ったところ、仲澄は「やはり、あなたのおそばでお仕えすることはできないのです。何もかも心細く悲しいことばかりです」と申し上げた。
- c あて宮が「東宮妃になることは私が願ったことではないのです。私がここを出たら、そのようにおっしゃることがあります。どうか、いや、きつくないでしよう」と言ったところ、仲澄は「やはり、あなたのおそばでお仕えすることはできないのです。何もかも心細く悲しいことばかりです」と申し上げた。
- d あて宮が「あなたは、本心ではないことをおっしゃっているのです。私がここを出たら、そのようにおっしゃることがあります。どうか、いや、きつくないでしよう」と言ったところ、仲澄は「やはり、あなたのおそばでお仕えすることはできないのです。何もかも心細く悲しいことばかりです」と申し上げた。
- e あて宮が「あなたは、本心ではないことをおっしゃっているのです。まあ、どうしてそのように気弱なことばかりおっしゃるのしょう」と言ったところ、仲澄は「やはり、生きていられそうにありません。何もかも心細く悲しいことばかりです」と申し上げた。

- 20 -

問3 仲澄が歌を詠んだとき、どのようなことが起きたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 仲澄は「恋しさのあまり駆け回って嘆き、泣いて流す私の涙が川となり、燃えたぎる胸の火で沸きたぎっています」と歌を書いて、小さく押し丸めて自分の懐に投げ入れた。あて宮は言いふらされてはいけないとお思いいなつて、取り上げてその場をお立ちになり、仲澄はそれを見ると、そのまま氣絶してしまつて息もしない。
- b 仲澄は「病気で横になり動くこともできずに嘆き、泣いて流す私の涙が川となり、燃えたぎる胸の火で沸きたぎっています」と歌を書いて、小さく押し丸めてあて宮の懐に投げ入れた。あて宮は落とすまいと思いいなつて、手に持つてその場をお立ちになり、仲澄はそれを見ると、そのまま氣絶してしまつて息もしない。
- c 仲澄は「病気で横になり動くこともできずに嘆き、泣いて流す私の涙が川となり、燃えたぎる胸の火で沸きたぎっています」と歌を書いて、小さく押し丸めて自分の懐に投げ入れた。あて宮は言いふらされてはいけないと思いいなつて、取り上げてその場をお立ちになり、仲澄はそれを見ると、そのまま氣絶してしまつて息もしない。
- d 仲澄は「恋しさのあまり駆け回って嘆き、泣いて流す私の涙が川となり、燃えたぎる胸の火で沸きたぎっています」と歌を書いて、小さく押し丸めてあて宮の懐に投げ入れた。あて宮は落とすまいと思いいなつて、手に持つてその場をお立ちになり、仲澄はそれを見ると、そのまま氣絶してしまつて息もしない。
- e 仲澄は「病気で横になり動くこともできずに嘆き、泣いて流す私の涙が川となり、燃えたぎる胸の火で沸きたぎっています」と歌を書いて、小さく押し丸めてあて宮の懐に投げ入れた。あて宮は落とすまいと思いいなつて、手に持つてその場をお立ちになり、仲澄はそれを見ると、そのまま氣絶してしまつて息もしない。

- 21 -

問4 大宮や正頼は、仲澄やあて宮についてどのように考えていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 大宮や正頼は、大勢の中でも特にかわいい仲澄が気がかりであることよりも、さまざまな障害にもかかわらずと望み続けていらつしやつた東宮入りが延期となつてしまふので、今しなければ結局できなくなつてしまふと思われるので、ただ当惑している。
- b 大宮や正頼は、大勢の中でも特にかわいい仲澄が気がかりであることよりも、さまざまな障害にもかかわらずと望み続けていらつしやつた東宮入りが延期となつてしまふので、今度こそなんとしても成就してほしいと思われるので、ただ当惑している。
- c 大宮や正頼は、大勢の中でも特にかわいい仲澄がこのように危篤であることよりも、さまざまな障害にもかかわらずと望み続けていらつしやつた東宮入りが延期となつてしまふので、今しなければ結局できなくなつてしまふと思われるので、ただ当惑している。
- d 大宮や正頼は、大勢の中でも特にかわいい仲澄がこのように危篤であることよりも、さまざまな障害を乗り越えて意気込んでいらつしやつた東宮入りが延期となつてしまふので、今度こそなんとしても成就してほしいと思われるので、ただ当惑している。
- e 大宮や正頼は、大勢の中でも特にかわいい仲澄がこのように危篤であることよりも、さまざまな障害を乗り越えて意気込んでいらつしやつた東宮入りが延期となつてしまふので、今しなければ結局できなくなつてしまふと思われるので、ただ当惑している。

- 22 -

問5 あて宮の東宮入りを聞いた実忠、涼、仲忠の様子はどうであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 実忠も仲澄と同じように気を失ってしまったので、大殿では、家じゅう混乱してあて宮への恨み言を言う。涼や仲忠はひどく悲しいことだと思いが、世の中はすぐに移ろうものだ。あて宮が東宮妃になられたとしても、ずっと結婚が続くとは限るまいと、気をしっかり持って、東宮入りのお供をお勧め申し上げようと思っただけだ。
- b 実忠も仲澄と同じように気を失ってしまったので、大殿では、家じゅう混乱してあて宮への恨み言を言う。涼や仲忠はひどく悲しいことだと思いが、世の中は無常なものだ。あて宮が東宮妃になられたとしても、これを最後にお会いできないとは思わないうこと、互いを頼りに思っ、東宮入りのお供をお勧め申し上げようと思っただけだ。
- c 実忠も仲澄と同じように気を失ってしまったので、大殿では、家じゅう混乱して大騒ぎである。涼や仲忠はひどく悲しいことだと思いが、世の中はすぐに移ろうものだ。あて宮が東宮妃になられたとしても、これを最後にお会いできないとは思わないうこと、気をしっかり持って、東宮入りのお供をお勧め申し上げようと思っただけだ。
- d 実忠も仲澄と同じように気を失ってしまったので、大殿では、家じゅう混乱して大騒ぎである。涼や仲忠はひどく悲しいことだと思いが、世の中はすぐに移ろうものだ。あて宮が東宮妃になられたとしても、ずっと結婚が続くとは限るまいと、気をしっかり持って、東宮入りのお供をお勧め申し上げようと思っただけだ。
- e 実忠も仲澄と同じように気を失ってしまったので、大殿では、家じゅう混乱して大騒ぎである。涼や仲忠はひどく悲しいことだと思いが、世の中は無常なものだ。あて宮が東宮妃になられたとしても、これを最後にお会いできないとは思わないうこと、互いを頼りに思っ、東宮入りのお供をお勧め申し上げようと思っただけだ。

問6 あて宮の東宮入りを聞いて仲頼はどのように思っ、正頼邸に参上したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 仲頼は、なんとかしてあて宮の東宮入りのお供をお勧め申し上げたい。今までも用事のあるときでも正頼様がなさる催し事に参上しないことはなかったのだから、今回もやむをえない事情だからと参上しないわけにはいかない。そもそも高貴でおそれ多いあて宮に、思っではならない恋心を抱いてしまったのが過ちだったのだと思っ、正頼邸に参上した。
- b 仲頼は、なんとかしてあて宮の東宮入りのお供をお勧め申し上げたい。今までも少しのことでも正頼様がなさる催し事に参上しないことはなかったのだから、ましてこのような格別なことに限っ参上しないことがあろうか。そもそも取るに足りない身で、思いをかけてはならないあて宮に恋心を抱いてしまったのが過ちだったのだと思っ、正頼邸に参上した。
- c 仲頼は、なんとかしてあて宮の東宮入りのお供をお勧め申し上げたい。今までも用事のあるときでも正頼様がなさる催し事に参上しないことはなかったのだから、ましてこのような格別なことに限っ参上しないことがあろうか。そもそも取るに足りない身で、思いをかけてはならないあて宮に恋心を抱いてしまったのが過ちだったのだと思っ、正頼邸に参上した。
- d 仲頼は、どうしてあて宮の東宮入りのお供をお勧め申し上げないことがあろうか。今までも少しのことでも正頼様がなさる催し事に参上しないことはなかったのだから、今回もやむをえない事情だからと参上しないわけにはいかない。そもそも高貴でおそれ多いあて宮に、思っではならない恋心を抱いてしまったのが過ちだったのだと思っ、正頼邸に参上した。
- e 仲頼は、どうしてあて宮の東宮入りのお供をお勧め申し上げないことがあろうか。今までも用事のあるときでも正頼様がなさる催し事に参上しないことはなかったのだから、ましてこのような格別なことに限っ参上しないことがあろうか。そもそも高貴でおそれ多いあて宮に、思っではならない恋心を抱いてしまったのが過ちだったのだと思っ、正頼邸に参上した。

問7 いよいよ東宮入りというとき、正頼邸の様子を見てあて宮はどのように思っ、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あて宮は、父母がこのように仲澄のことで動揺しているなかで、多くの人が他の人をお供として参上させまいと思っ、仲澄が聞きつけたら厄介なことになるだろうと思っ、あて宮は、仲澄にはこれまでひどく冷たいことを言っ、仲澄は耳にも入れないようだったの、歌を詠んで仲澄に贈ることにした。
- b あて宮は、父母がこのように仲澄のことで動揺しているなかで、多くの人が他の人をお供として参上させまいと思っ、仲澄が聞きつけたら厄介なことになるだろうと思っ、あて宮は、仲澄にはこれまでひどく冷たいことを言っ、仲澄は耳にも入れないようだったの、歌を詠んで仲澄に贈ることにした。
- c あて宮は、父母がこのように仲澄のことで動揺しているなかで、自分を東宮入りさせまいと思っ、多くの人が、仲澄の事を聞きつけたら厄介なことになるだろうと思っ、あて宮は、仲澄にはこれまでひどく冷たいことを言っ、仲澄は耳にも入れないようだったの、歌を詠んで仲澄に贈ることにした。
- d あて宮は、父母がこのように仲澄のことで動揺しているなかで、多くの人が自分を東宮入りさせまいと思っ、仲澄の事を聞きつけたら厄介なことになるだろうと思っ、あて宮は、仲澄にはこれまでひどく冷たいことを言っ、仲澄は耳にも入れないようだったの、歌を詠んで仲澄に贈ることにした。
- e あて宮は、父母がこのように仲澄のことで動揺しているなかで、自分を東宮入りさせまいと思っ、多くの人が、仲澄の事を聞きつけたら厄介なことになるだろうと思っ、あて宮は、仲澄にはこれまでひどく冷たいことを言っ、仲澄は耳にも入れないようだったの、歌を詠んで仲澄に贈ることにした。

問8 あて宮は、仲澄にどのような手紙を書いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あて宮は「もしお別れしたら、別れを悲しむ涙の川がそのうちいつかは絶えてしまっように、将来兄妹の縁は絶えてしまっように」という歌を詠み、「そんなに思っ、格別に優しく接して下さいますように」と手紙を書いた。
- b あて宮は「もしお別れしたら、別れを悲しむ涙の川がそのうちいつかは絶えてしまっように、将来兄妹の縁は絶えてしまっように」という歌を詠み、「そんなに思っ、格別に優しく接して下さいますように」と手紙を書いた。
- c あて宮は「たとえお別れしても、別れを悲しむ涙の川が先まで流れていくように、私たちがそれぞれ生きていくの、お互いに将来のことも大切にわかって下さいますように」と手紙を書いた。
- d あて宮は「たとえお別れしても、別れを悲しむ涙の川が先まで流れていくように、私たちがそれぞれ生きていくの、お互いに将来のことも大切にわかって下さいますように」と手紙を書いた。
- e あて宮は「たとえお別れしても、別れを悲しむ涙の川が先まで流れていくように、私たちがそれぞれ生きていくの、お互いに将来のことも大切にわかって下さいますように」と手紙を書いた。



問9 兵衛の君はあて宮の手紙を受け取って、どのように対応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 兵衛の君は、あて宮にご両親やご兄妹たちが大勢いらっしゃいますし、あの君は氣を失ってしまっていました。すのこに「と申し上げたが、あて宮は「それでもやはり持っていて差し上げよ」とおっしゃるので、忠こそ阿闍梨の祈禱の際に仲澄の手に手紙を押し入れ、指で腕に「あて宮様のお手紙です」と書いた。
- b 兵衛の君は、あて宮にご両親やご兄妹たちが大勢いらっしゃいますし、あの君は氣を失ってしまっていました。すのこに「と申し上げたが、あて宮は「今すぐ持っていて差し上げよ」とおっしゃるので、忠こそ阿闍梨の祈禱の際に仲澄の手に手紙を押し入れ、指で腕に「あて宮様のお手紙です」と書いた。
- c 兵衛の君は、あて宮にご両親やご兄妹たちが大勢いらっしゃいますし、あの君は亡くなってしまったわけではないです。すのこに「と申し上げたが、あて宮は「今すぐ持っていて差し上げよ」とおっしゃるので、忠こそ阿闍梨の祈禱の際に仲澄の手に手紙を押し入れ、指で腕に「あて宮様のお手紙です」と書いた。
- d 兵衛の君は、あて宮にご両親やご兄妹たちが大勢いらっしゃいますし、あの君は氣を失ってしまっていました。すのこに「と申し上げたが、あて宮は「今すぐ持っていて差し上げよ」とおっしゃるので、忠こそ阿闍梨の祈禱の際に仲澄の手に手紙を押し入れ、指で腕に「あて宮様のお手紙です」と書いた。
- e 兵衛の君は、あて宮にご両親やご兄妹たちが大勢いらっしゃいますし、あの君は亡くなってしまったわけではないです。すのこに「と申し上げたが、あて宮は「それでもやはり持っていて差し上げよ」とおっしゃるので、忠こそ阿闍梨の祈禱の際に仲澄の手に手紙を押し入れ、指で腕に「あて宮様のお手紙です」と書いた。

問10 忠こそ阿闍梨の祈禱ののち、正頼邸の人々の様子はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 祈禱ののち、仲澄が薬湯を少し飲んだので、正頼は「忠こそ阿闍梨の祈禱の効験があった」とこの上なく喜んだ。仲澄が目には手をやるのをご覧になって、明日には仲澄の急変で退出することになって、今夜の内にて宮を東宮入りさせようとお思いになった。正頼や兄妹たちがその場をお立ちになった間に、仲澄はあて宮からの手紙を見て少しばかりものを書いた。人々はそれを聞いてこの上なく喜んだ。
- b 祈禱ののち、仲澄が薬湯を少し飲んだので、正頼は「忠こそ阿闍梨の祈禱の効験があった」とこの上なく喜んだ。仲澄が目には手をやるのをご覧になって、明日には仲澄の急変で退出することになるかもしれないが、今夜の内にて宮を東宮入りさせようとお思いになった。正頼は兄妹たちがその場をお立ちになった間に、あて宮からの手紙を見て何かつぶやいた。正頼はあて宮の手紙をこの上なく喜んだ。
- c 祈禱ののち、仲澄が薬湯を少し飲んだので、正頼は「忠こそ阿闍梨の祈禱の効験があった」とこの上なく喜んだ。仲澄がまばたきするのをご覧になって、明日には仲澄の急変で退出することになって、今夜の内にて宮を東宮入りさせようとお思いになった。正頼や兄妹たちがその場をお立ちになった間に、仲澄はあて宮からの手紙を見て少しばかりものを書いた。人々はそれを聞いてこの上なく喜んだ。
- d 祈禱ののち、仲澄が薬湯を少し飲んだので、正頼は「忠こそ阿闍梨の祈禱の効験があった」とこの上なく喜んだ。仲澄がまばたきするのをご覧になって、明日には仲澄の急変で退出することになって、今夜の内にて宮を東宮入りさせようとお思いになった。正頼や兄妹たちがその場をお立ちになった間に、仲澄はあて宮からの手紙を見て少しばかりものを書いた。人々はそれを聞いてこの上なく喜んだ。
- e 祈禱ののち、仲澄が薬湯を少し飲んだので、正頼は「忠こそ阿闍梨の祈禱の効験があった」とこの上なく喜んだ。仲澄が目には手をやるのをご覧になって、明日には決まっていたことだけれど、今夜の内にて宮を東宮入りさせようとお思いになった。正頼や兄妹たちがその場をお立ちになった間に、仲澄はあて宮からの手紙を見て少しばかりものを書いた。人々はそれを聞いてこの上なく喜んだ。

— 27 —

— 28 —

(以上)

入学試験問題
国 語

注 意 事 項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙はすべて黒鉛筆(HB)〈シャープペンシルは、HB 0.5 mm 以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
 (万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- III 解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し、切取線から切り離してください。
- IV 試験時間は75分です。
- V 問題は28ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1. 解答欄にマークするときは、HBの黒鉛筆で次の正しい例のように、濃く正確にぬりつぶしてください。
2. マークのしかた
 - (ア) 正しい例
 - a 解答が1つの場合、例えばイと解答するときは
 (1) のように、マークしてください。
 - b 解答が2つの場合、例えばイとウと解答するときは
 (1) または (1) のように各1つずつマークしてください。
 - (イ) 悪い例

(1) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	○印でかこむ。	このような記入をしてはいけません。
(2) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	全部をぬりつぶしていない。	
(3) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	レ印をつける。	
(4) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	l印をつける。	
(5) <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>	1欄に2つ以上マークする。	
3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
 (1) のように×印をしても消したことはありません。
4. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、また汚したりしないでください。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ベルリンで一九七〇年代に出版されたトルコの写真集がある。農村風景や都市の下町、モスクの一場面などをとらえた写真に、私は好感をもった。写真集は、出版当時、高い評価を受けたという。しかし、友人の評価はまったく別だった。写真集がとりあげているモチーフは偏っている。この写真集から、ドイツ人読者は選れた、前近代的な、貧しいトルコのイメージをつくりあげ、再生産する、それは誤った像であるというのだ。彼は、*1 イスタンブール出身で八〇年代初頭からベルリンに住んでいる写真家である。

私は友人のいうことは事実だと思ったが、彼の苛立ちを身近なものとして共感したわけではなかった。写真という媒体の性質上、ある局面が選ばれるのは仕方がない。ドイツ人が、トルコの都市風景よりも農村風景に魅力を見出すのも無理からぬことだ。少なくとも写真は、好意的にトルコやトルコの人々をとらえている。こういう写真集が存在してもいいのではないか。
 友人と二人な会話をしたのは二〇〇二年だったと思う。その数年後、ベルリンで催された日本人写真家の個展で、私は説明のできない居心地の悪さを味わった。京都の町を写した数百の作品が、会場の壁面を埋めていた。路地で遊ぶ子供や野良猫、談笑する老人の表情をとらえた作品の一点一点は魅力的だった。しかしそれが集結した会場は、「古きよき日本、京都」のイメージを大合唱していて、私には逃げ道がなかった。会場を訪れたドイツ人が、一緒に写真展を絶賛していることが、私の気持ちをいっそう滅入らせた。このドイツ人たちが、「日本文化に期待しているものを、写真展は提供していた。日本には別の顔もあるよ」と声を発したかったが、その機会はなかった。私の意見を、知り合いのドイツ人たちは鄭重に聞き流した。

このときの私の苛立ちは、トルコの写真集に対して友人が抱いた感情に通じている。いま振り返ってみると、彼は、あの写真集に対してというより、ドイツ社会がそれをどのように迎えたかということに、苛立っていたことがわかる。

問題になっていることは、文化の表象をめぐる、どの要素を選び出すか、それをどのように配置するかを、西欧が行っている、文化の当事者である者がそれに口をはさめないという状況である。西欧の好むトルコや日本が、一方的に生産/再生産されていくのを黙ってみているほかない。そのときに当事者が感じる苛立ちや戸惑い、そして抗議は黙殺される。

もつとも、この過程はそれほど単純に進行するわけではない。京都の写真展の展示方法は、写真家本人の希望によるものだったと聞く。だとするならば、これを西欧による一方的な文化の表象ということには留保が必要だろう。この写真家の演出は、意図したかどうかはともかく、ドイツ人の好む日本イメージを拡大再生産したわけで、ここには両者の協力関係が成立している。同時に、そこで表象されそくなったものも生みだされているわけである。

ある文化をどのように表象するかということには、それがどのように消費されるのかを含めて考えるなら、さまざまな立場の存在を封じ込めることが含意される。表象されそくなった事実を「仕方ない」で済ますことは、いつまで許されるのか。マイノリティの歴史学を動機づけているのは、この問題意識である。

マイノリティの歴史学として、ここでは三つのキーワードが与えられている。これらのキーワードについて、かんたんに述べよう。

第一に、ここでオリエンタリズムとは、*2 エドワード・サイードが一九七九年に出版した『オリエンタリズム』以来、さまざまな分野に大きな影響を与えて展開した一連の議論をさしている。オリエンタリズムをひとことというなら、西洋による東洋の本質主義的な表現となる。冒頭に紹介した私の友人の苛立ちも、このオリエンタリズムの例として説明することができる。
 オリエンタリズムが提示した批判は、多方面に展開していくものであるが、ここでは、他者を表象することが含む問題として把握しておきたい。表象する側(西洋)に権威があたえられていて、その言説空間に、表象される側(東洋)から接近する道が開かれていない。このような傾斜した配置が、西洋と東洋のあいだの境界をつくりあげてきた。

こう考えると、西洋と東洋という対立は、言説の生産を介して恣意的に構築されてきたことが見えてくる。*3 ジェニムズ・クロフォードは、西洋が手にしているこの権威を「父性的温情主義を帯びた語りの特権と呼んで、その意味するところを次のように説明している。「これらの書き手は、語ることのないひとつの東洋のために語る」とかと思うと、*4 スイタイしたり解体してしまっ

た「真理」を再構成し、また、東洋の真正さが消失してゆくことを嘆くかと思うと、たんなるネイティブの知りうる以上のことを知っている、というわけなのだ」。

第二に、ジェンダーという語については、ジョン・W・スコットが一九八八年の著書で与えた定義をとりあげよう。「ジェンダーとは、性差に関する知を意味している。私は知という言葉、ミシェル・フーコーにならって、さまざまな文化や社会が人間と人間の関係について……生み出す理解という意味で用いている。マイノリティの歴史学としてのジェンダーは、女性と男性の不平等というような素朴な女性論にとどまるものではないことを確認しておこう。それは人種や民族、階級などのために歴史から置き去りにされてきた他のマイノリティにも関心をもち、複数のヒエラルキー関係の重層など、より複雑な権力関係を問題にする」。

第三のポストコロニアル리즘は、特定しにくいことばである。まず、この語は、歴史的な時代性に規定されている。一九五〇年以降の植民地的権力の解体と再配分、それが反響した一九六〇年代から一九七〇年代にかけてのラディカルな文化理論と連動するものであるというクリフォードの時代認識を、まずあげておこう。この状況において、かつての植民地の人々が、文化について語る権利を自ら主張したり、研究者が生産した表象群の抑圧的な作用を批判したりする運動を、ポストコロニアル리즘として理解することができる。さらに、第三世界出身の知識人が第一世界で展開している批判的な言語活動も、ポストコロニアル리즘として理解される。たとえばガヤトリ・C・スピヴァクが、ネオコロニアルズムやグローバリゼーションに対する知識人のありようを批判的に論じていることなどがこれにあたる。こうした運動を、誰がどこで、どのように展開するのかが、きわめて多様である。

さて、これら三つのキーワードが導く議論は、重なり合い、不可分にかみ合う。これらの議論の全体にめぐりばりさせて、まとまりよく論じようとしてみても、あまり生産的ではないだろう。それは、現代の人間科学、社会科学、思想の広汎な領域において、さまざまな形でさまざまな方向に展開しつつある議論だからである。私がここでやろうとしていることは、錯綜する議論をカイコシ整理するのではなく、「歴史／物語りの哲学」という視点から、これら三つのキーワードが導く議論をマイノリティの歴史学として考えたときに、何が見えてくるのか、それが現代世界の理解や将来への展望にどのような貢献をなしているのか、を考察することである。

このことは、私が専門とする文化人類学が、異文化記述をとおしてやろうとしていることも通じる。文化人類学は、ほぼ二〇世紀と重なるその学の歴史のなかで、さまざまな相貌をもつてきた。植民地支配のもとで行われた文化人類学の調査研究が、対象をエキゾチックな他者ととらえていたことを否定することはできない。だが、二〇世紀後半にポスト構造主義の思想的影響を受けた文化人類学は、明らかに問題意識の転換を経験してきた。一九八〇年代後半以降の人類学者の仕事には、オリエンタリズム批判、ポストコロニアル状況への問題関心が、社会に埋め込まれたジェンダーを問題化してとらえる視線とともに明らかに前景化している。この転換は、異文化研究を命題としてきた人類学が、その研究対象を、自らの社会の外部にある「他者」から、われわれと同じ世界に住む「マイノリティ」へと配置しなおす転換であったともいえる。問題は、この過程で何が生まれているのかということである。マイノリティの歴史学という場合のマイノリティの意味は、このような実社会と学問世界における歴史的背景を考慮して理解される。

次に、マイノリティの歴史学の社会的・思想的な背景について、およそのリンクカクを把握し、それが「物語り論」と結びついていることを述べていこう。

野家啓一によれば、歴史哲学の文脈のなかに物語り論が一定の地歩を占めるようになったのは一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけてで、「物語り論は、マルクス主義のタイチヨウと構造主義の台頭という時代状況の中に出現した」。一方、オリエンタリズム批判をはじめとするマイノリティの歴史学をめぐる議論も、前節に引いたクリフォードが述べているように、六〇年代から七〇年代にかけてのラディカルな文化理論を経て生まれている。マイノリティの歴史学という問題構構を理解するために重要な議論として私は、分析理論としてのフランスのポスト構造主義と、その思想を実践的な問題意識から批判的に検討していくフェミニズムの政治学をあげたい。

ポスト構造主義理論において、それにもつとも明示的な影響を与えているのは、ミシェル・フーコーである。スコットの『ジェンダーと歴史学』がフーコーの強い影響のもとにあることは、すでにあげた引用からも明らかだろう。¹⁰ シャック・デリダの理論も積極的にとりいれようとするスコットは、意味と権力をめぐる政治に注意を向けるポスト構造主義の姿勢を、歴史研究に接しようとしている。彼女の課題のひとつは、「ジェンダーのような概念が、見せかけの不変性を獲得するやり方」がどのようなものであるのか、歴史資料を通して研究することだという。そのための理論的なよりどころとなるのが、ポスト構造主義である。

フーコーの権力理論の影響は、ベドウィンの女性について民族誌を著した文化人類学者のライラ・アブル・グトの研究に、顕著に見られる。アブル・グトは、一見したところ抵抗とは見えない形で行われている抵抗、システムの転覆や解放のイデオロギーとは結びつきそうもないような、女性たちが日常生活で行っている些細な抵抗の形をつぶさに記述する。彼女のキーワードは抵抗と権力で、抵抗を引き起こす権力を問題にする。そして、フーコーの理論が日常生活に埋め込まれた権力関係を発見し、記述するために有効であること、その権力理論の影響のもとに、抵抗のさまざまな形が関心を呼ぶようになったことを指摘する。フーコーの影響以前、一九六〇年代や七〇年代の抵抗に関する研究は、農民暴動や革命運動だけをとりあげて、日常生活に埋め込まれた抵抗には目をむけなかった。それは無意識のうちに、抵抗運動のヒーローにロマンティズムを投影していたためだといえる。

次に、フェミニズムの政治学について述べよう。マイノリティの歴史学に重要な影響を与えたフェミニズムの議論は、一九八〇年代に展開した。とくに、女性の経験が一樣でないことを指摘した研究が重要である。白人中産階級のフェミニストが有色人種の女性を代表しようとするとき、そこにいかんともしがたく潜むヒエラルキーや排除、抑圧の構造が明らかになった。ここからカテゴリーやアイデンティティの政治、ポジショナリティ(位置拘束性)をめぐって、重要な議論が展開している。一九八〇年代以降のフェミニズムの政治学は、西洋／東洋、白人／非白人などの二極構造を、排除や抑圧のシステムを支え、それを強化するものとして批判し、その境界にゆさぶりをかけ、境界を描きなおそうとしている。この点で、フェミニズムの政治学はマイノリティの歴史学と通じ合う。

たとえば、問題を複雑で具体的な社会的文脈のなかに配置して、歴史性を追及していく姿勢や、「現存する権力分布に對抗し、変革しようとする集団的試みの一部」であろうとする執着は、マイノリティの歴史学がフェミニズムの政治学と共有している傾向である。スコットは、自らの関心をフェミニストたちと共通した政治的なもので、「女と男のあいだに存在する不平等を指摘し、変革すること」とさえ述べている。

社会を変革することまで射程に含めた議論を展開するのであれば、その主張を、誰がどこから、誰に向けて発するのか、という位置(ポジション)の問題があらたに起こってくる。そのような批判を含んだ記述は、それが配置される議論の文脈に規定されるから、文脈に応じて語り直される、流動的な性格を帯びることにもなる。マイノリティの歴史学が必然的に帯びることになるこれらの性格は、方法論としてとらえた「物語り論」に対応する。そのことを確認しておこう。

物語り論の基本構図として、野家は次のように述べている。「物語りは直接的経験を受容可能な理解可能な経験へと組織化する」という意味で、経験の可能性の条件をつくっている。それは「直接的体験を境界条件としてもつ外部にひらかれたネットワーク」としてとらえられるのであって、¹¹ 異他的なものとしてソウクウすれば、そのたびに再調整が必要とされる。こう考えることによって、歴史の物語りには、再記述や語り直しが、はじめから条件づけられていることが説明される。同時に、この同じ考えから、歴史を批判的な視点から相対化してとらえることも可能になる。つまり、「現に物語られている歴史の抑圧・隠蔽作用を明らかにし出す視座が、物語り論によって与えられるというのである。このような方法論としての物語り論が、現実社会の不平等関係や矛盾に批判的な問題意識をもつマイノリティの歴史学の議論に適したものであることは、よく理解できることである」。

(兼明子)「マイノリティの歴史学——オリエンタリズム、ジェンダー、ポスト・コロニアルizm」による

* 一部省略したところがある

注 *1 イスタンブールトルコの大都市。 *2 エドワード・サイードはパレスチナ系アメリカ人の文学研究者、文学批評家。(一九三

五二〇〇三) *3 本質主義(人種、民族、性別など)の中に、ある生物学的・心理的な本質を認め、さらにそれを時代が変わっても変化することのない、普遍的で絶対的なものだとする考え。多種多様であるはずの人間をステレオタイプにすべて還元してしまう傾向がある。 *4 ジェイムズ・クリフォード「アメリカの人類学者」(一九四五) *5 ジョーン・W・スコット「アメリカの歴史学者」(一九四一) *6 ミシェル・フーコー「フランスの哲学者、思想家、作家、政治活動家、文芸評論家」(一九六六―一九八四) *7 ヒエラルキー―上下の序列関係に位置づけられたピラミッド型の組織の体系。 *8 ガヤトリ・C・スピワック「インド東部ベンガル出身のアメリカの文芸評論家、理論家、比較文学者」(一九四一) *9 野家啓一「日本の哲学者」(一九四九) *10 ジャック・デリダ「フランスの哲学者」(一九二〇―二〇〇四) *11 ベドウィン・中近東、北アフリカの砂漠に住むアラブ系遊牧民。 *12 ライラ・アブルゴト「アメリカの文化人類学者」(一九五二) *13 異他的なもの―根本的に異質なものを。

問1 筆者は、トルコの写真集とベルリンで開催された日本人写真家の個展に関して、どのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 筆者は、かつて農村風景や都市の下町、モスクの一場面などをとらえたトルコの写真集に好感をもったが、その後ベルリンで開催された日本人写真家の個展が、作品の一点一点は魅力的であっても、それが集積すると「古きよき日本、京都」のイメージとはほど遠いものになることを痛感し、友人が「遅れた、前近代的な、貧しいトルコ」のイメージをつくりあげ、再生産するトルコの写真集に対して苛立ったことに共感するようになった、と述べている。
- b 筆者は、かつて農村風景や都市の下町、モスクの一場面などをとらえたトルコの写真集に好感をもち、その後ベルリンで開催された日本人写真家の個展が、路地で遊ぶ子供や野良猫、談笑する老人の表情をとらえた作品ばかりであることは、説明のできない居心地の悪さを味わったが、友人がトルコの写真集に対して「遅れた、前近代的な、貧しいトルコ」のイメージをつくりあげ、再生産する、誤った像だと批判したことにはやはり共感できなかった、と述べている。
- c 筆者は、かつてトルコの写真集に対する友人の見方とは異なり、ドイツ人が、トルコの都市風景よりも農村風景に魅力を見出すのも無理からぬことだと思ったが、その後ベルリンで開催された日本人写真家の個展で、「古きよき日本、京都」のイメージをつくりあげ、再生産されるのを見て、ドイツ人たちが「日本文化」に期待する以上のものを提供するために、日本には別の顔もあるよと、声を発しなげらなうようになった、と述べている。
- d 筆者は、かつてトルコの写真集に対する友人の苛立ちに共感しなかったが、その後ベルリンで開催された日本人写真家の個展が、作品の一点一点は魅力的であっても、それが「古きよき日本、京都」のイメージを大合唱して、現在の「日本文化」を示す写真がなかったことに失望し、友人がトルコの写真集に「遅れた、前近代的な、貧しいトルコ」のイメージをつくりあげ、再生産することに苛立ったのはもっともだと思ふようになった、と述べている。
- e 筆者は、かつてトルコの写真集に対する友人の苛立ちに共感しなかったが、その後ベルリンで開催された日本人写真家の個展で、「古きよき日本、京都」という偏ったイメージが強調され、しかもドイツ人が、それを一様に絶賛し、日本には別の顔もあることに関心を持とうとはしなかったという体験をしたことで、友人がトルコの写真集をそのよりも、ドイツ社会がそれをどのように受け入れたかということに苛立つていたことが分かるようになった、と述べている。

問2 文化の表象をめぐる問題について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 文化の表象をめぐる問題は、どの要素を選び出すか、それをどのように配置するか、西欧が行っていて、文化の当事者である者がそれに口をはさめないという状況が問題である。しかし、この過程は単純に進行するわけではなく、西欧による一方的な文化の表象ということには留保が必要であり、マイノリティの歴史学の立場からは、両者の協力関係としてとらえなければならないと述べている。
- b 文化の表象をめぐる問題は、どの要素を選び出すか、それをどのように配置するか、西欧が行っていて、文化の当事者である者がそれに口をはさめないという状況が問題である。しかも、京都の写真展の展示方法が、ドイツ人の好む日本イメージを拡大再生産したように、ある文化をどのように表象するかは、それがどのように消費されるのかを含めて考えることにより、西欧におけるさまざまな立場の存在を封じ込めようとするべきであると述べている。
- c 文化の表象が生産／再生産されていく過程は、一方的に単純に進行するわけではなく、ある文化の表象を生産することとそれを拡大再生産することの間には協力関係が成立している。同時に、そこで表象されなかったものも生みだされているわけであって、文化の表象がどのように消費されるのかを含めて考えることにより、表象されなかった事実について問題にしていくべきだと述べている。
- d 文化の表象が生産／再生産されていく過程は、一方的に単純に進行するわけではなく、ある文化の表象を生産することとそれを拡大再生産することの間には協力関係が成立している。そのため、ある文化をどのように表象するかということには、それがどのように消費されるのかを含めて考えることにより、表象されなかった事実を「仕方ない」で済ますことは、いつまで許されるかが重要な問題であると述べている。
- e ある文化をどのように表象するかという問題は、京都の写真展の展示方法が、ドイツ人の好む日本イメージを拡大再生産したように、それがどのように消費されるのかを含めて考える必要がある。したがって、文化の表象は、文化の当事者が感じる苛立ちや戸惑いや抗議についてよりも、むしろさまざまな立場の存在を封じ込めることや、そこで表象されなかった事実について問題にしていくべきだと述べている。

問3 オリエンタリズムにおける西洋と東洋の間わりについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a エドワード・サイードは、オリエンタリズムとは、西洋による東洋の本質主義的な表現としてとらえた。これに対して、ジェイムズ・クリフォードは、オリエンタリズムでは、表象する側(西洋)に権威があたえられていて、その言説空間に、表象される側(東洋)から接近する道が開かれていないとサイードを批判したと述べている。
- b エドワード・サイードは、オリエンタリズムとは、西洋による東洋の本質主義的な表現としてとらえた。オリエンタリズムが提示した批判は、多方面に展開していくものであるが、サイードの議論では、表象する側(西洋)と表象される側(東洋)の傾斜した配置が、西洋と東洋のあいだの境界をつくりあげてきたことが含まれていないと述べている。
- c エドワード・サイードは、オリエンタリズムとは、西洋による東洋の本質主義的な表現としてとらえた。しかし、オリエンタリズムが提示した批判を、他者を表象することが孕む問題として把握するならば、西洋と東洋という対立は、逆に「言説の生産を介して恣意的に構築されてきたこと」として評価すべきであると述べている。
- d オリエンタリズムが提示した批判は、他者を表象することに関して、表象する側(西洋)に権威があたえられていて、その言説空間に、表象される側(東洋)から接近する道が開かれていないという問題を孕んでいる。こうした偏った言説の生産を介して、西洋と東洋という対立は恣意的に構築されてきたと述べている。
- e オリエンタリズムが提示した批判は、表象する側(西洋)と表象される側(東洋)の傾斜した配置が、西洋と東洋のあいだの境界をつくりあげてきたとされる。したがって、オリエンタリズムとは、西洋による東洋の本質主義的な表現というよりも、東洋にはなく西洋が手にしている「女性的温情主義を帯びた諸々の特権」を考えらるると述べている。



問4 筆者は、自身が専門とする文化人類学について、どのように述べているか。最も適切なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a オリエンタリズムとジェンダーとポストコロニアリズムという二つのキーワードが導く議論は、重なり合い、不可分からみあう。その錯綜する議論をマイノリティの歴史学として考えるためには、ほぼ二〇世紀と重なるその学の歴史のなかで、さまざまな相貌をもち、植民地支配のもとで行われた文化人類学の調査研究が有効であると述べている。
b 植民地支配のもとで行われた文化人類学の調査研究は、対象をエキゾチックな他者ととらえていた。しかし、二〇世紀後半にポスト構造主義の思想的影響を受けたことにより、文化人類学は問題意識を転換し、自らの社会の外部にある他者から、われわれと同じ世界に住む「マイノリティ」と、その研究対象を配置しなおしていると述べている。
c 植民地支配のもとで行われた文化人類学の調査研究は、対象をエキゾチックな他者ととらえていた。しかし、二〇世紀後半にポスト構造主義の思想的影響を受けたことにより、文化人類学は問題意識を転換し、オリエンタリズム批判やポストコロニアル状況への問題関心から、ジェンダーを問題化してとらえる視線へと変化してきていると述べている。
d 二〇世紀後半にポスト構造主義の思想的影響を受けた文化人類学は、明らかに問題意識の転換を経験し、オリエンタリズム批判やポストコロニアル状況への問題関心が、社会に埋め込まれたジェンダーを問題化してとらえる視線をもたらし、この過程で何が生まれているのかということが、これからの文化人類学の問題であると述べている。
e 二〇世紀後半にポスト構造主義の思想的影響を受けた文化人類学は、明らかに問題意識の転換を経験してきた。この転換は、オリエンタリズム批判やポストコロニアル状況への問題関心が、社会に埋め込まれたジェンダーを問題としてとらえる視線とともに前向き化することによって、マイノリティの歴史学という新しい学問を誕生させたことと述べている。

問5 ベドウィンの女性についてのライラ・アブルゴトの研究に関して、筆者はどのように述べているか。最も適切なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ライラ・アブルゴトの研究は、スコットのようにポスト構造主義を理論的なりどころとするものではなく、ミシェル・フーコーの権力理論の影響が顕著に見られるものであり、ベドウィンの女性たちが日常生活で行っている些細な抵抗の形をつぶさに記述することによって、抵抗を引き起こす権力を問題にするものであると述べている。
b ライラ・アブルゴトの研究は、ベドウィンの女性たちの日常生活に埋め込まれた権力関係を発見し、一見したところ抵抗とは見えない形で行われている抵抗、システムの変容や解放のイデオロギーとは結びつきそうもないような些細な抵抗の形をつぶさに記述するものであり、ミシェル・フーコーの権力理論の強い影響のもとであると述べている。
c ベドウィンの女性についてのライラ・アブルゴトの研究は、ミシェル・フーコーの影響以前、農民暴動や革命運動だけをとりあげて、日常生活に埋め込まれた抵抗には目をむけるものではなかったが、その後、日常生活に埋め込まれた権力関係を発見し、記述するフーコーの理論に影響され、抵抗を引き起こす権力を問題にするようになったと述べている。
d ベドウィンの女性についてのライラ・アブルゴトの研究は、抵抗に関する研究が農民暴動や革命運動だけをとりあげていた一九六〇年代や七〇年代には評価されなかったが、その後、フーコーの権力理論の影響のもとに、女性たちが日常生活で行っている些細な抵抗の形をつぶさに記述したものととして関心を呼ぶようになったと述べている。
e ベドウィンの女性についてのライラ・アブルゴトの研究は、女性たちが日常生活で行っている些細な抵抗の形をつぶさに記述するものであるのに対して、一九六〇年代や七〇年代の抵抗に関する研究は、フーコーの理論の影響を受けなかったため、農民暴動や革命運動だけをとりあげて、日常生活に埋め込まれた抵抗には目をむけなかったと述べている。

問6 フェミニズムの政治学は、マイノリティの歴史学とどのような点を通じ合うと筆者は述べているか。最も適切なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a フェミニズムの政治学は、マイノリティの歴史学に重要な影響を与えている。とくに、女性の経験が一樣でないことを指摘し研究が重要であり、それによってマイノリティの歴史学は、白人中産階級のフェミニストが有色人種の女性を代表しよとすると、そこにいかんともしがたく潜むヒエラルキーや排除・抑圧の構造を明らかにしたと述べている。
b フェミニズムの政治学は、マイノリティの歴史学に重要な影響を与えている。フェミニズムの議論では、白人中産階級のフェミニストが有色人種の女性を代表することによって、女性の経験に潜むヒエラルキーや排除・抑圧の構造が明らかにされ、排除や抑圧のシステムを批判するマイノリティの歴史学と通じ合うようになったと述べている。
c フェミニズムの政治学は、西洋・東洋、白人/非白人などの二極構造としてとらえる点で、マイノリティの歴史学と通じ合う。また、問題を複雑で具体的な社会的文脈のなかに配置して、歴史性を追及していく姿勢や、一現存する権力分布に對抗し、変革しようとする集団的試みの一部であるうとする執着は、両者が共有している傾向であると述べている。
d マイノリティの歴史学には、問題を複雑で具体的な社会的文脈のなかに配置して、歴史性を追及していく姿勢や、一現存する権力分布に對抗し、変革しようとする集団的試みの一部であるうとする執着がある。それらはフェミニズムの政治学と共有している傾向であり、両者はともに社会を変革しようとする問題意識にもつづいていと述べている。
e マイノリティの歴史学には、問題を複雑で具体的な社会的文脈のなかに配置して、歴史性を追及していく姿勢や、一現存する権力分布に對抗し、変革しようとする集団的試みの一部であるうとする執着がある。それらはフェミニズムの政治学と共有している傾向であるため、スコットは自らの関心を歴史から政治的なものと転換していったことと述べている。

問7 物語り論とマイノリティの歴史学との関わりについて、筆者はどのように述べているか。最も適切なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 物語り論では、物語りは経験の可能性の条件をつくり、直接体験を境界条件としてもつ外部に開かれたネットワークであると考えることによって、再記述や語り直しが、はじめから条件づけられている。一方、マイノリティの歴史学は、それが配置される文脈に規定され、文脈に応じて語り直される、流動的な性格を必然的に帯びることになるため、方法論としての物語り論は、マイノリティの歴史学から影響されたものとしてとらえることができる。
b 物語り論では、物語りは経験の可能性の条件をつくり、直接体験を境界条件としてもつ外部に開かれたネットワークであると考えることによって、歴史を批判的な視点から相対化してとらえることも可能になる。一方、マイノリティの歴史学は、その主張を、誰が、どこから、誰に向けて発するのか、という位置(ボジション)の問題があらたに起こるため、それが配置される文脈に規定されないようにするには、方法論としての物語り論が適していると述べている。
c 物語り論では、異地的なものソウクウすれば、そのたびに再調整が必要とされるが、こう考えることによって、歴史を批判的な視点から相対化してとらえることも可能になる。同様に、マイノリティの歴史学は、それが配置される文脈に規定され、文脈に応じて語り直される、流動的な性格を必然的に帯びることによって、社会を要革することができる。
d 物語り論では、再記述や語り直しが、はじめから条件づけられ、それによって歴史を批判的な視点から相対化してとらえることも可能になる。同様に、マイノリティの歴史学が、社会を要革する議論を展開するためには、その主張を発する位置(ボジション)の問題があらたに起こり、そのような位置の問題に対する批判を含んだ記述は、流動的な性格を必然的に帯びることになる。
e 物語り論では、再記述や語り直しが、はじめから条件づけられ、それによって現に物語られている歴史の抑圧・隠蔽作用を明らかにし直される。同様に、マイノリティの歴史学が、社会を要革する議論を展開するためには、その主張を発する位置(ボジション)の問題があらたに起こり、文脈に応じて語り直される、流動的な性格を必然的に帯びることになる。マイノリティの歴史学は方法論としての物語り論と結びついていると述べている。

① スイタイ

- a 経済がタイタイして失業率が高止まりする。
- b タイダな生活のために身を持ち崩す。
- c 首相がタイジンを表明する。
- d 泥酔して往來でシユウタイをさらす。
- e タイカなく定年まで勤める。

② カイコ

- a 自分の考えにコシユウしつづける。
- b 会社と二年間のコヨウ契約を結ぶ。
- c エンコ採用で就職が決まる。
- d サッカー部のコモンをつとめる。
- e リコ的な行動をつつしむ。

③ リンカク

- a 活発な火山活動によりチカク変動が起きる。
- b 自治体の活動や事業を助けるガイカク団体を設立する。
- c 組織のチユウカクを担う人材を育成する。
- d 柔道できたえたコッカクのたくましい身体。
- e 世間とカクゼツした生活を送る。

④ タイチヨウ

- a 会員から参加費を特別にチヨウシユウする。
- b 新商品の売れ行きがチイチヨウで困る。
- c 輸出に対して輸入がチヨウカする。
- d 用地を買収して道路をカクチヨウする。
- e 平家が減んだ環ノ浦はチヨウリエウが速いことで知られている。

⑤ ソウグウ

- a 過去十年間の活動をソウカツする。
- b 過ぎし日の出来事をソウキする。
- c 事件のシンソウが遂に明らかになる。
- d 雪山でソウナンした人を救助する。
- e 不正入国者を本国にソウカンする。

二 次の文章は、『落窪物語』の一節である。少将(本文では「少将」君)が落窪の君(本文では「君」)のもとに通い始めて三日目、この日も少将は落窪の君を訪ねようとしている。なお、帯刀は少将の乳母の子、あこぎは落窪の君の侍女、そして帯刀とあこぎは夫婦である。これを読んで、後の問いに答えよ。

暗うなるままに、雨いとあやにくに、かしらさし出づべくもあらず。少将、帯刀に語らひたまふ。「くちをしう。かしこにはえ行くまじかめり。この雨よ」どのたまへば、「ほどなく、いとほしくぞ侍らむかし。さ侍れど、あやにくになる雨は、いかがはせむ。心のおこたりならばこそあらめ。さる御文をだにものせさせたまへ」とて、けしきいと苦しげなり。「さかし」と書いたまふ。

① 帯「いつしか参り来むとて、しつるほどに、かうわりなめればなむ。心の罪にあらねど、おろかに思はずな」とて、帯刀も。

② 帯刀「ただ今参らむ。君、おはしまさむとしつるほどに、かかる雨なれば、くちをしと嘆かせたまふ」と言へり。

かかれば、いみじくちをしと思ひて、帯刀が返事に、

③ あこぎ「いでや、「降るとも」と言ふこともあるを、いとどしき御心さまにこそあめれ。さらに聞こえさすべきにもあらず。御みづからは、何の心地のよきにも、『来む』とだにあるぞ。かかるあやまりし出でて、かかるやうありや。さても世の人は、

④ 「今宵来さらむ」とか言ふなるを。おはしまさざらむよ」と書けり。君の御返りには、ただ、

⑤ (落窪の君世にふるをうき身と思ふわが袖のぬれはじめける宵の雨かなとあり。

持て参りたるほど、戌の刻も過ぎぬべし。灯のもとにて見たまひて、君も、いとあはれと思はしたり。帯刀がもとなる文を見

たまひて、「いみじくくねりたるは、げに今宵は三日の夜なりけるを、物のはじめに、ものあしう思ふらむ。いとどほし。雨は、いやまさりにまされば、思ひわびて、類杖つきて、しばし寄り居たまへり。帯刀、わりなしと思へり。うち嘆きて立てば、少将、「しばししたれ。いかにぞや。行きやせむとする」かちからまかりて言ひ慰めはべらむと申せば、君、「さらば、我と行かむ」とのたまふ。うれしと思ひて、「いとよはるなり」と申せば、「大傘一つまうけよ。衣服きて来む」とて、入りたまひぬ。帯刀、傘求めにありく。

あこぎ、かく出で立ちたまふも知らで、いとみじと嘆く。かかるままに、「愛敬な雨やと腹立てば、君、恥づかしけれど、「などかくは言ふぞ」どのたまへば、「なほよろしう降れかし。折憎くもおほえはべるかな」と言へば、「降りそまされ」と忍びやかに言はれてぞ、いかに思ふらむと、恥づかしう添ひ伏したまへり。

(『落窪物語』による)

問1 少将が落窪の君を訪ねようとした時の状況として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 暗くなっていくうちに、雨はどんどん激しくなり、使いの者を出すこともできないほどの土砂降りになった。少将は帯刀にお話しになる。「悔しいことだ。姫君のもとへ行けそうにもないようだ。この雨だからなあ」とおっしゃる。
- b 暗くなっていくうちに、雨はたいそう都合の悪いことに、使いの者を出すこともできないほどの土砂降りになった。少将は帯刀にお話しになる。「悔しいことだ。姫君のもとへ行きたいのに。この雨だからなあ」とおっしゃる。
- c 暗くなっていくうちに、雨はどんどん激しくなり、頭をちよつと外に出すこともできないほどの土砂降りになった。少将は帯刀にお話しになる。「残念だ。姫君のもとへ行きたいのに。この雨だからなあ」とおっしゃる。
- d 暗くなっていくうちに、雨はたいそう都合の悪いことに、頭をちよつと外に出すこともできないほどの土砂降りになった。少将は帯刀にお話しになる。「残念だ。姫君のもとへ行けそうにもないようだ。この雨だからなあ」とおっしゃる。
- e 暗くなっていくうちに、雨はたいそう都合の悪いことに、使いの者を出すこともできないほどの土砂降りになった。少将は帯刀にお話しになる。「残念だ。姫君のもとへ行きたいのに。この雨だからなあ」とおっしゃる。

- 19 -

問3 帯刀のことばを受けて少将はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 少将は、「なるほど、もつともだ」と言って、「雨が上がったらかがおうと、準備をしているうちに、こうして物思いにふけることになって、参ることができません。あなたを愛していないことではないのですが、わがままだと思わないでください」と手紙を書いた。
- b 少将は、「なるほど、もつともだ」と言って、「少しでも早くうかがおうと、準備をしているうちに、このようにしようもない雨なので、参ることができません。あなたを愛していないことではないのですが、いいかげんかと思わないでください」と手紙を書いた。
- c 少将は、「なるほど、もつともだ」と言って、「雨が上がったらかがおうと、準備をしているうちに、こうして物思いにふけることになって、参ることができません。あなたを愛していないことではないのですが、いいかげんかと思わないでください」と手紙を書いた。
- d 少将は、「なるほど、もつともだ」と言って、「少しでも早くうかがおうと、準備をしているうちに、こうして物思いにふけることになって、参ることができません。あなたを愛していないことではないのですが、いいかげんかと思わないでください」と手紙を書いた。
- e 少将は、「なるほど、もつともだ」と言って、「少しでも早くうかがおうと、準備をしているうちに、このようにしようもない雨なので、参ることができません。あなたを愛していないことではないのですが、わがままかと思わないでください」と手紙を書いた。

- 21 -

問2 少将のことばに帯刀は何と答え、またその時どのような様子だったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 帯刀は、「通い始めてから間もなくのことだ、落窪の君がおかわいそうでございませぬ。そうではございませぬが、この雨ではどうしようもありません。少将様の愛情が薄いのであれば別ですが、お手紙だけでもお書きなさいませ」と言って、とても困った様子だった。
- b 帯刀は、「もう少して雨は止むと思えますが、落窪の君がおかわいそうでございませぬ。そうだとすると、この雨ではどうしようもありません。少将様の愛情が薄いのであれば別ですが、とにかくお手紙をお書きなさいませ」と言って、とても困った様子だった。
- c 帯刀は、「通い始めてから間もなくのことだ、落窪の君を強く愛しておられるのでございませぬ。そうだとすると、この雨ではどうしようもありません。少将様の愛情が薄いのであれば別ですが、とにかくお手紙をお書きなさいませ」と言って、とても困った様子だった。
- d 帯刀は、「もう少して雨は止むと思えますが、落窪の君がおかわいそうでございませぬ。そうではございませぬが、この雨ではどうしようもありません。少将様の愛情が薄いのであれば別ですが、お手紙だけでもお書きなさいませ」と言って、とても辛そうな様子だった。
- e 帯刀は、「通い始めてから間もなくのことだ、落窪の君を強く愛しておられるのでございませぬ。そうではございませぬが、この雨ではどうしようもありません。少将様の愛情が薄いのであれば別ですが、とにかくお手紙をお書きなさいませ」と言って、とても辛そうな様子だった。

- 20 -

問4 帯刀は手紙に何と書いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 帯刀は、「今すぐ参ります。少将様も、うかがおうとしているうちに、この雨なので、残念だと嘆いていらっしゃいます」と書いた。
- b 帯刀は、「雨で参れないことがあります。落窪の君も、少将様がおいでになると思っていたのに、この雨なので、残念だと嘆きでしょう」と書いた。
- c 帯刀は、「雨で参れないことがあります。少将様も、今ごろは一緒だったはずなのに、この雨なので、悔しいと嘆いていらっしゃいます」と書いた。
- d 帯刀は、「今すぐ参ります。落窪の君も、少将様がおいでになると思っていたのに、この雨なので、悔しいとお嘆きでしょう」と書いた。
- e 帯刀は、「今すぐ参ります。少将様も、今ごろは一緒だったはずなのに、この雨なので、残念だと嘆いていらっしゃいます」と書いた。

- 22 -

問5 帯刀の手紙に、あこぎは何と答えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あこぎは、「いやいや、『降るとも』という古歌もありますのに、なんともひどい少将様のお心です。今更そんなことを言われても困ります。あなたご自身はどんなつもりで『参ります』とまで書いたのですか。そんな言い訳だけで、そのうえひとりであるだなんて言いようはありますか。それにしても世間では今宵来さらむ」というそうです。少将様が来ないことなどありえまじょうか」と答えた。

b あこぎは、「ごまあ、『降るとも』という古歌もありますのに、なんともひどい少将様のお心です。今更そんなことを言われても困ります。あなたご自身はどんなつもりで『参ります』とまで書いたのですか。そんな言い訳だけで、そのうえひとりであるだなんて言いようはありますか。それにしても世間では今宵来さらむ」というそうです。少将様はこれから先もいらつしやらないのでしやうね」と答えた。

c あこぎは、「ごまあ、『降るとも』という古歌もありますのに、なんともひどい少将様のお心です。まったく姫君に申し上げる言葉もありません。あなたご自身はどんなつもりで『参ります』とまで書いたのですか。そんな言い訳だけで、そのうえひとりであるだなんて言いようはありますか。それにしても世間では今宵来さらむ」というそうです。少将様はこれから先もいらつしやらないのでしやうね」と答えた。

d あこぎは、「いやいや、『降るとも』という古歌もありますのに、なんともひどい少将様のお心です。今更そんなことを言われても困ります。あなたご自身はどんなつもりで『参ります』とまで書いたのですか。こんな失敗をしかして、そのうえひとりであるだなんて言いようはありますか。それにしても世間では今宵来さらむ」というそうです。少将様が来ないことなどありえまじょうか」と答えた。

e あこぎは、「ごまあ、『降るとも』という古歌もありますのに、なんともひどい少将様のお心です。まったく姫君に申し上げる言葉もありません。あなたご自身はどんなつもりで『参ります』とまで書いたのですか。こんな失敗をしかして、そのうえひとりであるだなんて言いようはありますか。それにしても世間では今宵来さらむ」というそうです。少将様はこれから先もいらつしやらないのでしやうね」と答えた。

将様はこれから先もいらつしやらないのでしやうね」と答えた。

問6 落窪の君が返した和歌の解釈として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この和歌は、「この世にあって年老いて行くのをつらい身だと思ってる私の袖が、今宵の雨で濡れ始めたこととどう意味であり、少将の訪れのないことによつて袖が涙に濡れることを詠んでいる。「世にふる」の「ふる」は、「降るとも」の掛詞、「わが袖の」が「ぬれ」に掛かる枕詞である。

b この和歌は、「この世にあって年老いて行くのをつらい身だと思ってる私の袖が、今宵の雨で濡れ始めたこととどう意味であり、心なく降る雨を恨み袖が涙に濡れることを詠んでいる。「世にふる」の「ふる」は、「降るとも」の掛詞、「ぬれ」は縁語である。

c この和歌は、「この世に生きているのをつらい身だと思ってる私の袖が、今宵の雨で濡れ始めたこととどう意味であり、少将の訪れのないことによつて袖が涙に濡れることを詠んでいる。「世にふる」の「ふる」は、「降るとも」の掛詞、「ぬれ」は縁語である。

d この和歌は、「この世に生きているのをつらい身だと思ってる私の袖が、今宵の雨で濡れ始めたこととどう意味であり、少将の訪れのないことによつて袖が涙に濡れることを詠んでいる。「世にふる」の「ふる」は、「降るとも」の掛詞、「わが袖の」が「ぬれ」に掛かる枕詞である。

e この和歌は、「この世に生きているのをつらい身だと思ってる私の袖が、今宵の雨で濡れ始めたこととどう意味であり、心なく降る雨を恨み袖が涙に濡れることを詠んでいる。「世にふる」の「ふる」は、「降るとも」の掛詞、「わが袖の」が「ぬれ」に掛かる枕詞である。

問7 少将と帯刀が、あこぎと落窪の君からの手紙を受け取った時の様子はどうか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 使いが持ってきた返事を、灯のもとでご覧になり、少将も、「とてもかわいそうだ」とお思いになった。帯刀のところに来た手紙を、ご覧になり、「たいそうひねくれた手紙なことだ。さすがに今宵は三日目の夜だったから、新婚早々に縁起の悪いことだと思つてしまふよ」とお思いになった。

b 使いが持ってきた返事を、灯のもとでご覧になり、少将も、「とてもかわいそうだ」とお思いになった。帯刀のところに来た手紙を、ご覧になり、「たいそうひねくれた手紙なことだ。さすがに今宵は三日目の夜だったから、新婚早々に私のことをいっかげんだと思つてしまふよ」とお思いになった。

c 使いが持ってきた返事を、灯のもとでご覧になり、少将も、「とてもかわいそうだ」とお思いになった。帯刀のところに来た手紙を、ご覧になり、「ひどくすねているようだな。本当に今宵は三日目の夜だったのに、新婚早々に私のことをいっかげんだと思つてしまふよ」とお思いになった。

d 使いが持ってきた返事を、灯のもとでご覧になり、少将も、「とてもしみじみとしている」とお思いになった。帯刀のところに来た手紙を、ご覧になり、「ひどくすねているようだな。本当に今宵は三日目の夜だったのに、新婚早々に私のことをいっかげんだと思つてしまふよ」とお思いになった。

e 使いが持ってきた返事を、灯のもとでご覧になり、少将も、「とてもしみじみとしている」とお思いになった。帯刀のところに来た手紙を、ご覧になり、「ひどくすねているようだな。さすがに今宵は三日目の夜だったから、新婚早々に私のことをいっかげんだと思つてしまふよ」とお思いになった。

問8 手紙を読んだ後の少将と帯刀の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 雨はますます激しさを増すので、少将は、思い悩み頬杖をついて、しばらく脇息にもたれかかっていたらつしやった。帯刀がため息をつきながら立ち上がると、少将はもう少し座つていなさい。どうしようというのだ。行くことかというのか」といふと、帯刀は「私だけでも歩いて行つて、落窪の君をお慰めいたしましやう」と少将に言った。

b 雨はますます激しさを増すので、少将は、思い悩み頬杖をついて、しばらく脇息にもたれかかっていたらつしやった。帯刀がため息をつきながら立ち上がると、少将は「もう少し座つていなさい。どうしようというのだ。行くことはできないか」といふと、帯刀は「私だけでも歩いて行つて、落窪の君をお慰めいたしましやう」と少将に言った。

c 雨はますます激しさを増すので、少将は、思い悩み頬杖をついて、しばらく脇息にもたれかかっていたらつしやった。帯刀がため息をつきながら立ち上がると、少将は「もう少し座つていなさい。どうしようというのだ。行くことかというのか」といふと、帯刀は「私だけでも歩いて行つて、落窪の君をお慰めいたしましやう」と少将に言った。

d 雨はますます激しさを増すので、少将は、思い悩み頬杖をついて、しばらく脇息にもたれかかっていたらつしやった。帯刀がため息をつきながら立ち上がると、少将は「もう少し座つていなさい。どうしようというのだ。行くことはできないか」といふと、帯刀は「私だけでも歩いて行つて、落窪の君をお慰めいたしましやう」と少将に言った。

e 雨はますます激しさを増すので、少将は、思い悩み頬杖をついて、しばらく脇息にもたれかかっていたらつしやった。帯刀がため息をつきながら立ち上がると、少将は「もう少し座つていなさい。どうしようというのだ。行くことかというのか」といふと、帯刀は「私だけでも歩いて行つて、落窪の君をお慰めいたしましやう」と少将に言った。

問9 帯刀が一人で行くと言った後の二人の様子として最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 少将はそれなら、私も「一緒に行く」とおっしゃる。少将は晴れやかな気持ちになり、帯刀は「ではしっかりお伴します」と申し上げると、少将は「大傘を一つ用意せよ。着物を脱いでこよう」と言って、ご自分の部屋に入られた。
- b 少将は「それでは、私は私で行こう」とおっしゃる。少将は晴れやかな気持ちになり、帯刀は「それはとてもよいことです」と申し上げると、少将は「大傘を一つ用意せよ。着物を脱いでこよう」と言って、ご自分の部屋に入られた。
- c 少将は「それでは、私は私で行こう」とおっしゃる。帯刀は喜んで「それはとてもよいことです」と申し上げると、少将は「大傘を一つ用意せよ。着物を脱いでこよう」と言って、ご自分の部屋に入られた。
- d 少将はそれなら、私も「一緒に行く」とおっしゃる。帯刀は喜んで「ではしっかりお伴します」と申し上げると、少将は「大傘を一つ用意せよ。着物を脱いでこよう」と言って、ご自分の部屋に入られた。
- e 少将はそれなら、私も「一緒に行く」とおっしゃる。帯刀は喜んで「それはとてもよいことです」と申し上げると、少将は「大傘を一つ用意せよ。着物を脱いでこよう」と言って、ご自分の部屋に入られた。

問10 その頃、落窪の君とあこぎはどのような様子だったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あこぎは、少将たちが出発されることを知って、とても感慨深いことだと嘆息している。「憎らしい雨だ」と怒ると、落窪の君は恥ずかしいけれど、「どうしてそんなことを言うの」とおっしゃる。あこぎが「降るにしてもほどよく降ってくれたらいいのに。こんなに降るとは折悪しく思われます」と言うと、君は「降りやまされる」とこっそり口ずさまれて、「あこぎはこんな私をどう思うだろう」と、恥ずかしくてうつ伏せになっておられる。
- b あこぎは、少将たちが出発されることも知らず、とても情けないことだと嘆息している。「優しい雨だ」と怒ると、落窪の君は恥ずかしいけれど、「どうしてそんなことを言うの」とおっしゃる。あこぎが「少将様の心を知るのにはほどよく降ってほしいです。心憎いほどの降り方と思われませんか」と言うと、君は「降りやまされる」とこっそり口ずさまれて、「あこぎはこんな私をどう思うだろう」と、恥ずかしくてうつ伏せになっておられる。
- c あこぎは、少将たちが出発されることを知って、とても感慨深いことだと嘆息している。「優しい雨だ」と大きな声で言うと、落窪の君は恥ずかしいけれど、「どうしてそんなことを言うの」とおっしゃる。あこぎが「少将様の心を知るのにはほどよく降ってほしいです。心憎いほどの降り方と思われませんか」と言うと、君は「降りやまされる」とこっそり口ずさまれて、「あこぎはこんな私をどう思うだろう」と、恥ずかしくてうつ伏せになっておられる。
- d あこぎは、少将たちが出発されることも知らず、とても情けないことだと嘆息している。「憎らしい雨だ」と怒ると、落窪の君は恥ずかしいけれど、「どうしてそんなことを言うの」とおっしゃる。あこぎが「降るにしてもほどよく降ってくれたらいいのに。こんなに降るとは折悪しく思われます」と言うと、君は「降りやまされる」とこっそり口ずさまれて、「あこぎはこんな私をどう思うだろう」と、恥ずかしくてうつ伏せになっておられる。
- e あこぎは、少将たちが出発されることを知って、とても感慨深いことだと嘆息している。「優しい雨だ」と大きな声で言うと、落窪の君は恥ずかしいけれど、「どうしてそんなことを言うの」とおっしゃる。あこぎが「降るにしてもほどよく降ってくれたらいいのに。こんなに降るとは折悪しく思われます」と言うと、君は「降りやまされる」とこっそり口ずさまれて、「あこぎはこんな私をどう思うだろう」と、恥ずかしくてうつ伏せになっておられる。

(以上)

2025年度入学試験問題

国語

注意事項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙はすべて黒鉛筆(HB)〈シャープペンシルは、HB 0.5 mm以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- III 解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し、切取線から切り離してください。
- IV 試験時間は75分です。
- V 問題は28ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1. 解答欄にマークするときは、HBの黒鉛筆で次の正しい例のように、濃く正確にぬりつぶしてください。
2. マークのしかた
 - (ア) 正しい例
 - a 解答が1つの場合 例えばイと解答するときは
 (1) (イ) (ロ) (ハ) (ニ) のように、マークしてください。
 - b 解答が2つの場合 例えばイとウと解答するときは
 (1) (イ) (ロ) (ハ) (ニ) または (1) (イ) (ロ) (ハ) (ニ) のように各1つずつマークしてください。
 - (イ) 悪い例

(1) <input checked="" type="radio"/> (イ) <input checked="" type="radio"/> (ロ) <input checked="" type="radio"/> (ハ) <input checked="" type="radio"/> (ニ) <input checked="" type="radio"/>	○印でかこむ。	このような記入をしてはいけません。
(2) <input checked="" type="radio"/> (イ) <input checked="" type="radio"/> (ロ) <input checked="" type="radio"/> (ハ) <input checked="" type="radio"/> (ニ) <input checked="" type="radio"/>	全部をぬりつぶしていない。	
(3) <input checked="" type="radio"/> (イ) <input checked="" type="radio"/> (ロ) <input checked="" type="radio"/> (ハ) <input checked="" type="radio"/> (ニ) <input checked="" type="radio"/>	レ印をつける。	
(4) <input checked="" type="radio"/> (イ) <input checked="" type="radio"/> (ロ) <input checked="" type="radio"/> (ハ) <input checked="" type="radio"/> (ニ) <input checked="" type="radio"/>	ノ印をつける。	
(5) <input checked="" type="radio"/> (イ) <input checked="" type="radio"/> (ロ) <input checked="" type="radio"/> (ハ) <input checked="" type="radio"/> (ニ) <input checked="" type="radio"/>	1欄に2つ以上マークする。	
3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
 (1) (イ) (ロ) (ハ) (ニ) のように×印をしても消したことはありません。
4. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、また汚したりしないでください。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人生雑誌と大衆教養主義

かつて、「人生雑誌」が盛り上がり上がつっていた時代があった。一九五〇年代半ばの時期である。いまとなつては忘れられた感もあるが、「人生手帖」^{※1}は当時の二大人生雑誌であった。いずれも高校など上級学校に進学できなかった青少年層を主要読者とし、「いかに生きるべきか」を主題とした。特集企画でも、「悔いのない生き方を求めて」「人生いきるに備する」といったテーマが多く扱われた。昨今であれば、コンビニエンス・ストアで手に取ったり、電卓の中で読むには、いささか躊躇いを感じるむきもあるかもしれない。

読者投稿が主ではあったが、^{※1}柳田謙十郎、^{※2}小田切秀雄、^{※3}真下信一ら知識人による哲学・文学・社会批評の論説も掲載された。読書案内が示されることも多く、平易な人生論のみならず、哲学やマルクス主義系の書物も紹介された。

そこには、「読書を通じた人格陶冶」という教養主義の規範が垣間見える。大正期から一九六〇年代にかけて、旧制高校や大学キャンパスでは、教養主義文化が色濃く見られた。そこで要求されるほどの難解さはないにせよ、「知への憧れ」と読書を通じて人格陶冶の規範は、人生雑誌の読者にも共有されていた。大衆教養主義とも呼ばばよいだろうか。

今日では(さらに言えば、私が大学生だった四半世紀前でも)大学キャンパスでさえ、この種の規範は見られない。義務教育だけで学歴を終えたか、あるいは日中の仕事を終えて夜間の定時に通うような一九五〇年代の人生雑誌の読者たちは、なぜ、こうした価値観を共有できたのだろうか。それを詳らかに見てみると、彼らから見た戦後の像が浮かび上がる。

鬱屈という駆動因

人生雑誌の主要読者は、高学歴ではないものの、義務教育課程では優等生であった者が少なくない。彼らが上級学校への進学を夢見たのは、当然である。しかし、家計の困窮のゆえに進学できず、農家を継いだり、都市部の小工場・小商店で住み労働に従事した。折しも集団就職の草創期である。

当時の高校進学率は、五〇・四パーセントに達していた(一九五四年)。これが一〇パーセント程度であれば、「進学したくてもできない」ことは、まだしもよくあることと諦めもついたかもしれない。だが、同級生の半数が義務教育以上の課程に進むようになると、「進学できる力があるのに……」「自分より成績が下の奴が高校に行けるのに……」という鬱屈を抱くのは自然なことである。人生雑誌は、こうした心情を抱く読者たちに支えられていた。^{※5}「人生手帖」の編集を手がけ、一九六〇年には青春の手帖を創刊した大和岩雄は、こう述べている――「僕が雑誌をつくっていたときの気持、それは、^{※6}小学生のとき、進学組と就職組に、ただ家が貧しいからというそれだけの理由で分けられ、差別されたくやしい思いを、進学組の連中にはわからないだろうが、わかる連中にぶちまけた。それが『進』であり、『人生手帖』であり、『青春の手帖』だった。これらの雑誌は、書き手も就職組、読み手も就職組、そして編集者も就職組なのだ(『大和書房三十年のあゆみ』一九九一年)。

だが、彼らは勉学の道が断たれたとはいえず、^{※7}ユウキョウに浸ることをよしとはしなかった。彼らは「順調なコースを歩む若者」ではなかったが、「マンボにうつつをぬかず連中」とも一線を画そうとした(『週刊朝日』一九五五年七月一七日号)。
 それは、彼らが総じて「勉強がよくてきた」層であったことを考えれば、当然であろう。「進学組」になることは諦めざるを得なかったが、かといって、「マンボにうつつをぬかず連中」に下方同一化することも避けなければならなかった。

ささやかな上昇志向

そこで求められたのが、「生き方」と読書だった。「まじめ」に生き方を考えることは、「マンボにうつつをぬかず連中」の差異化を生み出す。書物に親しもうとするスタンスは、少しでもエリート文化に近づくと実感させる。

たしかに彼らは、「進学組」ではなく「就職組」に振り分けられた。だが、人生雑誌を通して「生き方」と「読書」にふれることで、彼らは同じ「就職組」のなかでも、知的な面で限りなく「進学組」に近いという自己認識を創り、それをインプットすることができる。人生雑誌は、彼らのこうした、ささやかな「上昇志向」に裏打ちされていた。

とはいえ、彼らにとって露骨な立身出世欲はひた隠しにすべきものであった。上級学校に進めなかつた以上、勉学とはまったく異なる商売で財を成すべく、日常の仕事にポツツするという選択放棄もあり得ただろう。しかし、「実利」のみを追求することは、「真実の生き方」知的なものといった形而上的な関心とはベクトルを異にする。

そもそも、仕事に満足感を抱けないケースも少なくなかった。進路指導による意に沿わない企業への振り分け、劣悪な労働条件、高卒・大卒の従業員との格差、「のれん分け」が期待できない状況なども相まって、新規中途者が採用後一年以内に離職する比率は、きわめて高かった。進学への憧れを、職務セイレイという目標に転移することは、容易ではなかった。

同時に、「生き方」という形而上的な主題への関心を語ることは、「進学組」に劣らないことを暗示するものであった。学歴獲得のための勉学は、「ガリ勉」であり、「実利」に懸念するものではない。それに対し、彼らは「生き方」という「過激な理想」向き合っている。そうした自負を、彼らはしばしば語っていた(座談会「定時制高校生のようごびとかなしみ」『人生手帖』一九五九年七月号)。

こうした意識が共有されるうえで、「雑誌」というメディアの機能は重要である。書籍であれば、読者は著者に向き合うだけであり、かつ、それも読書をしている一時期に限られる。しかし、雑誌の場合、読者投稿も多く、近い境遇の「見えない仲間」を可視化させる。かつ、月刊で定期的に刊行されることは、彼らへの持続的な接触を可能にする。鬱屈と上昇志向がない交ぜになった心情を共有できるような、ヴァーチャルな読者共同体への参加感覚が、人生雑誌の誌面の背後に浮かび上がっていたのである。

「生き方」への関心は、社会問題を問うことにも接続した。仕事の苦悩を語る延長で、労働問題や資本主義批判が議論された。出征経験を持つ投稿者は、戦時中に競争遂行を批判的に捉え得なかった自らを問いつつ、再準備問題を論じることもしばしばであった。「葦」や「人生手帖」は、左派政党の影響下になことを強調したが、左派的な社会批判の志向は色濃く見られた。『週刊朝日』(一九五五年七月二日号)は、この両誌を「さびしい唯物弁証法の議論はなく、哲学的、文学的なオブラートに左翼的な立場を包んでいる」と評した。「マルクスみかん水」(大宅壮一)とも呼ばれたゆえである。

「政治の手帖」との齟齬

だが、一九六〇年代にもなると、人生雑誌は弱りを見せ始める。「葦」は一九六〇年に休刊し、『人生手帖』は最盛期の三分の一ほどに部数を落とした。「青春の手帖」は一九六〇年に創刊されたが、売れ行きは芳しくなく、ほどなく月刊から季刊に変更、のちには終刊に至った。大和岩雄は、こうした状況について、「雑誌」と読者との共感がお互いにビツクリしなくなつた「就職組の発想だけでは、今の十代後半、二十代前半の読者とうまく合わない(前掲書)と述べていた。

折しも、高度経済成長を迎えつつあり、高校進学率も一九六三年には六六・八パーセント、一九六五年には七〇・七パーセントに達した。「学力があるのに、家計の理由で進学できない」層は、少なくなり、必然的に人生雑誌を駆動していた「就職組の鬱屈」は、徐々に見られなくなる。

六〇年安保のインパクトも無視できないように思われる。¹²六〇年安保闘争は東京のみならず全国的に高揚し、条約ビジュン前日の六月二二日には全国で六二〇万人が統一行動に参加した。それは、知識人から労働者、主婦まで、幅広い層を取り込むものであった。しかし、当時の「人生手帖」をめくってみると、安保改定に関する論説はほとんど見られない。さすがにビジュン直前には安保批判の文章がいくつ掲載されたが、やはり総合雑誌に比べれば、扱いは小さい。

そこには、「アガカ雑誌」であるとして、住込み読者の雇用主が購読を止めさせることがないように、という配慮もあったのだろう。左派的な姿勢を示しつつも、共産党や社会党と組織的な関係がないことは、折に触れて強調されていた。「マルクスみかん水」であることの一つの帰結であろう。

こうした誌面構成に飽き足らなさを覚えた読者は、少なくなかった。サークル誌『山脈』(一九六〇年一月号)では、もともと「葦」の読者であった高校生が、「人生雑誌」というものに満足しなくなつた理由を綴っている。「単なる泣言の言い合いや慰め合いは沢山だ。何でもよいか「イズム」を求めているのです」まだ固まっていないもの、自分が一緒に浴けこめ担って行けるものを求めているのです——そこには、政治運動への参加欲求が満たされたいことへのもどかしさを見ることが出来る。これは六〇年安保闘争以前の記述ではあるが、運動の高揚期であれば、人生雑誌がさらなる欲求不満を生じせしめたであろうことがう

かがある。

そのようななか、人生雑誌自体にも変化が見られた。高度経済成長は公害を引き起こし、一九六〇年代末以降、反公害の住民運動が盛り上がる。左派志向が見られた『人生手帖』も、それに反応するかのようには公害問題を頻りに扱うようになった。だが、その延長で、玄米食・自然食など、健康食品の企画も、急速に増えていく。たしかに、それは「公害から身を守る」ためのものではあった。だが、健康食といった「実利」への関心は、「生き方」のような形而上的な関心を結果的に後退させた。発行元の文理書院は、一九七一年に、店販部門として早稲田自然食品センターを立ち上げ、一九七四年には『人生手帖』も「健康ファミリー」へと誌名変更された。かつては「生き方」読書「社会批判」が結びついていた大衆教養主義の衰退を、そこに見ることもできよう。

読者たちの「戦後」

とはいえ、これらの盛衰を経た人生雑誌の歴史を眺めてみると、ともすれば見落とされがちな社会の歪みが、透けて見える。再準備問題が論争を引き起こしていた一九五〇年代半ば、『人生手帖』『葦』等は保安隊員・自衛隊員の投稿をたびたび掲載した。そこでは、長男でないゆえに農家を継ぐこともできず、かといって他に職も得られないために、心ならずも自衛隊に就職するしかなくなつた苦境も綴られていた。自衛隊を断罪しがちな知識人言説や左派系総合誌とは、やや異質であった。

大学紛争についても、人生雑誌ならではの批判が見られた。『人生手帖』(一九六九年五月号)では、このテーマに関する投稿が集められた。そこには、「恵まれた環境に甘えるな」今日でも、家が貧しいために義務教育である中学校にさえ進学できずに働き、そして夜の中学校で学んでいる十四才、十五才の人たちはもちろん、二四才、六〇才の中学生もいる」という記述が見られる。投稿者は大学生たちと同年代であったが、なかには、経済的な理由で大学はおろか、高校にも進学できなかった者もあつた。当時は経済成長の只中であり、「昭和元祿が謳われた時代であった。そこで貧乏がちな貧困と、彼らの社会への違和感が、人生雑誌の紙面に滲んでいたのである。

それにも、人生雑誌はこれまで、学問の世界であまり関心が払われることはなかった。そのことも、やや気になるものがある。おそく理由がなかつたわけではあるまい。人生雑誌は研究者にとって思想的な深さを帯びたものでもなければ、彼らが期待する「大衆性」(抵抗の契機を感じさせるものでもなかつた)のたつた。誌面を「戦う」まじめに「前向き」な市井道徳や、学歴をめぐる鬱屈に、研究者が食傷を覚えたであろうことは想像に難くない。だが、そのことで見えなくなったものも、少なくはないのではない。

人生雑誌の読者たちは、知識人と大衆、「順調なコースを歩む若者」と「マンボにうつつをぬかす連中」のはさまにあつて、揺れ動く存在であった。彼らは良くも悪くも「上昇志向」を有しており、それゆえに、さまざまな希望や期待が裏切られる経験をねばならなかった。それは、彼らだけに生じた問題というより、彼らを通して初めて透けて見える「戦後の歪み」だったのである。人生雑誌を見渡すことは、こうした戦後を問うことであり、かつ、人生雑誌を正面から扱わなかつた知のありようを問うこともできるのかもしれない。

注 *1 柳田謙十郎『哲学者』(一九九三)一九八二 *2 小田切秀雄『文芸評論家』(一九六一)二〇〇〇 *3 真下信一『哲学者』(一九〇六)一九八五 *4 マルクス主義『ドク』の経済学者、哲学者のマルクス(二八)一八一―一八三とエンゲルス(二八)二〇一―一八九五が打ち出した諸理論の体系 *5 大和岩雄『編集者』出版事業者(一九二八)二〇二二 *6 小学生のとき『大和岩雄が小学生だった時期の小学校は、六年間の尋常小学校と二年間の高等小学校の課程があり、尋常小学校の六年間が義務教育課程であった。 *7 マンボラテン音楽のダンス曲の一つ *8 形而上』形がなく、感覚ではその存在を知ることのできないもの。時間、空間を超越した、抽象的、普遍的、理念的なもの。 *9 左派』政党などの組織の中で急進的な派。唯物弁証法の立場に立つ弁証法、弁証法を唯物論の上に展開させ、自然と社会の歴史的發展を物質的存在の弁証法的发展によって説明した理論。 *10 大宅壮一『ジャーナリスト、ノンフィクション作家』(一九〇〇)一九七〇 *12 六〇年安保闘争一九六〇年五月から七月にかけて頂点に

達した日米安全保障条約改定反対の闘争。連日国会をデモ隊が取り囲み労働組合も抗議のストライキを遂行したが、岸内閣は新条約閣印を強行した。
*13 アカハ革命旗が赤色であることから、共産主義、社会主義、およびその主義者をさしている。
*14 社会党(日本社会党)の略称。一九四五年に結成され、一九九六年に党名を社会民主党に変更するまで存続した。
*15 昭和元祿(元祿)「高度経済成長期の太平洋」を元祿時代になぞらえた語。

問1 一九五〇年代半ばの人生雑誌について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 一九五〇年代半ばの人生雑誌は、高校など上級学校に進学できなかった青少年層を主要読者とし、「いかに生きるべきか」を主題としていたが、そのことはいまとなっては忘れられた感がある。
- b 一九五〇年代半ばの人生雑誌は、「悔いのない生き方を求めて」「人生いきるに備するや」といったテーマが多く扱われ、昨今であれば、コンビニエンス・ストアで手に取ったり、電車の中で読むのにふさわしいものである。
- c 一九五〇年代半ばの人生雑誌は、知識人による哲学・文学・社会批評の論議が主に掲載され、読書案内では平易な人生論のみならず、哲学やマルクス主義系の書物も紹介された。
- d 一九五〇年代半ばの人生雑誌は、旧制高校や大学キャンパスに見られた教養主義文化ほどの難解さはないが、「知への憧れ」「読書を通じた人格陶冶」の規範が、読者にも共有されていた。
- e 一九五〇年代半ばの人生雑誌は、義務教育だけで学歴を終えたか、あるいは日中の仕事を終えて夜間の定時に通うような読者たちのみに共有された「読書を通じた人格陶冶」の規範を浮かび上がらせるものである。

問2 人生雑誌の主要読者について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 人生雑誌の主要読者は、高学歴ではないものの、義務教育課程では優等生であった者が少なくなく、彼らは家計の困窮のゆえに進学できず、農家を継いだり、都市部の小工場・小商店で任込み労働に従事したため、進学した同級生に対して鬱屈した心情を抱いていた。
- b 人生雑誌の主要読者は、義務教育課程では優等生であったものの、家計の困窮のゆえに進学できなかった者が多かったが、当時の高校進学率は五〇・四パーセントに過ぎなかったため、「進学したくてもできない」とは、「よくあること」と諦めがついた。
- c 人生雑誌の主要読者は、義務教育課程では優等生であったものの、家計の困窮のゆえに進学できなかった者が多く、同級生の半数が義務教育以上の課程に進む状況下で、「進学できる力があるのに……」「自分より成績が下の奴が高校に行けるのに……」という鬱屈した心情を、読者投稿を通じて進学組の連中にぶちまけた。
- d 人生雑誌の主要読者は、「勉強がよくできた層でありながら、ただ家が貧しいからというそれだけの理由で進学組と就職組に分けられ、差別されたくやしさを抱く者が少なくなく、彼らは勉学の道が断られたことにより、鬱屈した心情を抱きながらユウキョウに浸る傾向があった。
- e 人生雑誌の主要読者は、「勉強がよくできた層でありながら、家計の困窮のゆえに「進学組」になることは諦めざるを得なかった者が多く、進学した同級生たちのような「マンボにうつつをぬかす連中」に下方同一化することを避けなければならなかった。

問3 人生雑誌の主要読者の上昇志向について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 人生雑誌の主要読者は、「まじめに生き方を考え、書物に親しもうとするスタンスによって、「マンボにうつつをぬかす連中」の差異化をはかり、エリート文化に近づきたいという上昇志向をもっていたが、露骨な立身出世欲は、「進学組」に対して、ひた隠しにすべきものであった。
- b 人生雑誌の主要読者は、「まじめに生き方を考え、書物に親しもうとするスタンスによって、「マンボにうつつをぬかす連中」の差異化をはかり、エリート文化に近づきたいと思いつつも、上級学校に進めなかった以上、勉学とはまったく異なる「商売」で財を成すべく、そうした上昇志向を抑えて日常の仕事にポットウする者が多かった。
- c 人生雑誌の主要読者は、人生雑誌を通して「生き方」と「読書」にふれることで、知的な面で限りなく「進学組」に近いという自己認識を創ることができ、人生雑誌は彼らのこうした上昇志向に裏打ちされていたが、彼らにとって露骨な立身出世欲はひた隠しにすべきものであった。
- d 人生雑誌の主要読者は、人生雑誌を通して「生き方」と「読書」にふれることで、知的な面で限りなく「進学組」に近いという自己認識を創ることができたが、彼らのこうした上昇志向は、「実利」のみを追求する日常の仕事のあり方と相容れなかった。
- e 人生雑誌の主要読者は、人生雑誌を通して「生き方」と「読書」にふれることで、知的な面で限りなく「進学組」に近いという自己認識を創ることができたが、彼らのこうした上昇志向は、「真実の生き方」「知的なもの」といった形而上的な関心とはベクトルを異にするものだった。

問4 筆者は、「雑誌というメディア」の機能について、どのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 「雑誌というメディア」は、「生き方」という形而上的な主題に関心をもち読者にとって、著者とともに「高遠な理想」に向き合えることができる機能をもつと述べている。
- b 「雑誌というメディア」は、学歴獲得のための書籍による勉学は「カリ勉」であり、自分たちは雑誌を通して「生き方」という「高遠な理想」に向き合っているという自負を、読者に共有させるような機能をもつと述べている。
- c 「雑誌というメディア」は、書籍によって著者に向き合っていた読者が、読者投稿によって自ら書き手となり、鬱屈と上昇志向がない交ぜになった心情を表現する場としての機能をもつと述べている。
- d 「雑誌というメディア」は、読者投稿を通して近い境遇の「見えない仲間」を可視化させ、彼らへの持続的な接触を可能にすることにより、ヴァーチャルな「読者共同体」への参加感覚を生み出す機能をもつと述べている。
- e 「雑誌というメディア」は、仕事の苦悩を語る読者投稿も多く、近い境遇の「見えない仲間」を可視化させ、鬱屈と上昇志向がない交ぜになった心情を、読者に共有させるような機能をもつと述べている。



問5 一九六〇年代の人生雑誌が窮りを見せ始めた理由について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 一九六〇年代は、高度経済成長を迎え、高校進学率が上がったことから、「学力があるのに、家計の理由で進学できない層が少なくなり、人生雑誌を駆動していた」就職組の鬱屈が徐々に見られなくなった。また、六〇年安保闘争の全国的な高揚のなか、人生雑誌は共産党や社会党との組織的な関係が強調されたことにより、読者が離れることとなった。
- b 一九六〇年代は、高度経済成長を迎え、高校進学率が上がったことから、「学力があるのに、家計の理由で進学できない層が少なくなり、人生雑誌を駆動していた」就職組の鬱屈が徐々に見られなくなった。また、六〇年安保闘争の全国的な高揚のなか、人生雑誌は「アカ雑誌」であるとして、住込み読者の雇用主が購読を止めさせることとなった。
- c 一九六〇年代は、高度経済成長を迎え、高校進学率が上がったことから、「学力があるのに、家計の理由で進学できない層が少なくなり、人生雑誌を駆動していた」就職組の鬱屈が徐々に見られなくなった。また、六〇年安保闘争の全国的な高揚にもかかわらず、人生雑誌は安保改定に関する論説を当初ほとんど掲載せず、読者に欲求不満を抱かせた。
- d 一九六〇年代は、高度経済成長を迎え、高校進学率が上がったことから、「学力があるのに、家計の理由で進学できない層が少なくなり、人生雑誌を駆動していた」就職組の鬱屈が徐々に見られなくなった。また、六〇年安保闘争の全国的な高揚にもかかわらず、人生雑誌は読者の求める「イズム」を読み誤ったため、読者が離れることとなった。
- e 一九六〇年代は、高度経済成長を迎え、高校進学率が上がったことから、「学力があるのに、家計の理由で進学できない層が少なくなり、人生雑誌を駆動していた」就職組の鬱屈が徐々に見られなくなった。また、六〇年安保闘争の全国的な高揚にもかかわらず、人生雑誌は政治運動への参加方法の掲載が十分ではなく、読者に欲求不満を抱かせた。

問6 一九六〇年代末以降の人生雑誌の変化について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 一九六〇年代末以降、反公害の住民運動が盛り上がり、人生雑誌「人生手帖」も公害問題を頻繁に扱うようになった。その延長で、玄米食・自然食など、健康食品の企画も増えていったが、健康食といった「実利」への関心は、結果的に「生き方」のような形而上的な関心を後退させた。
- b 一九六〇年代末以降、反公害の住民運動が盛り上がったが、人生雑誌「人生手帖」は公害問題を扱うことには慎重であった。代わりに、玄米食・自然食など、健康食品の企画を入れていったが、こうした社会問題を正面から取り上げない姿勢は、結果的に人生雑誌の衰退を引き起こした。
- c 一九六〇年代末以降、反公害の住民運動が盛り上がり、人生雑誌「人生手帖」も公害問題を頻繁に扱うようになった。その延長で、玄米食・自然食など、健康食品の企画も増えていったが、「生き方」のような形而上的な関心をもつ読者には敬遠され、結果的に人生雑誌の衰退を引き起こした。
- d 一九六〇年代末以降、反公害の住民運動が盛り上がったが、人生雑誌「人生手帖」は公害問題を扱うことには慎重であった。代わりに、玄米食・自然食など、健康食品の企画を入れていったが、こうした健康食を扱う雑誌に移行したことにより、誌名を「健康ファミリー」に変更することになった。
- e 一九六〇年代末以降、反公害の住民運動が盛り上がり、人生雑誌「人生手帖」も公害問題を頻繁に扱うようになった。その延長で、玄米食・自然食など、健康食品の企画も増えていったが、こうした健康食への関心は、左派志向が見られた雑誌の性格を保守的なものへと変えることとなった。

問7 筆者は、人生雑誌のあり方を通して、どのようなことを読み取っているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 一九五〇年代半ばの人生雑誌は、保安隊員・自衛隊員の投書をたびたび掲載し、そこでは、長男でないゆえに農家を継ぐこともできず、かといって他に職も得られないために、心ならずも自衛隊に就職するしかなかった苦境も綴られていたが、これは知識人言説や左派系総合誌とはやや異質であり、人生雑誌の読者層に特有の苦勞を読み取っている。
- b 大学紛争をテーマにした投稿が集められ、「悪まれた環境に甘えるな」今日でも、家が貧しいために義務教育である中学校にさえ進学できずに働き、そして夜の中学校で学んでいる十四才、十五才の人たちはもちろん、二十四才、六〇才の中学生もいる」という投稿が採用されていることから、人生雑誌の編集者の左派志向を読み取っている。
- c 経済成長の只中にあつた当時、人生雑誌の投稿者は大学生たちと同年代であつたが、経済的な理由で大学はおろか、高校にも進学できなかった者もあつたことから、人生雑誌の誌面の中では貧乏がちな貧困と、彼らの社会への違和感を読み取っている。
- d 人生雑誌は研究者にとつて思想的な「深さ」を帯びたものでもなければ、彼らが期待する「大衆性」抵抗の契機を感じさせるものでもなく、誌面を敢う「まじめ」で「前向き」な市井道德や、学歴をめぐる鬱屈に、一般の読者も食傷を覚えたであろうことを読み取っている。
- e 知識人と大衆のはざまにあつて、揺れ動く存在であつた人生雑誌の読者たちは、良くも悪くも「上昇志向」を有しており、それゆえに、さまざまな希望や期待が裏切られる経験を経ねばならなかつたのだが、そうした読者層をもつ人生雑誌を見渡すことにより、「戦後の歪み」を読み取っている。

問8 二重傍線部①②③④⑤のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- ① ユウキョウ
 - ② イシ
 - ③ ポットウ
- a 彼の借金の返済を一年間ユウヨした。
 - b 彼女はユウフクなので、恵まれない子供たちに寄附をした。
 - c 私の趣味は俳句をユウキンすることだ。
 - d 彼はカンユウされてラグビー部に入部することにした。
 - e 彼女の短所は、ユウジュウファンな性格で決断力がない点だ。
- a その事件はイセンとして謎に包まれたままだ。
 - b 大久保利通は幕末イシの志士として知られている。
 - c 彼は弁護士に訴訟の代理人をイシした。
 - d 認知症になり、脳の一部がイシしていることが分かった。
 - e 長年の彼の会社での功勞をねぎらうためにイロウカイを開いた。
- a 政治家が選挙活動でガイトウ演説をする。
 - b 個人トウシカ向けの説明会が開かれた。
 - c 今期の目標にはトウテイ及ばない。
 - d あの会社は人手不足を理由にトウサンした。
 - e 容疑者が海外にトウボウした。

a サッカーの試合でイギリスにエンセイスする。
 b 私は、高校入学時に、「校則を守るというセイヤクシヨを書いた。
 c 次世代をになう若手の技術者をイクセイスする。
 d 時計は高度な加工技術が必要なのでセイヤクシヨと書かれる。
 e 第一次世界大戦の戦場はセイヤクシヨを極めた。

a この小説は、実際の事件を素材にジュンシヨクを施した作品だ。
 b 血液は心臓を出発して体内をジュンシヨクし心臓に戻る。
 c 今年の大相撲のジュンギョウ日程が示された。
 d 彼は希望通りジュンカンゴンになった。
 e ジュンシヨクした警察官を僥倖追検会が催された。

二 次の文章は、「とりかへばや物語」の一節である。大納言(本文中では「殿」)の家には、男児と女兒が一人ずついたが、女兒は男性として(本文中では「侍従の君」「侍従」)、また男児は女性として(本文中では「妹の姫君」「姫君」)育てられ、青年期を迎えていた。これを読んで、後の問いに答えよ。

帝は、失せたまひにし(1)の御腹に女一の宮一人おはしますを、あはれに心苦しきことに、御目放たずもてかしづきたてまつらせたまふ。さらでは、内、春宮にも男御子のおはしまさぬを、天の下の大事にて、我も我もと御祈り願なし。右大臣殿の女御やんごとなくさぶらひたまふれど、一の人の御むすめならねば、后にもえ居たまはず。帝は、この女一の宮の御ことを朝夕にうしろめたく思ひ嘆きて、この侍従の有様この世のものとも見えずなりゆくを、この宮の御後見をせさせばやと、御覽するたびごとに御目どまらる。御後見などはかばかしからぬ故にや、まだいと若くあうなくおはしますを、妹の姫君のさばかりめでたかなるに見馴らひて、めざましき心も御覽せられんと、まだいとものげなきほど、少しものしきほどに見なして、などぞ思しめしける。

かやうの御氣色を漏り聞きたまふにも、殿は胸うち騒ぎて、あはれ、かからざらましかばいかに面目あり、うれしからまし、と口惜しく心憂きものから、すこしほほ笑まれてぞ聞きたまふ。侍従の君は、いと心かしこく、かばかりのほどにも似ずあるべからしめたく、内裏わたりにも、御方々の女房など見るごとに心化粧せられて、つゆの一言葉もいかでかけられしがなと見えしらがひけり。よからぬ身を思ひ知りながら、あり初めにける身をえもて隠しやる方なくて交しらふにこそあれ、何かは目のとまらん、いとまめやかにもてをさめたるを、さうざうしく口惜しと思ふ人多かり。

その頃の帝の御叔父に式部卿の官ときこゆる人の御ひとつ子の君、この侍従の君には二つばかりのこのかみにて、容貌、有様いと侍従のほどにこそはほはね、なべての人よりはこよなくすぐれてあてにをかし、心はへたとしへなく、かからぬ限なく好ましくなよびなまめかしくて、思ひ至らぬ方なき心にて、この殿の姫君、右の大臣の四の君、とりどりに名高く言はれたまふをいづれをもいかでと思ふ心深くて、さるべき方よりあながちにたづね寄りつつ心のかきり書き尽くし無られわぶれど、人柄のいとあだなるに、つゆのこともあなゆゆしといづ方にも思し離れて返事する人もなきを、わりなく嘆きつつ、この侍従の、あまりいみじくものまめやかに乱るる所なくをさめたるこそあまりさうさうしきやうなれど、見る目容貌の似るものなく愛敬こぼれてうつくしきさまの、かかる女のあらましかばと見るたびにいみじく思はしきを、妹もかくこそはものしたまふらめ。女はいま一際まざるらんほどよ、と思ひやるに、見たてまつらでやむべき心地もせず。わびしままにこの君をいとよく語りひて、思ひあまるときは涙もつまず憂へ泣きかくるさまの、人よりすぐれてあはれになまめきたるを、いとほしくあはれに、こと人よりはなつかしくうち語りながら、我はいとうちとけ陸びられす。うち出づることには、人の御身の世づかざりけることのみ知らるるに、胸うちつぶるれば、いたくもあひしらはす、言少ななるほどに、心恥づかしうのみもてなしたるを、如く恨めしと涙をもつまず、思ひ無られたる気色の心苦しきを見ることにも、

類なく憂き身と思ひ知るからにさや涙のうきまてながる。

とを答へまほしけれど、何事をさと思ふぞと問ひかからんも、述べどころなければ、ただ情けなくもてすぐよかなるさまにてぞたち別れる。かかるほどに、帝、御心地例ならで、久しくなりぬるはさるべきにこそはあらめ、いにしへもさる例なくや、と思して、春宮に御位を譲りたまひて、女一の宮を春宮に据えたまひて、わが御身は朱雀院におはします。

(「とりかへばや物語」による)

注 *1 式部卿の宮に式部省の長官である親王。

問1 帝の後宮や子どもはどのような状況であるか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 帝は、亡くなった後の生んだ女一の宮が一人いらっしやるのだが、気の毒でかわいそうなこと、お目を離さずに大切に育ててにっている。他に、帝にも春宮にも男児がいらっしやるのを、天下の一大事として、男児を授かるように、我も我もとご祈禱が絶え間なく行われる。右大臣のむすめである女御は、大変高貴なお方であらうから、朝廷での席次が一番高い人のむすめではないので、后にもおつきにならない。

b 帝は、亡くなった後の生んだ女一の宮が一人いらっしやるのだが、愛おしく不憚なこと、お目を離さずに大切に育ててにっている。他に、帝にも春宮にも男児がいらっしやるのを、天下の一大事として、男児を授かるように、我も我もとご祈禱が絶え間なく行われる。右大臣のむすめである女御は、重々しいお方として帝のそばにお仕えしていらっしやるのだが、朝廷での席次が一番高い人のむすめではないので、后にもおつきにならない。

c 帝は、亡くなった後の生んだ女一の宮が一人いらっしやるのだが、気がかりで痛ましいこと、お目を離さずに大切に育ててにっている。他に、帝にも春宮にも男児がいらっしやるのを、天下の一大事として、男児を授かるように、我も我もとご祈禱が絶え間なく行われる。右大臣のむすめである女御は、たいそう心優しいお方として有名であらうから、朝廷での席次が一番高い人のむすめではないので、后にもおつきにならない。

d 帝は、亡くなった後の生んだ女一の宮が一人いらっしやるのだが、かわいらしく心配なこと、お目を離さずに大切に育ててにっている。他に、帝にも春宮にも男児がいらっしやるのを、天下の一大事として、男児を授かるように、我も我もとご祈禱が絶え間なく行われる。右大臣のむすめである女御は、非常に聡明な方であると認めざるを得ないので、朝廷での席次が一番高い人のむすめではないので、后にもおつきにならない。

e 帝は、亡くなった後の生んだ女一の宮が一人いらっしやるのだが、かわいそうでやりきれないこと、お目を離さずに大切に育ててにっている。他に、帝にも春宮にも男児がいらっしやるのを、天下の一大事として、男児を授かるように、我も我もとご祈禱が絶え間なく行われる。右大臣のむすめである女御は、とても人柄が素晴らしいので、朝廷での席次が一番高い人のむすめではないので、后にもおつきにならない。

問2 帝は女一の宮の将来についてどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 帝は、侍従の君がこの世で恐れるものがないほど自信にあふれていく様子を受け、女一の宮の後見にしたいと思われ。女一の宮はまだ若く思慮に欠けていらっしやるのを、帝は「侍従は、妹の姫君がたいそう見事であることに慣れているから、宮に理想的な容姿を求めてしまうのではないかと」思い、「侍従もまだ一人前ではないので、もう少し立派な身分になったのを見届けてから」などとお考えになる。

b 帝は、侍従の君がこの世のものと思えないほど素晴らしい様子を受け、女一の宮の後見にしたいと思われ。女一の宮はまだ若く思慮に欠けていらっしやるのを、帝は「侍従は、妹の姫君がたいそう見事であることに慣れているから、宮に理想的な容姿を求めてしまうのではないかと」思い、「侍従もまだ一人前ではないので、もう少し立派な身分になったのを見届けてから」などとお考えになる。

c 帝は、侍従の君がこの世で恐れるものがないほど自信にあふれていく様子を受け、女一の宮の後見にしたいと思われ。女一の宮はまだ若く思慮に欠けていらっしやるのを、帝は「侍従は、妹の姫君がたいそう見事であることに慣れているから、宮に理想的な容姿を求めてしまうのではないかと」思い、「宮もまだ一人前ではないので、もう少し立派な身分になったのを見届けてから」などとお考えになる。

d 帝は、侍従の君がこの世のものと思えないほど素晴らしい様子を受け、女一の宮の後見にしたいと思われ。女一の宮はまだ若く思慮に欠けていらっしやるのを、帝は「侍従は、妹の姫君がたいそう見事であることに慣れているから、宮に理想的な容姿を求めてしまうのではないかと」思い、「宮もまだ一人前ではないので、もう少し立派な身分になったのを見届けてから」などとお考えになる。

e 帝は、侍従の君がこの世のものと思えないほど素晴らしい様子を受け、女一の宮の後見にしたいと思われ。女一の宮はまだ若く思慮に欠けていらっしやるのを、帝は「侍従は、妹の姫君がたいそう見事であることに慣れているから、宮に失礼な態度をお見せするのではないかと」思い、「侍従もまだ一人前ではないので、もう少し立派な身分になったのを見届けてから」などとお考えになる。

問3 侍従はどのような人物として語られているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 侍従は、大変聡明で、成人したばかりの若さにも似ず、理想的で見事であり、後宮の御方々に仕える女房などは、侍従から良く思われようと行動に気を配り、ほんの一言でも声をかけてみたいと、わざと目を引くように振舞った。侍従本人は、普通ではない自身の身の上を思い知りながら、男として社会に交わり始めた身をとこかに隠すすべもなく宮仕えをしていく状況であり、どうして女性たちに興味を持つことがあろうかと思つて、たいそう真面目に慎んでいた。

b 侍従は、大変聡明で、成人したばかりの若さにも似ず、理想的で見事であり、後宮の御方々に仕える女房などは、侍従から良く思われようと行動に気を配り、ほんの一言でも声をかけてみたいと、わざと目を引くように振舞った。侍従本人は、尋常ではない女性たちの恋心を知りながら、男として社会に交わり始めた身をとこかに隠すすべもなく宮仕えをしていく状況であり、なんとしても女性であると気付かれてはいけないと思つて、たいそう真面目に慎んでいた。

c 侍従は、大変聡明で、成人したばかりの若さにも似ず、申し分なく立派であり、後宮の御方々に仕える女房などは、侍従から良く思われようと行動に気を配り、ほんの一言でも声をかけてみたいと、わざと目を引くように振舞った。侍従本人は、尋常ではない女性たちの恋心を知りながら、男として社会に交わり始めた身をとこかに隠すすべもなく宮仕えをしていく状況であり、どうして女性たちに興味を持つことがあろうかと思つて、たいそう真面目に慎んでいた。

d 侍従は、大変聡明で、成人したばかりの若さにも似ず、申し分なく立派であり、後宮の御方々に仕える女房などは、侍従から良く思われようと行動に気を配り、ほんの一言でも声をかけてみたいと、わざと目を引くように振舞った。侍従本人は、尋常ではない女性たちの恋心を知りながら、男として社会に交わり始めた身をとこかに隠すすべもなく宮仕えをしていく状況であり、なんとしても女性であると気付かれてはいけないと思つて、たいそう真面目に慎んでいた。

e 侍従は、大変聡明で、成人したばかりの若さにも似ず、申し分なく立派であり、後宮の御方々に仕える女房などは、侍従から良く思われようと行動に気を配り、ほんの一言でも声をかけてみたいと、わざと目を引くように振舞った。侍従本人は、普通ではない自身の身の上を思い知りながら、男として社会に交わり始めた身をとこかに隠すすべもなく宮仕えをしていく状況であり、なんとしても女性であると気付かれてはいけないと思つて、たいそう真面目に慎んでいた。

問4 ひとつ子の君はどのような人物であるか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a ひとつ子の君は、この侍従より二歳年上で、顔立ちや容姿は、侍従ほど憧れられることもなかったが、全ての人よりも格別に妖艶で美しく、人柄は比べようがないほどである。

b ひとつ子の君は、この侍従より二歳年上で、顔立ちや容姿は、侍従ほど美しさがあふれているわけではないが、普通の人以上はるかに高貴で素晴らしい。人柄は比べようがないほどである。

c ひとつ子の君は、この侍従より二歳年上で、顔立ちや容姿は、侍従と同じほどに素晴らしいものであり、周囲の人よりもはるかに優雅で美しく、人柄はこれといった欠点がない。

d ひとつ子の君は、この侍従より二歳年上で、顔立ちや容姿は、侍従ほど美しさがあふれているわけではないが、並みの人以上も格別に上品で美しく、人柄はこれといった欠点がない。

e ひとつ子の君は、この侍従より二歳年上で、顔立ちや容姿は、侍従ほど美しさがあふれているわけではないが、大抵の人よりもはるかに繊細で素晴らしい。人柄は比べようがないほどである。

問5 ひとつ子の君の女性に対するふるまいはどのようであるか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ひとつ子の君は、片隅に住む女性であっても言い寄るほどの色好みで、もの柔らかで情緒があり、どんな女性に対しても思いをかける性格である。大納言の姫君と右大臣の四の君が、それぞれ美しさと有名となつていらつしやるのを、どちらともなつかして手に入れたいと願う気持ちが強し、自分にふさわしい方から順に言い寄り、思いのたけを手紙で書き尽くし、いらいらと気をもんでいる。
- b ひとつ子の君は、片隅に住む女性であっても言い寄るほどの色好みで、もの柔らかで情緒があり、どんな女性に対しても思いをかける性格である。大納言の姫君と右大臣の四の君が、それぞれ美しさと有名となつていらつしやるのを、どちらからだけでもなつかして手に入れたいと願う気持ちが強く、しかるべき筋から強引に言い寄り、思いのたけを手紙で書き尽くし、いらいらと気をもんでいる。
- c ひとつ子の君は、片隅に住む女性であっても言い寄るほどの色好みで、もの柔らかで情緒があり、どんな女性に対しても思いをかける性格である。大納言の姫君と右大臣の四の君が、それぞれ美しさと有名となつていらつしやるのを、どちらからだけでもなつかして手に入れたいと願う気持ちが強く、しかるべき筋から強引に言い寄り、思いのたけを手紙で書き尽くし、いらいらと気をもんでいる。
- d ひとつ子の君は、片隅に住む女性であっても言い寄るほどの色好みで、もの柔らかで情緒があり、どんな女性に対しても思いをかける性格である。大納言の姫君と右大臣の四の君が、お互い相手の方が美しいと評価していらつしやるのを、どちらからだけでもなつかして手に入れたいと願う気持ちが強く、しかるべき筋から強引に言い寄り、思いのたけを手紙で書き尽くし、いらいらと気をもんでいる。
- e ひとつ子の君は、片隅に住む女性であっても言い寄るほどの色好みで、もの柔らかで情緒があり、どんな女性に対しても思いをかける性格である。大納言の姫君と右大臣の四の君が、お互い相手の方が美しいと評価していらつしやるのを、どちらともなつかして手に入れたいと願う気持ちが強く、自分にふさわしい方から順に言い寄り、思いのたけを手紙で書き尽くし、いらいらと気をもんでいる。

問6 ひとつ子の君は侍従とその妹の姫君について、どのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ひとつ子の君は、「この人が女性だつたらいいのに」と侍従を見るたびに深く物思いをしてしまい、「妹もこのように美しくいらつしやるのだろう。女性であれば、より一層の美貌であろうことよ」と想像するにつけ、妹の姫君に逢わずにいることなどできない気がする。
- b ひとつ子の君は、「この人が女性だつたらいいのに」と侍従を見るたびに深く物思いをしてしまい、「妹にも一度逢つてみたいものだ。女性であれば、より一層の美貌であろうことよ」と想像するにつけ、侍従との対面を今よりも減らしてしまふ気持ちにはなれない。
- c ひとつ子の君は、「このような女性がいればいいのに」と侍従を見るたびに深く物思いをしてしまい、「妹もこのように美しくいらつしやるのだろう。女性であれば、より一層の美貌であろうことよ」と想像するにつけ、侍従との対面を今よりも減らしてしまふ気持ちにはなれない。
- d ひとつ子の君は、「このような女性がいればいいのに」と侍従を見るたびに深く物思いをしてしまい、「妹にも一度逢つてみたいものだ。女性であれば、より一層の美貌であろうことよ」と想像するにつけ、侍従との対面を今よりも減らしてしまふ気持ちにはなれない。
- e ひとつ子の君は、「このような女性がいればいいのに」と侍従を見るたびに深く物思いをしてしまい、「妹もこのように美しくいらつしやるのだろう。女性であれば、より一層の美貌であろうことよ」と想像するにつけ、妹の姫君に逢わずにいることなどできない気がする。

問7 ひとつ子の君と侍従との関係は、どのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ひとつ子の君はやりきれない思いのままに侍従とよく語り、こらえきれない時は涙も隠さず悲しみを訴えて泣きついてくる、その姿が人よりすぐれてしみじみと優美なのを、侍従はいとおしく気の毒に思い、他の人より親しく語り合うもの、侍従自身は心から打ち解けて気を許すことができる。
- b ひとつ子の君はやりきれない思いのままに侍従とよく語り、こらえきれない時は涙も止められずつらそうに泣きじゃくっている、その姿が人よりすぐれてしみじみと優美なのを、侍従はいとおしく気の毒に思い、妹の姫君のこと以外は親しく語り合うもの、侍従自身は心から打ち解けて気を許すことができる。
- c ひとつ子の君はやりきれない思いのままに侍従とよく語り、こらえきれない時は涙も止められずつらそうに泣きじゃくっている、その姿が人よりすぐれてしみじみと優美なのを、侍従はいとおしく気の毒に思い、他の人より親しく語り合うもの、侍従自身は自分から妹に逢わせる気にはならない。
- d ひとつ子の君はやりきれない思いのままに侍従とよく語り、時間に余裕がある時は涙も隠さず悲しみを訴えて泣きついてくる、その姿が人よりすぐれてしみじみと優美なのを、侍従はいとおしく気の毒に思い、妹の姫君のこと以外は親しく語り合うもの、侍従自身は心から打ち解けて気を許すことができる。
- e ひとつ子の君はやりきれない思いのままに侍従とよく語り、時間に余裕がある時は涙も隠さずつらそうに泣きじゃくっている、その姿が人よりすぐれてしみじみと優美なのを、侍従はいとおしく気の毒に思い、他の人より親しく語り合うもの、侍従自身は自分から妹に逢わせる気にはならない。

問8 ひとつ子の君が妹の姫君のことを話題に出した際の、侍従の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ひとつ子の君が妹の話を話すたびに、妹の身がまだ帝のもとに上がっていないだけのことだと知っており、胸がしめつけられるので、きちんとした対応もせず、言葉少なながらも、素晴らしい妹を誇示するような態度で接していた。
- b ひとつ子の君が妹の話を話すたびに、妹の身がまだ帝のもとに上がっていないだけのことだと知っており、胸がしめつけられるので、きちんとした対応もせず、言葉少なに、とてもまきまりが悪く思つて接していた。
- c ひとつ子の君が妹の話を話すたびに、自分の身が世間一般とはかけ離れたものであることが思い知らされ、胸がしめつけられるので、きちんとした対応もせず、言葉少なながらも、素晴らしい妹を誇示するような態度で接していた。
- d ひとつ子の君が妹の話を話すたびに、妹の身が世間一般とはかけ離れたものであることが思い知らされ、胸がしめつけられるので、きちんとした対応もせず、言葉少なに、とてもまきまりが悪く思つて接していた。
- e ひとつ子の君が妹の話を話すたびに、自分の身が世間一般とはかけ離れたものであることが思い知らされ、胸がしめつけられるので、きちんとした対応もせず、言葉少なに、とてもまきまりが悪く思つて接していた。

問9

ひとつ子の君の様子を見た侍従はどのようであったか。最も適當なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 和歌で「他にならぶものないほどつらい身の上を思い知るからといって、そのように涙を流すことがありましようか」と答えたのであるが、「何をしてもraithたいと思うのですか」と問い掛けてきても、答えようがないため、ただ何も言えずにそっけなく別れたのだった。
- b 和歌で「他にならぶものないほどつらい身の上を思い知るからといって、はらはらと涙を流すことがありましようか」と答えたのであるが、「何をしてもraithたいと思うのですか」と問い掛けてきても、答えようがないため、ただつれなくそっけなく別れたのだった。
- c 和歌で「他にならぶものないほどつらい身の上を思い知るからといって、清らかな涙が浮かんで流れております」と答えたのであるが、「何をそのようにつらく思うのですか」と問い掛けてきても、答えようがないため、ただつれなくそっけなく別れたのだった。
- d 和歌で「他にならぶものないほどつらい身の上を思い知るからといって、そのように涙を流すことがありましようか」と答えたのであるが、「何をそのようにつらく思うのですか」と問い掛けてきても、答えようがないため、ただつれなくそっけなく別れたのだった。
- e 和歌で「他にならぶものないほどつらい身の上を思い知るからといって、清らかな涙が浮かんで流れております」と答えたのであるが、「何をそのようにつらく思うのですか」と問い掛けてきても、答えようがないため、ただ何も言えずにそっけなく別れたのだった。

- 27 -

問10

一方その頃、帝はどのようであったか。最も適當なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 帝は、ご気分がよろしくないので、「病が長くならないうちに譲位しなければならぬだろう、昔に早く譲位した例もなかったわけではない」と、お思いになって、春宮に帝の位をお譲りになり、女一の宮を春宮にお立てになって、ご自身は朱雀院にいらつしやうた。
- b 帝は、ご気分がよろしくないので、「病が長くならないうちに譲位しなければならぬだろう、昔に早く譲位した例もなかったらよかったのにと、お思いになって、春宮に帝の位をお譲りになり、女一の宮を春宮と結婚させなざつて、ご自身は朱雀院にいらつしやうた。
- c 帝は、ご体調がすぐれないため、「病が長くなっているのは譲位すべきことであろう、昔に女性を春宮にして譲位した例もなかったわけではない」と、お思いになって、春宮に帝の位をお譲りになり、女一の宮を春宮にお立てになって、ご自身は朱雀院にいらつしやうた。
- d 帝は、ご体調がすぐれないため、「病が長くなっているのは譲位すべきことなのだろうか、昔に早く譲位した例もなかったわけではない」と、お思いになって、春宮に帝の位をお譲りになり、女一の宮を春宮と結婚させなざつて、ご自身は朱雀院にいらつしやうた。
- e 帝は、ご体調がすぐれないため、「病が長くなっているのは譲位すべきことであろう、昔に早く譲位した例もなかったらよかったのにと、お思いになって、春宮に帝の位をお譲りになり、女一の宮を春宮にお預けになって、ご自身は朱雀院にいらつしやうた。

- 28 -

(以上)